

生ける死者からの手紙

エルサ・バーカー著

【作品情報】

Elsa Barker 著

『Letters from the living dead man』

(1914)

【著作権について】

本作品の原文は、著作権保護期間が満了している
(パブリックドメイン)と判断される資料に基づいて
います。

【翻訳について】

本日本語訳は、公開者本人による独自翻訳です。
既存の翻訳や他者の著作物は一切使用していません。

【注意事項】

万が一、著作権等に問題がある場合は、速やかに対応(修正・削除)いたしますのでご連絡ください。

【翻訳者】

SEIJI

【免責事項】

本翻訳は個人による学術・研究・情報提供を目的としたものです。内容の正確性・完全性について保証するものではありません。

本翻訳の著作権は翻訳者に帰属します。無断転載はご遠慮ください。

2026/5/7

序文

昨年のある夜、パリで私は強い衝動にかられて鉛筆を手に取り、何を書こうとしているのか自分でもわからないまま、書き始めました。その衝動に従うと、まるで外からつかまれたかのように私の手が動かされ、個人的な性質をもつ驚くべきメッセージが現れ、最後に「X」という署名が記されていました。

メッセージの内容ははっきりしていましたが、その署名は私を困惑させました。

翌日、私はこの書いたものを友人に見せ、「X」とは誰なのか心当たりがあるかと尋ねました。

すると彼女はこう言いました。「あら、知らないの？それは私たちがいつも〇〇氏のことをそう呼んでいる名前じゃない。」

私は知りませんでした。

その〇〇氏はパリから六千マイルも離れた場所において、私たちの考えではまだ生きているはずでした。しかし、二日後、アメリカから手紙が届き、その〇〇氏がアメリカ西部で亡くなったこと、そしてそれは私がパリで「X」と署名された自動書記のメッセージを受け取る数日前のことだったと書かれていました。

私の知るかぎり、彼の死をヨーロッパで最初に知らされたのは私でした。そこで私はすぐに友人のもとを訪れ、「X」が亡くなったことを伝えました。彼女は少しも驚いた様子を見せず、私がその「X」の手紙を見せたときに、すでに数日前からそうに違いないと確信していたのだと言いました。ただ、そのときは口に出さなかったただけだということです。

当然ながら、私はこの異常な出来事に強い印象を受けました。

「X」はスピリチュアリストではありませんでした。私自身もそうではなく、これまで一度もスピリチュアリストであったことはありません。そして記憶する限り、これ以前に、いわゆる肉体を持たない存在が私の手を通して自動的に書いたことは、わずか二度しかありませんでした。それはミディアム的な性質を持つ人物のそばにいたときに起きたものでしたが、そのメッセージは短く、私はその現象をそれほど重要なものとは考えていませんでした。

子どものころ、私は何度か他人と一緒にプランシェットに手を置いたことがあり、そのプランシェットはよくあるような取るに足らないことを書きました。あるとき、「X」の最初の手紙の数か月前、私は非職

業的なミディアムと一緒にプランシェットに手を置きました。

そのとき、亡くなった友人によるものとされる、翌年のある月に私の家で火事が起こるという予言が書かれました。そしてその予言は文字どおりの中でしたが、火事は私の手によるものではなく、私自身の部屋で起きたものでもありませんでした。

また数年前には、友人に誘われて何度か職業的な交霊会に行き、いわゆる物質化現象を見たこともありました。さらに私は、それ以外にもいくつかの現象を個人的に目撃しており、それらは死者の出現と考える以外に説明のしようがありませんでした。

しかし私は、この二つの世界のあいだの交信という問題全体に対して、異常なほど無関心でした。スピ

リチュアリズムは常に私の心を動かすことがなく、この分野の一般的な基本書さえ読んだことがありませんでした。

それにもかかわらず、私は何年ものあいだ、ほとんど毎日のように「入眠時幻覚」を見ており、それはしばしば驚くほど予言的な性質を持っていました。そして後に「X」によって与えられた説明は、それらの現象に対する真の説明であるかもしれません。

アメリカからの手紙で〇〇氏の死を知らされてまもなくのこと、その「X」が誰であることを教えてくれた友人と夕方に座っていたとき、彼女は私に、もし可能ならもう一度彼に書かせてくれないかと頼みました。

私は個人的な興味というよりも友人を喜ばせるために同意しました。すると「私はここにいる、間違え

るな」という言葉で始まるメッセージが、私の手を通して現れました。それは最初と同じく完全に自動的に書かれてましたが、文と文のあいだに途切れや間があり、文字は大きくて形も整っていませんでした。このときの力は非常に強く、翌日には私の右手と腕がしびれて動かしくなくなったほどでした。

その後数週間のあいだに、「X」の署名のある手紙がいくつも自動的に書かれてました。しかし私は熱心になるどころか、この書き方に対して強い嫌悪感を抱くようになりました。それでも、「X」が本当にこの世界と交信したいと望んでいるのなら、自分がそれを助けられることは大きな特権なのだという友人の説得によって、続けることになりました。

「X」は普通の人物ではありませんでした。彼はほぼ七十歳の著名な弁護士であり、深い哲学の研究

者であり、著書もある人物でした。その純粋な理想と情熱は、彼を知るすべての人にとって刺激となるものでした。彼の家は私の住まいから遠く離れており、私は長い間隔をおいてしか彼に会ったことがありませんでした。記憶するかぎり、私たちは死後の意識について話し合ったことは一度もありませんでした。

やがて私は自動書記に対する強い偏見を克服するにつれ、「X」が語る死後の世界の生活について興味を持つようになりました。私はその分野についてほとんど何も読んでおらず、『ジュリアからの手紙』のような一般的な本さえ読んでいなかったのも、先入観はまったくありませんでした。

メッセージはその後も続いて届きました。しばらくすると手や腕のしびれはなくなり、文字の形も多少整ってきましたが、それでも決して読みやすいもの

ではありませんでした。

最初のうちは友人のいる前で書かれていましたが、その後「X」は私が一人でいるときに現れるようになりました。彼は私がパリとロンドンを行き来するのに合わせて、そのどちらでも書きました。週に何度も現れることもあれば、ほぼ一か月のあいだその気配を感じないこともありました。私は彼を呼び出したことはなく、訪れないあいだは彼のことをあまり考えもしませんでした。ほとんどの時間、私のペンも思考も別のことに使われていたのです。

ただ一度だけ、書き始める前に手紙の内容がわかっていたことがありました。ある夜、鉛筆を取ったとき、「X」が何を書くかがわかったのです。しかしその出来事は覚えているものの、それがどのメッセージだったのかは思い出せません。

これらの手紙を書いているあいだ、私はたいてい半ば意識のある状態にあり、あとで読み返すまでは、そこに何が書かれているのかはぼんやりとしかわかりませんでした。ごくまれに、ほとんど無意識に近い状態になることがあり、そのときは鉛筆を置いたあとでも、自分が何を書いたのかまったく思い出せないこともありましたが、そういうことは頻繁には起こりませんでした。

これらの手紙を私の序文付きで出版してはどうかという提案が最初に出たとき、私はあまり乗り気ではありませんでした。私はいくつかの本の著者であり、それなりに知られてもいたので、自分の文学的評価の安定について多少の自尊心を持っていました。私は風変わりな人物、いわゆる「変人」として知られることを望まなかったのです。しかし私は、これらの手紙が私の前で自動的に書かれたものであると述べる序文を書くことには同意しました。それは

真実ではありましたが、すべての真実ではありませんでした。この点で友人は満足しましたが、時間が経つにつれて、私は満足できなくなりました。どこか誠実さに欠けるように思えたのです。

私はこの問題について自分自身と徹底的に議論しました。もしこれらの手紙を個人的な序文なしで出版すれば、それはフィクションや想像の産物として受け取られ、その中に含まれている注目すべき主張は、来世の真実を示す説得力ある根拠としての力を失ってしまうだろう、と私は考えました。

では、もしそれらが私の前で、いわゆる自動書記によって書かれたと説明する序文を書くなら、当然それが誰の手を通して書かれたのかという疑問が生じ、私はごまかしを余儀なくされるでしょう。しかし、もしそれらが自分自身の手を通して書かれたことを率直に認め、事実をそのまま述べるなら、

考えられる仮説は二つだけになります。第一に、それが肉体を持たない存在からの真の通信であるという仮説。

第二に、それが私自身の潜在意識による思索の産物であるという仮説です。しかし後者の仮説では、私が友人の死を知る前に受け取った「X」と署名された最初の手紙を説明することはできません。これを説明するには、各人の潜在意識がすべてを知っていると仮定するしかありません。

だが、もしそうだとするなら、なぜ私の潜在意識は、私の顕在意識や他の誰の意識からも示唆されていない前提にもとづいて、これほど長く骨の折れる欺きを私に対して行おうとしたのでしょうか。

これほど重大な問題において、私が故意に人を欺いたり作り話をしていると誰かが非難するとは、

そのときも今も考えにくいことです。なぜなら私の想像力には、詩や小説といった正当な表現の場がすでにあるからです。

この問題が最終的に決着するまでに、手紙はおそらく三分の二ほど書かれていました。そして私は、もしこれらを出版するなら、自分がそれを受け取った正確な状況を率直に述べた序文をつけて出版するべきだと決心しました。

実際の筆記は十一か月以上にわたって行われました。その後に編集の問題が生じました。何を削り、何を残すべきか。私は、「X」の私的な事情、私自身の事情、そして彼の友人たちに関する個人的な言及以外は、何も削らないことに決めました。また、私は何も付け加えていません。「X」の文体がぎこちない場合には、文を整えたり繰り返しを削除したことはありますが、編集者として通常の原稿に対

して行う修正よりも、はるかに少ない手直ししかしていません。

「X」はときに非常にくだけた言い方をし、ときに法律用語やアメリカの俗語を使います。また、親しい手紙のやり取りのように、話題を次々に飛ばし、つなぎの言葉もなく元の話題に戻ることがよくあります。

彼は来世について、私がこれまで抱いてきた考えとは正反対の主張をいくつか述べていますが、それらも書かれたままに残してあります。彼の哲学的な考えの多くは私にとってまったく新しいものであり、その深さに気づくまでに何か月もかかることもありました。

私はこれらの手紙を出版することについて、何ら弁解するつもりはありません。それがどのような由

来であれ、これらはおそらく興味深い資料であり、私はそれを世に出すにあたって、これらを書く際に「X」に手を委ねたときと同じように、何の恐れも感じていません。

もしこれらの手紙が見えない世界からの本物の通信であるかどうかについて、私自身はどう考えているのかと問われれば、私はそうであると信じていると答えるでしょう。

公表されていない部分では、私の知らなかった過去の出来事や所有物についてしばしば言及されており、それらは確認されました。ただしこれは、心理学者たちの好むテレパシー説を否定するものではありません。

しかし、もしこれらの手紙がテレパシーによって私に送られたのだとすれば、それはいったい誰によ

って送られたのでしょうか。多くの手紙が書かれたときに同席していた私の友人ではありません。内容は彼女にとっても私と同じく驚きだったからです。

しかし私は、この本について科学的な主張をするつもりはないということを明言しておきたいと思います。科学は検証と証明を求めるからです。

私が〇〇氏の死を知る前に受け取った「X」の最初の手紙を除いて、この本は心理学者がいうところの「検証条件」のもとで書かれたものではありません。肉体の死後も魂が存続する証拠として受け取るか否かは、その内容の真実性についての各人の気質、経験、そして内的な確信に応じて判断されるべきものです。

「X」が不在であり、同じ程度に信頼できる別の見えない存在がいなかぎり、私はこのような種類

の文書をもう一度作り出すことはできません。

無差別なミディアムシップに対しては、私は今でも強く根深い偏見を持っています。それが憑依や欺きという危険を伴うことを認識しているからです。しかし「X」に対する私の信頼と、パリにいる友人の私への信頼がなければ、この本は決して生まれなかったでしょう。見えない著者や目に見えるミディアムへの疑いは、おそらくこの筆記の目的そのものを麻痺させてしまったに違いありません。

これらの手紙が私個人にもたらした影響は、私がかつて持っていたかもしれない死への恐れを完全に取り除き、不死への信念を強め、墓の向こうの生命を、この陽光のもとでの生活と同じくらい現実的で生き生きとしたものにしてくれたことです。もしこれらの手紙が、私が感じたような高揚した不死の感覚を、たとえ一人でも他の人に与えることができ

るなら、私は自分の労苦が報われたと感じるでしょう。

このような本を出版したことで私を非難しようとする人がいるなら、私はただこう言うしかありません。私は常に自分の最善を世に提供しようとしてきました。そしておそらく、これらの手紙もまた、私が与えることのできる最良のものの一つなのです。

エルサ・バーカー

ロンドン、1913 年。

生きている死者からの手紙

第一の手紙

帰還

私はここにいる、間違えるな。前に語ったのは私であり、今また語っているのも私だ。

私はすばらしい体験をした。忘れていた多くのことを、今では思い出すことができる。起こったことは最善のことであり、それは避けられないものだった。

私はあなたを見ることができるが、あまりはっきりとは見えない。

私はほとんど暗闇を感じなかった。ここにある光は

驚くべきもので、南国の太陽の光よりもはるかにすばらしい。

いや、私はまだパリの中をうまく見て回ることができない。すべてが違っているのだ。おそらく、今この瞬間にあなたを見ることができるのは、あなた自身の生命力のおかげなのだろう。

第二の手紙

誰にも話すな

私は今、実際の空間においてあなたの向かいにいる。つまり、あなたの真正面にいて、おそらく長椅子か寝椅子のようなものに身を預けている。

暗くなってからのほうが、あなたのところへ来やすい。

出てくるとき、あなたが私に自分の手を通して語らせることができるかもしれない思い出した。

私はすでに以前より強くなっている。この状態の変化は、恐れるようなものではない。

どれくらいのあいだ沈黙していたのか、まだあなた

に伝えることはできない。それは長い時間には感じられなかった。

「X」と署名したのは私だ。教師がそのつながりを作るのを助けてくれた。

しばらくのあいだは、私が来たことを誰にも話さないほうがいい。ただし〇〇だけは別だ。私は、いつでも望むときに望む場所へ来るのに妨げとなるものを望まない。ときどきあなたの手を貸してほしい。決してそれを乱用はしない。

私は、十分な力をもって戻る準備が整うまで、こちらにとどまるつもりだ。私を待っていてほしいが、まだその時ではない。

今は、長いあいだ感じていたよりも、物事がずっと楽に思える。私はより軽いものを背負っている。肉

体の中にもっと長くとどまることもできたが、その努力をする価値があるようには思えなかった。

私は教師に会った。彼は近くにいる。私に対する彼の態度は、とても心強いものだ。

だが、もう行かなければならない。おやすみ。

第三の手紙

扉を守ること

あなたは、私のまわりに押し寄せてくる存在たちから自分を守るために、いくつかの注意を取る必要がある。

朝と夜に、自分自身に一種の守りをかければよい。あなたの魂が受け入れることを禁じたものは、何一つその壁を通り抜けることはできない。

これらアストラルの世界の幼生のようなものに、あなたのエネルギーを吸い取らせてはならない。いや、彼らは私を悩ませることはできない。私はすでに彼らの存在に慣れているからだ。あなたは自分を守りさえすれば、まったく恐れる必要はない。

第四の手紙

鏡にかかる雲

(文章が半分ほど書かれたところで、突然筆記が止まり、後で続けられた。)

私の呼びかけに応じるときには、教師から新しい教えや例を受け取る準備をするときの子どもが石板をきれいに拭くように、自分の心をきれいにしておきなさい。あなたのわずかな個人的な思考や空想でさえ、鏡にかかる雲のように、映りをぼやけさせてしまうことがある。

この方法によって手紙を受け取ることはできる。ただし、書いている途中であなたの心が独自に働き始め、問いを差しはさまないかぎりにおいてである。

今回は、以前のようにまわりに集まる存在たちによって中断されたのではない。あなた自身が、普通とは違う文の結末を知りたいという好奇心によって中断されたのだ。あなたは突然、受け身ではなく能動的になってしまった。まるで電信局の受信機が、自分自身のメッセージを送り始めるかのように。

私はここで、以前には理解できなかった多くの心霊的な現象の理由を学んだ。そして、この働きにおいて交錯する流れの危険からあなたを守ることができると、そうしたいと強く思っている。

ある夜、私はあなたを呼んだが、あなたは私を入れようとしなかった。それは優しいことだっただろうか。

しかし私はあなたを責めているわけではない。私の

仕事が終わるまで、何度でもあなたのもとへ来る
つもりだ。

まもなく私は夢の中であなたのもとへ行き、多くの
ことを見せるだろう。

第五の手紙

まだ語られていないことの約束

しばらくしたら、こちらへ来てから私が得たある種の知識をあなたと分かち合おうと思う。今では私は、過去を開かれた窓越しに見るように見ることができる。自分がたどってきた道も見えるし、これから進もうとしている道も描くことができる。

今はすべてが容易に思える。今している仕事の倍でもできるだろう——それほど強く感じている。

今のところ、私はどこかに落ち着いているわけではなく、気の向くままに動き回っている。これは肉体にいたころ、いつも夢見ていながら実現できなかったことだ。

死を恐れてはならない。しかし、できるだけ長く地上にとどまりなさい。こちらには仲間がいるとはいえ、ときどき私はこの世にとどまり続けられなかったことを残念に思うことがある。しかし後悔は、こちらではあまり重みを持たない——私たちの身体と同じように。

私に関しては、すべて順調だ。

私は、これまで語られたことのないことをあなたに伝えよう。

第六の手紙

意志の杖

あなたはまだ、意志というものの完全な神秘を理解していない。それは、あなたの持つ力の範囲内で、望むあらゆるものへとあなたを形づくることができる。なぜなら、人間という力の単位の中には、すべてが現実の形であれ潜在的な形であれ存在しているからだ。

画家と音楽家の違い、あるいは詩人と小説家の違いは、その存在自体の性質の違いではない。というのも、それぞれの単位は量を除けばすべてを含んでおり、その意志によって選ばれたどの方向にも発展する可能性を持っているからである。その選択は、はるか昔にすでに行われていたのかもしれない。一つの特定の仕事における技術や能力を発

達させるには、しばしば長い時間、時には多くの生を要する。他のすべてよりもそれを選び取るためにはである。集中こそが力の秘訣であり、それはここでも他のどこでも同じだ。

あなたの日常の問題における意志の使い方について言えば、意志の用い方には二つある。一つは、明確な計画に集中し、自分が持っている力の量に応じてそれを実現するかどうかを決める方法。もう一つは、最善で、最も高く、最も賢明な計画が、自分自身や他者の潜在的な力によって現れるように意志する方法である。後者は、環境の一部を支配しようとするのではなく、特定の目的のために環境全体を命じることにより等しい。

外の世界と内の世界のこの交わりにおいて、外にいるあなたたちは、こちらにいる私たちがすべてを知っていると思いがちだ。あなたたちは私たちが占

い師のように予言し、地球の反対側で起きていることを教えてくれることを期待する。時にはそれができることもあるが、たいていはいはできない。

やがて私は、師がそうするように、あなたの心の中に入り、その中にあるすべての先行する思考や計画を知ることができるようになるかもしれない。しかし今は、いつもそうできるわけではない。

たとえば、ある夜、私は〇〇をあちこち探したが、見つけることができなかった。おそらく、私たちを強く思うことが、道をより通りやすくするために必要なのだろう。

私は常に学び続けている。教師は私を助けるために非常に活発に働いている。

あなたの手に対する自分のつながりに完全な確信

が持てるようになったとき、私はこちらの生活について多くのことを語ることができるだろう。

第七の手紙

ヴェールの向こうの光

あなたと私のあいだを隔てている濃密な物質のヴェールに、ときどき私のための通り道を開いてほしい。私はしばしばあなたを、鮮やかな光の点として見る。それはおそらく、あなたの魂が感情によって活発になっているとき、あるいはあなたの思考が鋭く働いているときなのだろう。

私はときどきあなたの思考を読むことができるが、いつもできるわけではない。しばしば近づこうとしても、あなたを見つけられないことがある。もしあなたがこちらに来たとしても、いつも私を見つけられるとは限らないだろう。

私はときには一人でいるし、ときには他の者たちと

一緒にいる。

不思議なことに、今では自分にかなりしっかりとした身体があるように感じる。最初のころは、腕や脚があらゆる方向に広がっているように感じられたのに。

たいてい私は以前のように歩くことはなく、また飛ぶというわけでもない。私は翼を持ったことは一度もないからだ。しかし、信じられないほどの速さで空間を移動することができる。それでも、ときには歩くこともある。

さて、あなたに一つ頼みたいことがある。私が物事を維持し続けるのにどれほど苦勞していたか、あなたは知っているだろう。それでも私はそれを維持し続けた。あなたも、自分の仕事に必要な物質的な手段について落胆してはいけない。供給がすでに

あるかのように、そのまま仕事を進めなさい。そうすれば、それは実際に現れる。何らかの形でそれを実現することができる。弱気になったり不安になったりしてはならない。そうすると、共感の力によって私を無理に地上へ引き戻してしまうことになる。それは死者を嘆くと同じくらいよくないことなのだ。

第八の手紙

物質の強固な束縛

「見えない世界」に住む者には、あるとき突然、地上の記憶がよみがえる。「ああ！」と彼は言う。「世界は私なしでも進んでいる。私は何を逃しているのだろうか？」

世界が自分なしで進んでいくことは、まるで無礼なことのように感じられる。彼は動揺する。自分は時代に遅れ、取り残され、余りものになってしまったのだと確信する。

彼は周囲を見回すが、そこにあるのはただ、第四次元の静かな野だけである。ああ、もう一度、物質の強固な手ごたえを感じたい！ 緊張した手で何かをつかみたい！

その気分はやがて過ぎ去るかもしれない。しかし、ある日それはさらに強い力をもって戻ってくる。彼はこの希薄な環境を抜け出し、密な物質の強い抵抗をもつ世界へ行かなければならない。だが、どうやって？

ああ、思い出した！ すべての行為は記憶から生まれる。もし以前にそれを行っていたことがなければ、それは無謀な試みになっていただろう。

彼は目を閉じ、見えない世界の中で自らを反転させる。彼は人間の生命へ、人間同士の結びつきの激しい振動へと引き寄せられる。そこには共感がある——それは、今接触している魂たちとの過去の経験による共感かもしれないし、単に気分や想像による共感かもしれない。いずれにせよ、彼は自由へのつながりを手放し、人間たちの生活の中へと

喜びをもって自らを失わせる。

しばらくして彼は目を覚まし、戸惑った目で緑の野原や、人々の丸くしっかりとした顔を見つめる。ときには涙を流し、元の場所へ戻りたいと願うこともある。もし気力を失えば、彼は戻ることもできる——ただし、再びあの疲れる物質への探求を最初からやり直すことになる。

もし彼が強く頑固であれば、そこにとどまり、人間として成長していく。やがて彼は、かつての希薄な存在としての生活は単なる夢にすぎなかったのだと自分に言い聞かせることさえある。というのも、夢の中でそこへ戻るからであり、その夢が彼につきまとい、物質の世界での喜びを損なってしまうのだ。

十分な年月が過ぎると、彼は物質的な闘いに疲れ果てる。彼のエネルギーは尽き、見えないものの腕

の中へと再び沈み込む。そして人々はまた、息をひそめて彼が死んだと言う。

しかし彼は死んではいない。ただ元いたところへ戻っただけなのだ。

第九の手紙

魂が行き来する場所

友よ、死には何も恐れるものはない。それは外国へ旅すること——初めての旅——と同じくらいのものだ。自分の狭い世界の習慣に慣れきった、ある程度年を重ねた人にとっての最初の旅と同じである。

人がこちらへ来ると、出会う見知らぬ者たちは、初めて外国の人々の中に入ったときに感じるのと同じ程度にしか異質には感じられない。彼は彼らをすぐに理解できるとは限らないが、それもまた外国に滞在する経験と同じである。やがて彼は友好的に近づき、目で微笑むようになる。「どこから来たのですか？」という問いには、地上と同じような答えが返ってくる。ある者はカリフォルニアから、ある者

はボストンから、またある者はロンドンから来たと言う。

これは、旅の大きな道で出会った時のことである。

というのも、こちらには魂が地上と同じように行き来する道があるからだ。

そのような道はたいてい二つの大きな中心を結ぶ最も直接的な線であるが、鉄道の線路の上にあることは決してない。

騒音が多すぎるからだ。私たちは地上で発せられる音を聞くことができる。音の振動はエーテルの耳にある種の衝撃を与え、それが私たちに伝わるのである。

ときには、長いあいだ一つの場所にとどまる者もいる。

私はメイン州にある古い家を訪れたことがあるが、そこにはこちら側に来てから何年になるのかわからないほど長く滞在している人がいた。彼は、子どもたちが成長して大人になったこと、そしてこちらへ来たばかりのころに愛着を持った一頭の子馬が成長して馬になり、やがて老衰で死んだことを話してくれた。

こちらにも、あなたたちと同じように怠け者や鈍い人々がいる。また、非常に輝かしく魅力的で、その存在だけで人を若返らせるような人々もいる。

私たちもあなたたちと同じように衣服を身につけていると言うのは、どこかおかしい感じがするが、そうなのである。ただし、それほど多くは必要ないよう

だ。トランクのようなものは見たことがないが、私はまだここに来て間もない。

暑さや寒さは、今ではあまり問題にならない。最初のころは寒さのために少し不快に感じたことを覚えているが、それももう過去のことだ。

第十の手紙

第四次元での約束

ときどきあなたの手を貸してくれることで、あなたは私のために多くのことができるのに、なぜそれをためらうのか、私は不思議に思う。

この哲学は、この世界の中で、そして世界中で教えられ続けていけよう。この生においてその深いところにまで到達できる者は、おそらくわずかだろう。

しかし、今日まかれた種が、はるか後になって実を結ぶこともある。どこかで読んだことがあるが、二千年か三千年もミイラとともに埋められていた小麦の粒が、現代になって良い土に植えられると芽を出したという。それと同じことが、哲学の種にも言えるのだ。

哲学のために働く者は愚かであり、哲学を自分のために働かせるべきだと言われることもある。しかし、真の哲学をわずかでも世界に与える者は、七倍の報いを自ら受けることになる。そしてあなたも知っているあの聖書の言葉——「そして来たるべき世において永遠の命を得る」という言葉を。得るためには、与えなければならない。それが法則である。

こちらでの生活について、あなたが大きな変化を迎えるときに役立つかもしれない多くのことを、私はあなたに話すことができる。ほとんどの人は、記憶を保ったままこちらへ来る。私が出会い、交わった人々は、多かれ少なかれ地上での生活の記憶をはっきりと持っていた——つまり、その大半はそうであった。

私は一人の男に出会ったが、彼は地上のことを語るのを拒み、「先へ進むこと」ばかりを話していた。私は彼に、もし十分に先へ進めば、出発した場所へ戻ることになるだろうと伝えた。

あなたは、おそらく私たちが何かを食べたり飲んだりしているのかどうか、気になっているかもしれない。

私たちは確かに養われているし、かなりの量の水分を取り込んでいるように思える。あなたもまた、水をたくさん飲むべきだ。それはアストラルの身体を養う。

非常に乾いた身体では、この生命の段階にある魂に手を貸すための十分なアストラルの活力を持つことはできないだろうと私は思う。

こちらの身体には多くの水分がある。おそらくそれが理由の一つで、いわゆる霊との接触が、ときに血の通った人に冷たさを感じさせ、身震いさせるのだろう。

このように書くことは、私にとってもある程度の努力を要するが、それだけの価値があるように思える。私は、あなたがいると感じられる場所へ来ている。

私は多くの他の者よりも、あなたをはっきりと見ることができる。それから私は反転する。つまり、以前のように内へ入るのではなく、大きな力をもって外へ出て、あなたの方へ向かう。そして強い推進力によって、あなたを支配する。

ときどき文章の途中で突然筆記が止まったことがあるだろう。それは私の焦点が正しく合っていないか

ったときだ。あなたも、外の世界を遮断して反転するときに、突然の物音やさまよう思考によって、すぐに元に引き戻されてしまうことに気づいたことがあるかもしれない。こちらでも同じことが起こる。

さて、私たちが生きているこの要素についてだが、それは確かに空間の中に位置を持っている。

なぜなら、それは地球のまわり全体に広がっているからだ。そう、目に見えるすべての木には、その見えない対応物がある。

あなたが眠りに入る前に、意識的にこの世界へ出てくるとき、あなたは物質世界にも存在する、あるいはかつて存在したものを見る。

こちらの世界で、物理的な対応物を持たないものを見ることはできない。もちろん、思考による像や

想像の像はある。しかし、想像によって見ることは、アストラルの領域で見ることはまったく別のものだ。

眠りに入る前にあなたが見るものは、実在している。そして振動の度合いを変えることで、あなたは这个世界へ出てくる——いや、むしろ戻ってくるのだ。

なぜなら、外へ出るためには、いったん中へ入らなければならないからだ。

1 これは明らかに私の「入眠時の幻視」を指している。——編集者

想像力は大きな力を持っている。心の中にイメージを作ると、意志をその方向に向けることで、身体の振動がそれに合わせて変化することがある。健康

や病気についての思考の場合のように。

実験として、こちらへ来たいときには、ある特定の象徴を選び、それを目の前に保ち続けるのもよいかもしれない。それが振動を変える助けになるとは言わないが、役に立つ可能性はある。

もし眠りに落ちる直前に、その思いと願いを強く心に持ってこちらへ来るなら、あなたは私を見ることができだろうか。

今日は私は強い。なぜなら、より強い者と長く共にいたからだ。そしてもし今夜、私を見つけようとする試みをするなら、ほかのときよりも私はあなたを助けやすいかもしれない。

話すべきことは非常に多いが、私はめったにあなたと話すことができない。もしあなたの状況が違って

いて、他のことに縛られていなければ、もっと頻繁に来ることもできるだろう。私はあなたに伝えたい多くのことを学んでいる。

たとえば、師たちが常に行っているように、あなたが意志によってこちらへ来る方法を教えることができると思う。

最初は、あなたの腕だけを使って書いていたが、今では心的な組織全体をよりよくつかむことができるようになった。私は、自分が最善の方法で働いていないこと、どこかに無駄があることに気づき、この件について教師に指導を求めた。この新しい方法では、あなたもその後あまり疲れを感じないだろうし、私も同じだ。

私は今から行く。そして数分後にあなたに会おうとする。もしこの試みがうまくいかなかったも、落胆して

はいけない。また別のときに試してみなさい。もし私を見ることができたなら、あなたは確かに私だとわかるだろう。

第十一の手紙

少年——ライオネル

こちらにも地上と同じように、他者の幸福のために
尽くす人々がいるということを、あなたは興味深く
思うだろう。

実際、「リーグ」と自らを呼ぶ魂たちの大きな組織さ
え存在している。彼らの特別な仕事は、こちらへ来
たばかりの者たちを受けとめ、自分を取り戻し、新
しい環境に適応するのを助けることだ。このリーグ
には男女の両方がいる。

彼らは大きな貢献をしてきた。彼らは、救世軍より
も高いところで働いていると言いたいのではない
が、むしろより知的な領域で働いていると言うべき
だろう。彼らは子どもも大人も助けている。

子どもについては興味深いことがある。私はまだこれらすべてを自分で観察する時間はなかったが、リーグの一人の働き手が教えてくれたところによると、子どもたちは大人よりも変化した生活に適応するのが容易だという。

非常に年老いた人々はかなり多く眠る傾向がある一方で、子どもたちは大きなエネルギーをもってこちらへ来て、地上にいたときと同じ好奇心を持ち続けている。急激な変化はない。小さな子どもたちは、地上にいたときと同じように、徐々に、ほとんど気づかれないほど自然に成長していくと言われている。

一般には自然なリズムが保たれるが、中にはほとんど休みもなくすぐに戻ってしまう魂もある。それは強い好奇心と欲求を持った魂である。

こちらには恐ろしいものもある——地上のそれよりもはるかにひどいものだ。悪徳や節度の欠如による衰えは、こちらでは地上よりもはるかに深刻である。

私は本当に恐ろしい顔や姿を見たことがある。半ば腐りかけて崩れ落ちているような顔だ。それらは絶望的な状態の者たちであり、先に話したリーグの働き手たちでさえ、その運命に任せている。そのような人々の行く末がどうなるのかははっきりしない。この周期において再び生まれ変わるのかどうかも、私は知らない。

子どもたちは本当に魅力的だ！ 一人の少年がよく私のところに来る。彼は私を父と呼び、私と一緒にいることを楽しんでいるようだ。年齢はおそらく十三歳くらいで、こちらへ来てからしばらく経って

いる。どれくらいの時間が経ったのかは彼自身もはっきりとは言えないが、こちらへ来た年、つまり暦の年を覚えているかどうか、今度尋ねてみようと思う。

注意深くしていれば、私たちは自分の考えを他人に知られずに保つことができないというのは事実ではない。方法を知っていれば、秘密を守ることはできる。それは暗示、あるいは一種の守りにかけることによって行われる。ただし、他人の心を読むことは地上よりもはるかに容易である。

私たちはお互いに、あなたたちとほぼ同じ方法で意思を伝え合っているように思える。しかし時間が経つにつれて、私は唇を動かすよりも、強く投射された思考によってますます会話するようになっていく。

最初のころは、何かを言うときには必ず口を開いていた。今ではそうしないほうが楽だが、習慣によっていまだにそうすることもある。こちらへ来たばかりの者は、実際に声に出さなければ相手を理解できない。それはおそらく、ほとんど呼吸を使わずに話すことができるということをまだ学んでいないからだろう。

さて、その少年の話をしていたのだった。彼は、私が地上について話して聞かせたあることに非常に興味を持っている——特に飛行機に対してだ。

彼がこちらへ来たときには、飛行機はまだあまり実用的ではなかった。彼は地上へ戻って飛行機に乗りたいと思っている。こちらでは飛行機がなくても飛べるのだと私は言うのだが、彼にとってはそれでは同じことにはならないようだ。彼は機械に自分の手で触れたいのだ。

私は彼に、戻ることをあまり急がないように勧めている。

興味深いことに、彼は地上での以前の人生を思い出すことができる。こちらにいる多くの者は、最後の人生より前の記憶については、肉体にいたときと同じようにほとんど持っていない。ここは誰もがすべてを知っている場所ではない——まったくそうではない。ほとんどの魂は、生きていたときと同じくらい無知に近い状態なのだ。

その少年は前の生では発明家であり、今回は事故によってこちらへ来たのだと彼は言っている。私は、彼はもう少しこちらにとどまり、再び戻るためのより強いリズムを整えるべきだと思う。これはあくまで私の考えにすぎない。私はその少年に強い関心を持っているので、彼を引き留めたいと思ってお

り、それが多少は私の判断に影響しているのかもしれない。

わかるだろう、私たちはまだ人間なのだ。

あなたは私にいくつか質問をしたらどう？ それを声に出して言ってくれないか。私は聞くことができる。

そうだ、私は長いあいだ感じていたよりも、かなり若くなったように感じているし、体調もよい。最初のころは、病気のときのように、気分が落ち込む時とそうでない時があったが、今はもう大丈夫だ。身体もあまり私を悩ませることはない。

私は、年を取った人はここで若返り、やがて再び最盛期に達し、その状態を長く保つことができるのだと思う。

わかるだろう、私はすべてを知る存在になったわけではない。忘れていた多くの知識を取り戻すことはできたが、この生活の細かなすべてについては、まだ多くを学ばなければならない。

あなたの好奇心は、私にこの環境を研究させ、さまざまなことを調べさせる助けとなっている。そうでなければ、私は長いあいだ、あるいは永遠に、それらを調べなかったかもしれない。多くの人は、こちらではあまり学ばないように見える。ただ自然に、地上と同じように、最もよく生きる方法、最も楽な方法を身につけていくだけだ。

そうだ、こちらには学校もあり、学びたいと望む者は教えを受けることができる——その資格があればだ。しかし偉大な教師はほんのわずかしかない。

平均的な大学教授が最高の知恵を持つ存在ではないのと同じで、それはここでもあちらでも同じことだ。

第十二の手紙

型の世界

先日、こちらには地上に存在したことの無いものは何もないと私が言ったことについて、訂正しておきたいことがある。その後、私はその言い方が正確ではなかったと知った。こちらにはいくつかの層があるのだ。これは最近学んだことである。私は今でも、地球に最も近い最下層においては、存在するもののほとんどすべてが、密な物質として地上に存在したことがある、あるいはほぼそうであると信じている。

だが、もう少し上へ、もう少し離れたところへ行くと——実際の距離でどれほどかは言えないが——先夜、探っているうちに私は型の世界、つまり地上に現れることになるものの原型の世界へ入り込ん

だ。そこでは、私の知るかぎりあなたの惑星にはまだ存在していないものの形を見た。たとえば発明品である。人間が自分に取り付けることのできる翼を見たし、新しい形の飛行機械も見た。模型の都市や、用途の想像もつかない奇妙な翼のような突起を持つ塔も見た。機械的な発明の進歩は、明らかにまだ始まったばかりなのだ。

また別の機会に、その型の世界のさらに上へ進み、その先に何があるのかを見てこようと思う。

これを覚えておいてほしい。私はただ、自分が見たものについて、地上の旅人が語るように話しているにすぎない。時には、それらに対する私の解釈が間違っていることもあるかもしれない。

私がある型の世界にいたとき、そこにはほとんど誰もいなかった——私のようにたまに通りかかる旅

人がいる程度だった。

このことから私は、地上を離れた者の中で、そこまで上がる者はごく少数なのだろうと考えている。私が見てきたことや、さまざまな男女の魂と話したことからすると、多くの者は、こちらに来てもなお、地球からそれほど遠くへは行かないように思われる。

不思議なことだが、多くの人々は、いわゆる正統的な天国にいて、白い衣をまとい、頭に冠をかぶり、手に豎琴を持って歌っているように見える。外部の者が「天国の国」と呼ぶ領域があるのだ。

また、硫黄のにおいがする火の地獄もあると聞いているが、私はまだそこへは行っていない。いつか十分に力を感じたときに、のぞいてみようと思う。もしあまりにも陰鬱でなければ、さらに奥へ進むつもりだ——許されるならば。

今のところ、私はあちこちを見て回っているだけで、まだどこか一つの場所をじっくり研究したことはない。

昨日、私はあの少年——名前はライオネルというのだが——を連れて出かけた。あなたの感覚で言えば昨夜と言うべきかもしれない。というのも、私たちがこの大きな空洞の球のあなた側にいるとき、あなたの昼は私たちの夜だからだ。あなたと固体の地球は、私たちの球の中心にある。

私はその少年を、あなたが言うところの散歩に連れ出した。

まず、かつて私が前の生で住んでいたパリの古い地区へ行った。しかしライオネルには何も見えなかった。そして私がいくつかの建物を指さすと、彼は

本気で、私が夢でも見ているのかと尋ねた。どうやら私は、このアストラルの世界にいる仲間たちの中でも、あまり一般的ではないある種的能力を持っているらしい。そこで少年は、パリは私の想像の産物にすぎないと思い込み——彼はボストンに住んでいた——私は彼を天国へ連れて行った。すると彼はこう言った。

「これは、祖母がよく話してくれた場所に違いない。でも、神様はどこにいるの？」

それには私は答えられなかった。しかし改めて見ると、ほとんどの人々がある一方向を見つめているのがわかった。私たちも同じように見つめると、太陽のような大きな光が見えた。ただしそれは、物質的な太陽よりもやわらかく、まぶしさも少なかった。

「これが、神を見る人々が見ているものだ」と私は

少年に言った。

そして今、あなたに伝えたい奇妙なことがある。その光を見つめていると、私たちとその光とのあいだに、ゆっくりと、私たちがキリストとして見慣れている姿の形が現れたのだ。彼は人々に微笑み、両手を差し伸べた。

すると場面が変わり、彼は左腕に子羊を抱いていた。さらにまた変わり、山の上で変容したかのように立っていた。そして彼は語り、人々に教えた。私たちはその声を聞くことができた。そして彼は、私たちの視界から消えた。

第十三の手紙

実在する形と実在しない形

私が最初にこちらへ来たとき、目にするものに強く引きつけられていたため、それをどのように見ているのかということについてはあまり考えなかった。しかし最近になって——特にここ一、二通の手紙を書いてから——一見するとほとんど同じ性質を持っているように見える対象のあいだに違いがあることに気づき始めた。

たとえば、男性や女性の姿のように、間違いなく地上に存在していたものと、視覚的にははっきりし、触れられるように見えながらも、実際には思考によって作られたものにすぎない可能性があり、おそらくそうであるもののあいだに、私はときどき違いを見分けることができる。

この考えは、いわゆる天国の領域で展開される光景を見ているときに私の中に生まれ、さらに最近、私が型の世界と呼んでいる場所を探っているときに、より強い確信として押し寄せてきた。

やがて私は、こうした二種類の見かけ上の対象を一目で見分けられるようになるかもしれない。

たとえば、ここである存在、あるいは存在のように見えるものに出会い、それがヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』に登場するジャン・ヴァルジャンのような有名なフィクションの人物だと告げられたとする。

その場合、私はそれを、この希薄な物質の世界において、独立した準存在として成り立つほどの生命力を持った思考形態を見たのだと考える理由があ

ることになる。今のところ、私はそのような人物に出会ったことはない。

もちろん、もし私がある存在や形と会話することができず、また他の者がそれと会話しているのを見なければ、それが本質的に存在していると断言することはできない。

今後は、この方法で物事を試していくつもりだ。もし私がある存在らしきものと話すことができ、それが私に応答するなら、それを現実のものとして扱うことが正当化される。

フィクションの登場人物やその他の精神的な創造物は、どれほど鮮明な像として見えたとしても、魂も、力の単位も、真の自己も持たない。単なる像として現れるものは、すべてこの方法で確かめてみようと思う。

もし私が奇妙な形の木や動物を見て、それに触れ、感触を確かめることができるなら——こちらの感覚は地上と同じくらい鋭敏である——それがこの領域の微細な物質の中に実在していることがわかる。

私は、これまでに見た存在はすべて実在していると考えている。しかし、もし触れても感触がなく、問いかけに応答もしない存在を見つけることができれば、存在だけでなく物についても、思考によって作られた形が現実のように見えるだけの結合力を持ち得るという私の仮説を裏づける一つの資料になるだろう。

霊なき物質はなく、物質なき霊もまたない——潜在的であれ顕在的であれ——ということは確かに真実である。しかし、人の絵が遠くから見ると人その

もののように見えることもある。

こちらの世界において、意図的に作られた思考の産物、目的をもって作られた創造物は存在し得るのだろうか。私は存在し得ると考えている。そのような思考形態は、おそらく持続するためには非常に強い力を持っていないといけないだろう。

この問題についてさらに語る前に、まずは自分自身で納得のいく結論に達したほうが良さそうだ。

第十四の手紙

パラケルススの大冊

先日、私は教師に頼んで、もし存在するのなら、こちらで生きてきた者たちが自分の観察を記録している記録庫を見せてほしいと言った。すると彼はこう言った。

「あなたは地上にいたとき、大変な読書家だったではないか。さあ来なさい。」

私たちは図書館のような巨大な建物の中へ入った。

そして私は驚きのあまり息をのんだ。私を圧倒したのは建物の構造ではなく、書物と記録の量であった。そこには何百万冊もあるに違いなかった。

私は教師に、すべての本がここにあるのかと尋ねた。彼は微笑んで言った。

「これだけあれば十分ではないか。好きなものを選びなさい。」

私は、それらの巻物が主題ごとに整理されているのかと尋ねた。

「整理はされている」と彼は答えた。

「何を求めているのだ？」

私は、このまだ自分にとって十分に知られていないこの世界を、他の人々が探究した記録が書かれている本を見たいと言った。

彼は再び微笑み、棚から一冊の分厚い本を取り出した。それは大きな黒い活字で印刷されていた。1
「この本を書いたのは誰ですか？」と私は尋ねた。

「署名がある」と彼は答えた。

私は巻末を見て、その署名を確認した。それはパラケルススが用いていた署名だった。

「これはいつ書かれたのですか？」

「彼がこちらへ来て間もなく書かれたものだ。彼のパラケルススとしての生と、その次に地上で生きるまでのあいだに書かれた。」

私が開いたその本は、人間の霊、天使、そして元素的な存在についての論文であった。そこではまず、人間の霊とは、人間の姿で生きた経験を持つ霊で

あると定義されていた。

そして元素的な霊とは、ある程度の自己意識を持ちながらも、まだそのような人間としての経験を持っていない霊であると定義されていた。

さらに著者は、天使とは高次の霊であり、物質におけるそのような経験を持たず、そしておそらく将来も持つことはないだろうと定義した。

彼は続けて、天使の霊は明確に二つの群に分けられると述べた。すなわち、天上の天使と地獄の天使である。前者は神の法則との調和に向かって働く天使であり、後者はその調和に逆らって働く天使である。しかし彼は、この両者はいずれも互いの存在に必要であり、もしすべてが善であったなら宇宙そのものが存在しなくなり、善そのものもまた、そ

の対極である悪が欠けることによって消滅してしまうだろうと述べている。

また彼は、天使の領域の記録の中には、善い天使が悪くなったり、悪い天使が善くなったりした例が記されているが、そのような例はまれであるとも述べている。

そして彼は、自分がそのとき滞在していた領域——そして私自身もそこにいることを知っていたその領域——に滞在する仲間の魂たちに対して、悪しき霊と交信することの危険を警告した。

彼は、より微細な形の生命の中には、地上での生活よりも多くの誘惑があると述べ、自分自身も悪意ある天使たちからたびたび攻撃され、彼らと力を合わせるように勧められたことがあると言っている。

そして彼らの議論は、ときに非常にもっともらしく聞こえることがあったという。

彼は、地上に生きていたときには、善い霊とも悪い霊ともよく会話をしていたが、悪意を持つ天使と会話をしたことは、知るかぎり一度もなかったとも述べている。

さらに彼は、微細な世界の存在が天使であるか、それとも単に人間の霊や元素的な霊であるかを見分ける方法が一つあると述べた。

それは、天使を取り巻く光の輝きの強さである。善い天使も悪い天使も非常に輝いているが、その顔を一目見れば違いがわかる。天上の天使の目は愛と知性の光で燃えているが、地獄の天使の目は見るのも不快なものである。

また彼は、悪しき天使が人間に対して自分を偽り、光の天使であるかのように見せかけることは可能だが、微細な身体で生きている魂たちに対して、その本性を隠し通すことはほとんど不可能であるとも述べている。

この主題については、また別の夜に話すことになるだろう。今は休まなければならない。

第十五の手紙

ローマのトーガ

この世界が私にとって非常に興味深い理由の一つは、慣習に縛られていないという点にある。誰一人として同じ服装をしているわけではない——いや、正確にはそういう意味ではないが、非常に風変わりな服装をしている者も多く、そのため全体として見たときに多様さが生まれている。

私自身の衣服は、たいてい地上で着ていたものに似ている。しかし、実験として、過去のある人生を思い浮かべると、その時代の衣服を身につけることもある。

こちらでは望む衣服を手に入れるのは簡単だ。こちらへ来たときに着ていた服をどのようにして手に入

れたのかはわからないが、そのようなことに注意を向け始めたときには、私はいつものような服装をしていることに気づいた。自分の服を持って来たのかどうかも、まだはっきりしない。

ここには古代の衣装を身につけている人々も多い。しかしそれが、彼らがその時代からずっとここにいることを意味するわけではないと思う。単にそのような服が好きだから着ているのだろう。

一般に、多くの人は地上で暮らしていた場所の近くにとどまるが、私は最初から放浪者だった。

私はさまざまな国をすばやく行き来する。

ある夜(あなたにとっては昼かもしれないが)、私はアメリカで休み、次の夜にはパリで休むこともある。

あなたの居間の長椅子で何時間も休んだこともあるが、あなたはそこに私がいたことに気づかなかった。

もっとも、私が起きている状態で何時間もあなたの家にいれば、あなたが私の存在を感じ取らないとは思えない。

しかし、だからといって、私が休むためにあなたの世界の固体の物質に頼る必要があるとは思ってはならない。決してそうではない。私たちは自分たちの世界の微細な物質の上でも休むことができる。

こちらへ来て間もないころ、私はギリシャ風の衣装を着た女性を見かけ、その服をどこで手に入れたのか尋ねた。彼女は自分で作ったのだと答えた。どうやって作ったのかと聞くと、彼女はこう言った。

「まず心の中に型を作り、それからそれが衣服になるのです。」

「一針一針縫ったのですか？」

「地上にいたときのようにはしませんでした。」

私はよく見てみた。するとその衣服は一体になっているようで、肩のところで宝石のついたピンで留められていた。私はそのピンをどこで手に入れたのかと尋ねた。

すると彼女は、友人からもらったのだと言った。

ではその友人はどこでそれを手に入れたのかと尋ねると、彼女はわからないが尋ねてみると言った。

その後まもなく彼女は去り、それ以来私は彼女に会っていないので、その問いはまだ答えられていないままだ。

私は自分でも物を作れるかどうか試してみることにした。

そのとき、ローマのトーガを着てみようと思いついたのだが、どうしてもローマのトーガがどのようなものだったのか思い出せなかった。

次に教師に会ったとき、自分で作ったトーガを着てみたいという願いを伝えた。

すると彼は、望む衣服をどのように創り出すかを丁寧に教えてくれた。

すなわち、その型と形を心の中に明確に定め、それ

を思い描き、そして意志の力によって思考の世界の微細な物質をその型のまわりに引き寄せ、実際に衣服を形成するのだ。

「では」と私は言った。

「あなたが言うその思考世界の物質は、たとえば私の身体の物質とは同じ種類ではないのですか？」

「最も根本的なところでは」と彼は答えた。

「両方の世界にある物質は一つの同じものである。しかし振動の違いと微細さには大きな差がある。」

私たちの衣服を形作っている思考の物質は、非常に微細な形の物質であるように思えるが、私たちの身体はかなりしっかりしたものに感じられる。

私たちは、湿った雲の上に座る透明な天使のように
はまったく感じない。

もし私がこれほど速く空間を移動できなければ、自
分の身体が以前と同じくらいしっかりしているの
ではないかと思うこともあるだろう。

私はしばしばあなたを見ることができるが、私には
あなたはむしろ微細なもののように見える。

これはすべて、環境に適応するという古くからの問
題なのだろう。最初はどううまくできず、それぞれの行
動に必要なエネルギーの量を調整するのに苦労し
た。

こちらでは移動するのにほとんどエネルギーを必
要としないので、最初はほんの数ヤード先へ行こう
としただけで、一マイルも先に行ってしまうことがあ

った。しかし今では、かなりうまく適応している。

私はここでエネルギーを蓄えて、再び地上へ戻るときの厳しい人生に備えているのだろう。

今私が最も苦勞するのは、あなたの手を通して書くことだ。しかし時間が経つにつれて、あなたの抵抗はますます少なくなっている。

最初のころは全力を使わなければならなかったが、今では比較的わずかな力で済む。それでも長時間続けるには、あなた自身の活力を使わざるを得ないが、それはしないつもりだ。

あなたは、最初のころとは違って、今では書いたあとに疲れを感じなくなっていることに気づいているかもしれない。

さて、こちらの慣習に縛られない性質について話していたのだった。

こちらでは、人々は必要なときに、あまり形式ばらずに互いに声をかけ合う。見知らぬ人と話すのを恐れている年配の女性を何人か見かけたことはあるが、おそらく彼女たちはまだ来たばかりで、地上での習慣が残っていたのだろう。

しかし、だからといって、こちらの社会があまりにも気ままで無秩序だと思っはならない。そうではなく、ただ人々が地上にいたときほど互いを恐れていないというだけなのだ。

第十六の手紙

忘れるべきこと

私は、これから死を迎えようとしている人々に一言伝えたい。彼らには、その変化——彼らが死と呼ぶもの——のあと、できるだけ早く自分の身体を忘れるようにお願いしたい。

ああ、かつて自分自身だと信じていたあのものを、もう一度見に戻りたいという恐ろしいほどの好奇心！ その思いはときどきあまりにも強く湧き上がり、私たちの意志に反して働き、そこへ引き戻してしまう。

ある者にとってはそれは病的な執着となり、かつて自分が支えとしていた骨に肉の一片でも残っているかぎり、そこから解放されない者も多い。

彼らには、それを完全に忘れるように、思いを無理にでも追い払うように、自由なままで他の生へ進むように伝えてほしい。過去を振り返ることが良い場合もあるが、この過去の残骸についてはそうではない。

棺の中をのぞき込むのはとても容易だ。というのも、今私たちがまとっている身体は暗い場所における光そのものであり、より粗い物質を貫くことができるからだ。

私自身も何度か戻ったことがあるが、もう二度と戻らないと決めている。それでも、いつかまたその状態がどうなっているのか見たいという思いが、強い衝動となってよみがえるかもしれない。

私はあなたを驚かせたり苦しめたりしたいのでは

ない。ただ警告したいだけだ。墓の中で必ず目にすることになる光景は、見るに耐えないものだ。それが、こちらへ来て間もない多くの魂が憂鬱になる理由かもしれない。彼らは本来行くべきでない場所へ、何度も戻ってしまうのだ。

こちらでは、ある場所を強く思い浮かべると、そこに自分がいることになるということを、あなたは知っているだろう。私たちの使っている身体は非常に軽く、ほとんど努力することなく思考に従う。だからこそ、それをしてはならないと伝えてほしい。

ある日、私は並木道を歩いていた——こちらにも木がある——そのとき、長い黒い衣をまとった背の高い女性に出会った。彼女は泣いていた——こちらにも涙がある。なぜ泣いているのかと尋ねると、彼女は言葉では言い表せない悲しみに満ちた目を私に向けた。

「私はあれを見に戻ってしまったのです」と彼女は言った。

私は彼女の気持ちがよくわかったので、胸が痛んだ。最初にそれを見たときの衝撃は、その後も繰り返される。しかも、見るものはだんだんと、自分がかつて自分だと思っていたものとはかけ離れていくのだ。

私はよく、その黒い服の女性が並木道を歩きながら泣いている姿を思い出す。そこへ引き戻されるのは、半ばは好奇心、半ばは磁力のような引き寄せによるものだ。しかしそれは何の役にも立たない。忘れてしまうほうがよいのだ。

私は純粋な科学的関心から、少年ライオネルに彼が自分の身体を見に戻ったことがあるかどうか尋

ねたいと思ったことがある。しかし、その考えを彼の心に植えつけてしまうのを恐れて、まだ聞いていない。彼はとても落ち着きのない好奇心を持っている。子どものままこちらへ来た者のほうが、私たちほどそのような病的な衝動を持たないのかもしれない。

もし私たちが生きているうちに、自分たちが自分自身だと思っているその形は、本当の不滅の自己ではないのだということを覚えていられたなら、それに対してこれほど過大な重要性を与えることはないだろう。それでも、必要な手入れはきちんと行うだろうが。

一般に、長くこちらにいると言う人々は、あまり老いているようには見えない。私はその理由を教師に尋ねた。すると彼は、やがて人は自分が年老いているということを忘れるようになり、思考において

若くなる傾向があり、それゆえ外見も若くなるのだと言った。身体は、心の中で抱いている形に従う傾向があるのだ。そしてリズムの法則はここでも他と同じように働いている。

子どもたちはこちらでも成長し、心がそう期待すれば、一種の老年期へと進むことさえある。しかし基本的な傾向は、最も良い時期へと進むか、あるいはそこへ戻り、その状態を保つことである。そしてやがて、地上への抗しがたい引力が再び働くときまでそれが続く。

こちらにいる多くの男女は、自分たちが何度も肉体を持って生きてきたことを知らない。直近の人生の記憶はある程度はっきりしているが、それ以前のものは夢のようにしか感じられない。過去の記憶は、できるだけ明確に保つべきだ。それが未来を築く助けになる。

亡くなった人々はすべてを知っている存在だと考える人々は、もしこちらの生活が地上の生活の延長にすぎないと知ったら、どれほど失望するだろうか。

地上での思考や欲望が物質的な楽しみに向けられていたなら、こちらでも同じような思考や欲望を持つことになるだろう。

こちらへ来てから、私は本物の聖者とも言える人々に出会ったが、彼らは地上にいたときから聖なる理想を抱いていた人々であり、今はそれを自由に生きているのだ。

こちらの生活はとても自由になり得る。地上の人々を縛っているあの生活の仕組みのようなものは存在しない。この世界では、人はただ自分の思考によ

ってのみ縛られる。思考が自由であれば、その人も自由なのだ。

もっとも、私のような哲学的な気質を持つ者は多くはない。こちらには哲学者よりも聖者のほうが多い。多くの人の最も高い理想が、強く働くとき、哲学的な生き方よりも宗教的な生き方へ向かっているからである。

私がこちらで出会った中で、最も幸福そうな人々は画家たちだったと思う。こちらの物質は非常に軽く微細で、扱いやすく、想像の形に容易に従う。ここには美しい絵がある。こちらの画家の中には、自分の絵を地上の画家の心の目に印象づけようとする者もあり、しばしばそれは成功する。

こちらの本物の芸術家の心には、地上の仲間がその着想を受け取り、それを形にするとき、大きな喜

びが生まれる。その芸術家は、相手がその着想を
どれほど見事に実現しているかをはっきり見ること
ができない場合もある。なぜなら、ある形の物質か
ら別の形の物質へと見るには特別な能力や訓練が
必要だからだ。しかし、靈感を与える側の存在は、
靈感を受けた者の心の中にその思考をとらえ、自
分の着想が地上で実現されつつあることを知るの
である。

詩人についても同じことが言える。こちらで美しい
抒情詩が作られ、それが地上の詩人たちの受け取
りやすい心に刻み込まれるのだ。ある詩人が私に
言ったことがあるが、長い持続的な努力を必要と
する叙事詩や劇よりも、短い抒情詩のほうがそれ
を行うのは容易なのだという。

音楽家についても、ほぼ同じことが言える。あなた

が美しい音楽が演奏されている演奏会に行くとき、その周囲には音楽を愛する霊たちの群れがいて、その調和を味わっていることが多い。

地上の音楽は、こちらでも大いに楽しまれている。それは聞こえるのだ。しかし感受性の高い霊は、ひどい演奏が行われている場所には近づきたがらない。

私たちは弦楽器の音楽を好む。地上のあらゆるものの中で、音は最も直接的にこの領域へと届く。それを音楽家たちに伝えてほしい。

もし彼らが私たちの音楽を聞くことができたなら！私は地上では音楽を理解していなかったが、今では耳が次第にそれに適応しつつある。

ときどき、あなたたちが私たちの音楽をあちらで聞

いているのではないかと思えることがある。
ちょうど私たちがあなたたちの音楽を聞いているように。

あなたは、私がどのように時間を過ごし、どこへ行っているのか不思議に思ったかもしれない。私は決して飽きることのない美しい場所を一つ持っている。

それは私のもとの町からそれほど遠くない山の斜面にある。丘を回り込むように小さな道が続いていて、その道のすぐ上に小屋がある。

屋根はあるが、下の側は開いている。私はときどき何時間もそこにとどまり、道のそばを流れる小川のさざめきを聞く。

背の高い細い木々は、私にとって兄弟のような存

在になっている。最初は物質の木をはっきり見ることができないが、新しく清潔な板でできた、ほのかに甘い香りのするその小屋に入り、壁に沿った棚か寝台の上に横になる。

そして目を閉じ、少しの働き——いや、それは努力と呼べるものではなく、むしろ漂うような感じで——その美しい場所を見ることができる。

ただし、それはそちらでは夜の時間であり、私は自分自身の光によってそれを見ているのだ。だから私たちは二十四時間のうちの暗い時間帯に移動する。

明るい太陽の光の中では、まったく見ることができないからだ。私たちの光は、太陽のより粗い光によって消されてしまうのだ。

ある夜、私は少年ライオネルをそこへ連れて行き、
彼を小屋に残して少し離れた場所へ行った。

振り返ると、小屋全体が美しい輝きに包まれている
のが見えた——それはライオネル自身の放つ光だ
った。尖った屋根を持つその小さな建物は、内側か
ら照らされた真珠のように見えた。それは美しい体
験だった。

それから私はライオネルのところへ戻り、今度は彼
に少し離れた場所へ行くように言い、自分が小屋
の中で彼の代わりに横になった。私は、自分がそこ
に横たわったとき、建物の板のような密な物質を通
して同じような光を放つことができるのか、彼が同
じ現象を見るのかを知りたかったのだ。

そのあと彼を呼び戻して、何か不思議なものを見
たかと尋ねると、彼はこう言った。

「なんてすごい人なんだ、父さん！ どうやってあの小屋を燃えているように見せたの？」

そのとき私は、彼が私と同じものを見ていたことを知った。

しかし、私は今は疲れてしまい、これ以上書くことができない。おやすみ。そして、よい夢を見ることを願っている。

第十七の手紙

あちらでの第二の妻

こちらでは、私はしばしば他人のために物事の判断を求められる。多くの人は私のことを単に「裁く者」と呼ぶが、私たちはたいてい、地上で最後に名乗っていた名前をそのまま持っている。

男女がさまざまな問題を解決してもらうために私のもとへ来る。倫理の問題、実地的な判断の問題、さらには争いごとまである。

こちらでは誰も争わないと思っていたのか？ 多くの者が争っている。中には長年続く確執さえある。

宗教について異なる考えを持つ者たちは、しばしば激しく議論する。地上で持っていた信念をそのまま

持ってこちらへ来て、自分の理想を思い描き、それを実際に体験できるようになると、正反対の信条を強く持つ二人は、以前よりもさらに不寛容になる。

それぞれが自分こそ正しく、相手が間違っていると確信している。この頑なさ、こちらへ来て間もない者ほど強い。

やがて彼らはより広い寛容さの中へと落ち着き、それぞれが自分自身の人生を生きるようになり、自分の魂が築く証明と実現の世界を楽しむようになる。

だが、私が判断を求められる問題の一例を話そう。

ここに二人の女性がいます。彼女たちは生前、同じ一人の男性と結婚していたが、同時ではなかった。最

初の妻が亡くなり、その後その男性は再婚した。そしてそれから間もなく——一年か二年も経たないうちに——その男性と第二の妻もこちらへ来た。

最初の妻は自分こそがその男性の唯一の妻だと考えており、どこへでも彼のあとをついて回る。

彼女は、彼が天国で再会すると約束したと言っている。男性は第二の妻のほうにより心を寄せているが、最初の妻に対しても愛情は持っている。

ただし、彼は彼女の不合理さに少々うんざりしている。

ある日彼は私に、もし静かに自分の研究に没頭できるなら、二人とも手放してもかまわないと言った。

私はこちらで力を持ち始めて間もないころに彼らと

出会った——それほど昔のことではない——そしてその男性は私と親しくすることを好んだので、彼の近くにいたい二人の女性も一緒について来るようになったのだ。

ある日、三人そろって私のもとへ来て、その問題を持ちかけた——正確には最初の妻が話し始めた。彼女はこう言った。

「この人は私の夫です。ですから、このもう一人の女性は遠くへ行って、彼を完全に私に任せるべきではありませんか？」

私は第二の妻に意見を求めた。彼女は、自分はこの夫がいなければここで完全に一人ぼっちになってしまうし、最後に彼と共にいたのは自分なのだから、今では自分のほうがより彼に属しているのだと答えた。

そのとき、かつてサドカイ派の人々がキリストに似たような質問をしたことを思い出し、私はできるかぎりその答えを思い出して引用した。「人は死者の中からよみがえるときには、めとることも嫁ぐこともなく、天にいる天使のようになるのだ」という言葉だ。

私の答えは、彼らにとって、彼らの質問が私にとってそうであったのと同じくらい衝撃的だったようで、彼らは考えるために立ち去った。

彼らが去ったあと、私は自分自身でもこの問題について考え始めた。こちらにいる者がすべて天使のようであるかどうかは別として、元の伴侶と再び結びついたり、新たに結びついたりすることはかなり多いようだ。

性別の区別も、地上と同じように確かに存在している。

ただし、その表れ方はまったく同じではない。私は、この興味深い三人の問題がなければ考えもしなかったであろう多くの疑問を自分に投げかけた。

そして、何かについて自分の意見を他人に伝えてみるまでは、それが自分の本当の考えかどうかわからないと言ったある人物の話を思い出した。

しばらくして三人は再び私のもとへ来て、話し合った結果を伝えた。おそらく天国の天使のようなやり方で話し合ったのだろう。最初の妻は、夫が望むなら、もう一人の女性と過ごす時間を認めることにしたと言った。

ところで、その男性には、二人の妻と結婚する以前

に恋人だった女性がいた。

その女性もどこかこちらにいる。そして彼はしばしば彼女を探しに行きたいという強い衝動にかられている。

これからどのような機会があるのかはわからないが、彼の状況はかなり気の毒だ。一人でも常に自分の時間を求めてくる人がいるだけで大変なのに、二人もいるのだから。

彼のような例は決して珍しくないと思う。もしかすると、この二人から自由になる唯一の方法は、再び地上へ戻ることなのかもしれない。

もっとも、孤独を得る方法はある。ただし彼はそれを知らない。やり方を知っている者は、地上にいたときと同じように、ここでも自分を隔離することがで

きる。

自分のまわりに壁を築き、非常に高度な者の目で見なければ見通せないようにすることができるのだ。私はまだこの秘密を彼に教えてはいないが、彼の成長のために孤独が必要だと感じたときには、いずれ教えるかもしれない。今のところは、この二重の関係に向き合い、その中にある真実を見つけようということから学ぶほうが良いように思える。

彼は、自分が実際にはどちらの女性にも本質的には属していないのだということを学ぶかもしれない。

こちらの魂は、それぞれ自分自身に属しているようであり、数年もすると自由をとて愛するようになり、他人に対する自分の権利を少しずつ手放すようになる。

ここは、本当に成長したい者にとっては素晴らしい場所だ。しかし、その可能性を十分に活かす者は少ない。

多くの者は地上での経験をただ消化するだけで満足している。意志が自由であることを理解していない者にとっては、魂が地上と同じようにここでも機会を逃している様子を見るのは、気が滅入ることだろう。

こちらには教師たちがいて、人生の神秘——こちらの人生、あちらの人生、そして遠い過去について——真剣に学びたいと望む者を助ける準備ができている。

もし人が、自分の最近の地上での生活が長い一連の生の中の一つにすぎないと理解し、遠い過去の

記憶を取り戻すことに意識を集中するなら、それを取り戻すことができる。

物質という覆いを脱ぐだけで魂がすべての曇りから解放されると考える人もいるかもしれない。しかし、地上でもこちらでも同じように、「物事はこうあるべきだからこうなのではなく、そうであるからそうなのだ」。

私たちは、自分が受け入れる準備ができていて、なおかつ自分が求める経験を引き寄せる。そして多くの魂は、地上にいたときと同じように、こちらでも十分に求めている。もっと求めるように伝えてほしい。そうすれば、その求めは必ず応えられる。

第十八の手紙

個々の地獄

少し前に、私は地獄を訪れてみようという意図をあなたに話した。しかし、その方向で探究を始めてみると、そこには多くの地獄があることがわかった。

火と硫黄のいわゆる正統的な地獄に満足しない人は、それぞれが自分の想像にふさわしい心の素材によって、自分自身の地獄を作り上げるのだ。

私は、人間は自分自身を地獄に置くのであって、神がそこへ置くのではないと考えている。私は火と硫黄の地獄を探し始め、それを見つけた。ダンテは、私が見たのと同じものを見たに違いない。

しかし、ほかにも個人的な地獄がある……

(筆記は、明らかな理由もなく突然ここで止まり、その夜は続けられなかった。)

第十九の手紙

天国の小さな家

前にあなたに手紙を書いてから、私はとても興味深い一人の男性に出会った。

彼は恋人であり、十年ものあいだここで愛する人が来るのを待っていた。

地上では彼は死んだと言われ、彼女には別の人を愛するように勧められていた。

しかし彼女は彼を忘れることができなかった。

なぜなら毎晩、彼は夢の中で彼女の魂に会いに来ていたからだ。

毎晩彼女はここへ出てきて彼に会い、ときには目覚めたあとでも、眠っているあいだに彼が語ったことのすべてを思い出すことができた。

彼女は彼に、自分は太陽の世界に長くとどまらず、自ら光を放つこの世界へ来ると言っていた。

ほんの少し前に、彼女はついにやって来た。彼は長いあいだ彼女の来る準備をしており、この世界の物質を使って、地上で彼女のために建てるはずだった小さな家を作り上げていた。

彼は私に、ある夜、夢の中で彼女が彼にこう言ったときのことを話してくれた。「明日、私はあなたのもとへ戻り、もう二度と離れない」と。彼は驚き、彼女を引き止めたいとさえ思った。自分は突然で苦しい死を迎えたので、彼女にも同じ苦しみが及ぶのではないかと恐れていたのだ。

彼はいつも彼女を見守り、危険を知らせてきた。しかしこのときは、最初の衝撃が過ぎると、彼女が本当に来るのだと感じた。

そして彼はとても幸せだった。

彼はその後、他の愛を見つけることはなかった。

なぜなら、人が深い愛を抱いたまま地上を去り、その愛する人が忘れなければ、その結びつきは何年ものあいだ弱まることなく保たれるからだ。

地上にいるあなたたちは、ここで学んだことの多くを忘れてしまっているため、あなたたちが私たちのことを思うことがどれほど私たちを幸福にするかを理解していないし、逆にあなたたちが私たちを忘れることが、どれほど私たちを孤立させるかも理解し

ていない。

しばしばこちらで最も遠くまで進み、本当に精神的に成長するのは、地上で愛する者に忘れられた人々である。しかし、それでも忘れられることは悲しいものだ。

そのように私たちを孤独にすることで、あなたたちはある厳しい力を私たちに与えることになる。

しかしすべての魂が、その孤独から生まれる推進力を用いて、精神的な知識の階段を上ることができるほど強いわけでも、高い志を持っているわけでもない。

さて、その恋人たちの話に戻ろう。彼はその日一日中、彼女のそばにとどまっていた。彼は休もうとしなかった。というのも、私が話したように、私たちは

通常、地上に太陽が照っているあいだは少し休むからだ。

その日一日中、彼は彼女のそばにいた。

しかし彼は彼女の身体を見ることはできなかった。太陽の光が強すぎたからだ。だが何時間も待ったあと、突然彼は自分の手の中に彼女の手を感じた。そして彼女は見えなかったが、ここにいるとわかった。

彼は彼女に話しかけた。地上にいたときと同じ言葉を使って。しかし彼女は理解していないようだった。

彼はもう一度話しかけたが、彼女は答えなかった。それでも彼は、彼女の手握りから、自分の存在に気づいていることを知った。

こうして二人は手を取り合い、太陽の光の中の闇の中に立っていた。彼はこの微細な音の世界での長い経験によって話すことができたが、彼女は言葉を失い、戸惑いながらも彼の手を握り続けた。

太陽の光が消えると、彼は彼女の顔を見ることができた。彼女の目は大きく見開かれ、恐れに満ちていた。しかし彼女は、かつて自分であった身体が横たわるその部屋に、まだ引きとめられているようだった。季節は夏で、窓は開いていた。彼は彼女を、彼らにとっては昼である香りに満ちた夜の中へ連れ出そうとしたが、彼女は彼の手を離さず、行こうとしなかった。

ついに彼は彼女を少し離れたところへ導き、再び話しかけた。今度は彼女は聞こえ、答えた。

「愛しい人、どちらが本当の私なの？ 私はあそこにも自分を見ているし、ここにも自分を感じている。二つの場所にいるみたいなの。どちらが本当の私なの？」

彼は優しい言葉で彼女を慰めた。しかし彼はまだ彼女に触れることを恐れていた。魂の触れ合いは非常に強烈であり、彼女が再び近くにあるその身体のほうへ戻ってしまい、再び彼を離れてしまうのではないかと恐れたからだ。

しかし彼女はこれまで夢の中で彼に会っていたとはいえ、今回はそれよりもはるかにはっきりとしており、彼は彼女が本当に大きな変化を通過したのだと感じていた。

彼女は彼の手を握り続けていたが、そこから離れ

て彼とともに行くことを恐れているようだった。彼は
その夜も、その次の日も彼女とともにそこにとどま
った。再び太陽が暗くなると、彼はまた彼女を見る
ことができなくなった。

あるとき、彼女の善意ある友人たちが彼女の身体
に手を加えた。生きている者には必要に思われる
あの儀式を行ったのだが、それは死者にとっては
大きな混乱をもたらすことがある。

彼は二晩目とその次の日も彼女とともにいた。彼
は彼女の両親の悲しみのすすり泣きを聞くことが
できたが、彼らは彼や娘の姿を見ることはできなか
った。しかし二晩目に、彼女の愛した小さな犬がそ
の部屋に入ってきた。その部屋には、二人の魂がま
だ立っていた。そしてその犬は彼らの姿を見ること
ができ、悲しげに鳴いた。彼もそれを聞くことがで
き、彼女もまたそれを聞くことができた。

そしてこのころには、彼が話しかけると、彼女はよりはっきりと彼の言葉を聞くことができるようになっていた。

「彼らはそれをどこへ運ぶの？」と彼女は尋ねた。

彼は、自分がかつて命のない身体のそばに縛りつけられ、その上で愛する人が涙を流していたときのことを思い出した。

そして彼女に、すべてから離れてしまったほうがよいのではないかと尋ねた。しかし彼女にはそれができない、あるいはできないと思っていた。

三日目、彼は彼女の動揺から、彼女の身体が棺に納められていることを感じ取った。しばらくすると、彼は見ることはできなかったが、多くの人々が部屋

にいるのを感じ、悲しげな音楽を聞いた。音楽は一つの世界から別の世界へ届くことができ、人の声よりもはるかにはっきりと聞こえる。人の声は通常、訓練された者でなければほとんど聞こえないのである。

やがて彼の愛する人は激しく動揺し、彼自身もまた彼女への共感によって動揺した。そして二人は、自分たちがゆっくりと——ああ、なんとゆっくりと——進んでいるのを感じた。そこで彼は彼女に言った。

「悲しまないで。彼らはそれを埋葬へ運んでいるのだ。でも君は私と一緒にいるから大丈夫だ。」彼は彼女が深く苦しんでいることを知っていた。

死のある家の上には、単に愛する者を失ったというだけでは説明できない、あの独特の静けさが漂うのは、決して無意味なことではない。残された人々

は、見ることはできなくても、去っていった者の魂を感じている。彼らの魂は、その戸惑いの中にある者への共感で満たされているのだ。

もし人が、それをすでに一度は通り過ぎたものだということを覚えていれば、その変化は苦しいものではないはずだ。しかし人は簡単にそれを忘れてしまう。私たちはときどき地上を「忘却の谷」と呼ぶ。

その後の数日、数週間のあいだ、この恋人は愛する人のそばにとどまり続け、彼女を地上から、そして彼女にとって——多くの人にとってそうであるように——恐ろしいほどの引力を持つそのものから引き離そうと努めた。

地上で長く生きた者の魂ほど、より容易にそこから離れることができると言われている。しかしこの女性はまだ若く、三十歳くらいであったため、恋人の

助けがあっても、自由になるまでには少し時間がかかった。

だがある日(あなたの言い方では夜だが)、彼は彼女に、自分が彼女のために建てた家を見せた。それは文字通り、空に浮かぶ邸宅だった。彼女は彼とともにそこへ入り、それが二人の家となった。

ときには彼がしばらく彼女のもとを離れることもあれば、彼女が彼を離れることもある。というのも、共にいる喜びは、地上と同じように、ときおりの離別によっていつそう深まるからだ。しかし彼女が満ち足りて新しい生活に慣れるまでは、彼はまったく彼女のもとを離れなかった。

最初のころは、地上での空腹の習慣がしばしば彼女を支配し、彼はそれを満たそうとして、こちらで知っているより柔らかで精妙な物質を与えた。やが

て彼女は完全に地上や地上の習慣から離れ、ただときどき夢の中で父や母のもとへ戻るだけになった。

亡くなった人に関する夢を軽く見てはならない。それは必ず何かを意味している。夢の内容がそのまま意味するとは限らない。というのも、二つの世界のあいだの扉は非常に狭く、通り抜けるときに思考がしばしば乱れてしまうからだ。しかし、亡くなった人に関する夢は必ず何かを意味している。私たちはその方法であなたに届くことができるのだ。

先日、私は夢の中であなたのもとへ行った。あなたが囲まれている壁のある庭の門の外、後ろ側に立っていた。私は微笑み、あなたに外へ出てくるよう手招きした。しかし私は、あなたにそこにとどまってほしいと思ったのではない。

ただ霊の状態の外へ出てきてほしかったのだ。なぜなら、ときどきあなたが外へ出てくることで、私があなたの世界へ入ることがより容易になるからだ。

おやすみ。

第二十の手紙

神を見出した男

この、あなたにとっては奇妙なこの世界について教えるのに、私がここで出会った男女との経験や会話を語る以上に良い方法はないように思える。

少し前のある夜、私は聖者のほうが哲学者よりも多く出会ったと言ったが、今度は本物の聖者と思われる一人の男について話したい。そう、小さな聖者もいれば大きな聖者もいる。小さな罪人や大きな罪人がいるのと同じように。

ある日、私は山の頂を歩いていた。「歩いていた」と言うが、こちらではそれほどエネルギーを使わずに歩くことができるとはいえ、感覚としてはほとんど

同じだった。

山の頂で、一人の男が立っているのを見た。彼は遠くを見つめていたが、何を見ているのか私にはわからなかった。彼は物思いにふけり、自分自身、あるいは私にはわからない何かの存在と交わっているようだった。

私はしばらく待った。やがて彼は大きく息をつき——こちらでも私たちは呼吸する——目を私に向け、やさしい微笑みを浮かべてこう言った。

「何かお役に立てることはありますか、兄弟よ？」

私は少しのあいだ戸惑った。彼の甘美な交わりの中に割り込んでしまったように感じたからだ。

「もし無遠慮でなければ」と私は言った。

「あなたがそこに立って空間を見つめていたとき、何を考えていたのか教えていただけませんか？」

自分の図々しさは自覚していた。しかし、知り得ることはすべて知りたいという強い思いがあるので、ときに大胆すぎる質問をしてしまっても、その真剣さによって許してもらえるのではないかと思っている。

その男は、ひげのない美しい顔をしており、目は若々しかった。しかし服装は、自分の外見にほとんど関心を持たない人の、ごく普通のものだった。その外見への無頓着さが、かえって特別な威厳を与えることもある。

彼はしばらく黙って私を見つめ、それから言った。

「私は神に近づこうとしていたのです。」

「神とは何ですか？」と私は尋ねた。

「そして神はどこにいるのですか？」

彼は微笑んだ。彼のような微笑みを私は見たことがなかった。そしてこう答えた。

「神はどこにでもいる。神は在るのです。」

「それは何なのですか？」と私はなおも尋ねた。

すると彼は再び言った。ただし今度は違う調子で。

「神は在るのです。」

「どういう意味ですか？」と私は聞いた。

「神は在る、神は在る」と彼は言った。

彼の意味がどのように私に伝わったのかはわからない。おそらく共感によってだろう。

しかし突然、はっきりと理解が閃いた。

彼が「神は在る」と言ったとき、それは霊が到達し得る最も完全な神の実感を表しているのだということ、そして彼が「神は在る」と言ったとき、それは存在するものはすべて神以外にはない、ということを私に理解させようとしているのだということだった。

私の顔にその感じたことが表れていたに違いない。聖者はこう言った。

「あなたもまた、神が在ること、そして存在するすべ

てが神であることを知っているのではありませんか？」

「あなたの言うことを少しは感じ始めています」と私は答えた。

「ただし、ほんのわずかしかな感じていないでしょうが。」

彼は微笑み、何も言わなかった。しかし私の心は疑問でいっぱいだった。

「あなたが地上にいたとき」と私は言った。

「神についてよく考えていましたか？」

「いつもです。ほとんどそれ以外のことは考えませんでした。私はあらゆる場所で神を求めましたが、

その本当の姿については、ときどき閃きのように感じることはできませんでした。私はよく祈っていましたが、祈りの最中に突然『あなたは何に祈っているのか？』という問いが浮かぶことができました。

そのとき私は声に出して『神に、神に！』と答えました。

しかし何年も毎日祈っていても、その真の神の意識を感じられるのは、ごくたまにしかありませんでした。

やがてある日、森の中で一人でいたとき、大きな啓示が訪れました。それは言葉の形ではなく、言葉も形もない驚異として現れました。

それは思考の限界を超えるほど巨大なものでした。

私は地面に倒れ、気を失ったのだと思います。しばらくして——どれほど時間が経ったのかはわかりません——目を覚まし、立ち上がって周囲を見回しました。

そしてやがて、その体験を思い出しました。それは、体験している最中には私にとって大きすぎるものでした。」

「私は、そのときの実感を言葉にすることができました。それは、私の人間としての力では受け止めきれなかったものでしたが、言葉にするとこうなりました。『存在するすべては神である』と。それはとても単純に思いましたが、決して単純ではありませんでした。『存在するすべては神である』。それは私自身や、すべての仲間の存在——人間も動物も——さらには木や鳥や川までもが神の一部であることを

意味します。もし神が存在するすべてであるならば。」

「その瞬間から、人生は私にとってまったく新しい意味を持つようになりました。

私は、人の顔を見るたびに、あの啓示を思い出さずにはいられませんでした——その目の前にいる人が神の一部であるということを。

私の犬が私を見つめたとき、私は声に出して『お前は神の一部だ』と言いました。

川のそばに立ち、その流れの音に耳を傾けたとき、私は自分にこう言いました。

『私は今、神の声を聞いているのだ』と。誰かが私に対して怒ったときには、『私はどのようにして神を

怒らせてしまったのだろうか』と自分に問いかけました。

誰かが私に愛をもって語りかけてくれたときには、『今、神が私を愛しているのだ』と思いました。

そしてその実感は、息が止まりそうになるほどでした。人生は信じられないほど美しいものになったのです。

「それまでの私は、神のことばかりに心を奪われ、神を見つけようとすることに没頭していたために、他の人々のことをあまり考えず、最も身近な人々さえおろそかにしていました。

しかしその日から、私は人々の中に入っていくようになりました。そして彼らの中に神を見いだそうとすればするほど、神は彼らを通して私に応えてくれ

ることを知りました。こうして人生はさらにすばらしいものになりました。

「私はときどき、自分が感じていることを他の人々に伝えようとしたが、いつも理解してもらえないわけではありませんでした。

そこで私は、神がご自身の何らかの理由によって、ご自身を覆い隠しているのだということに気づき始めました。

それは、ご自身でその覆いを取り去る喜びを得るためなのでしょうか。

もしそうなら、私はできるかぎりその助けをしようと思いました。そこで私は、自分が得た神についての知識を、他の人々にも理解させようと努めました。

何年ものあいだ、私は人々に教えました。最初はすべての人に教えたいと思っていましたが、それが不可能であることにすぐ気づき、自分を弟子と呼ぶ少数の人々を選びました。

彼らはいつも自分が私の弟子であることを公にしたわけではありません。

私がそうしないように求めたからです。

しかし私は彼ら一人ひとりに、自分が与えた知識をできるかぎり他の誰かに伝えるように勧めました。こうして、多くの人々が、あの日森の中で私に示されたあの驚きの一端を感じるようになったのではないかと思います。

あのとき私は、『神は在る、神は在る』という認識に目覚めたのです。」

そう言うと、その聖者は向きを変えて去っていった。

私の多くの疑問は答えられないまま残された。

彼がいつ、どのようにして地上を離れたのか、そしてこちらでどのような仕事をしているのかを尋ねたかったが、彼はもういなかったのだ。

いつかまた彼に会えるかもしれない。

しかし、たとえ会えなくても、彼は私にあるものを与えてくれた。

そしてそれを、彼自身が世界に与えたいと願っていたように、今度は私があなたに与えるのである。

今夜はこれで終わりにする。

第二十一の手紙

魂のゆとり

ここにいる喜びの一つは、夢を見るための時間と、自分自身と向き合うためのゆとりがあることだ。

もちろん、やるべきことはたくさんある。しかし私は数年のうちに再び地上へ戻るつもりでいながらも、自分自身を知る時間は十分にあると感じている。

地上にいたときも、ある程度それをしようとはしていたが、こちらでは私に対する要求が少ない。

衣服を着たり脱いだりするだけの労力でさえ軽く、今は自分の生活費も、他人の生活費も稼ぐ必要がない。

あなたも、そうしようと思えば、何もせずに過ごす時間を持つことができる。人は、自分ができると思うことは、ほとんど何でもできるのだ。

たとえば私は、これから数年のうちに、この四次元の世界の状態についての一般的な知識を身につけるだけでなく、過去の自分の人生を振り返り、そこで学んだことを取り込もうと考えている。

これまでの自分という存在のすべての経験を一つにまとめ、その統合から、将来どの方向に進めば最も無理なく進めるのかを判断したいのだ。そして私は、確信は持てないが、再び生まれるときには、その知識の多くを持ち帰ることができるのではないかと考えている。

私は、いつ頃、そしてどのあたりで再び現れるかを、あなた——あるいはあなた方の誰か——に伝

えようと思っている。

ああ、驚かないでほしい。まだずっと先のことだ。あまり早く戻ろうとすれば急がなければならず、私は急ぎたくはない。

おそらく無理に戻ることもできるだろうが、それは賢明ではない。なぜなら、その場合、望んでいるほどの力を持たずに戻ることになるからだ。

作用と反作用は等しく反対であり、また一つの存在が一定時間に生み出せるエネルギーには限りがある以上、十分な力を持って戻るためには、この軽い物質の状態の中で休み、エネルギーを蓄えるほうがよいのだ。

とはいえ、私は多くの魂のようにはしないつもりだ。彼らは、この世界に飽きるまでここにとどまり、やが

てリズムの流れの抗えない力によって、半ば無意識のまま地上へ押し戻される。私はそのリズムを自分で導きたいと思っている。

こちらに来てから、私の知っているある男が地上へ戻った。私が最初に彼を見つけたとき、彼はすでに戻る準備ができているようだった。奇妙なことに、彼自身は自分の状態を理解していなかった。彼は物事に疲れ、もっと休みたいとこぼしていた。それはおそらく、再び物質の扉を開くための大きな努力に備えた、自然な休息への欲求だったのだろう。こちらへ来るのは容易だが、この世界からあなたの世界へ行くにはある程度の力が必要なのだ。

私はその魂が今どこにいるのかを知っている。教師が教えてくれたからだ。私はその男のことを教師に話したが、教師はすでに彼の存在を知っていた。それは少し不思議だった。というのも、その男は、

教師があまり関心を持たないだろうと思われるような人物だったからだ。

しかし人のことはわからない。もしかすると彼は次の人生で、彼らが教えている哲学を本格的に学び始めるのかもしれない。

さて、こちらの豊かなゆとりについて話していたのだった。あなたにも、もう少しゆとりを持てるように生活を整えてほしいと思う。怠けてほしいわけではないが、心が受け身の状態にあることは、活動している状態と同じくらい価値がある。私たちがあなたに届くことができるのは、あなたが受け身でいるときなのだ。心も身体も常に忙しくしていると、魂からのメッセージを受け取ることは難しくなる。毎日少しでいいから、何もしない時間を見つけてほしい。ときには何もしないことが大切なのだ。そうすれば、半ば意識されていない心の部分が働き始め

る。その部分は、内なる生活があることを思い出させてくれるだろう。地上であなたが触れることのできるその内なる生活こそが、私たちの生きている世界との接点なのだから。

私は二つの世界は触れ合っていると言ったが、それは内側を通して触れ合っている。あなたは内へ入ることでこちらへ来る。逆説のようだが、逆説には大きな真理が隠されている。矛盾は真理ではないが、逆説は矛盾ではない。

人がこちらにとどまる時間の長さはさまざまだ。あなたたちは「ホームシック」という言葉を使うが、こちらにも地上を恋しく思う魂がいる。

彼らはときにすぐに戻ろうとするが、それはたいてい間違いである。若くて前の人生から未使用のエネルギーを十分に持ち越している場合でないかぎ

り、あまりに早く地上へ戻ると、強い反発力を持つことができない。

こちらで、地上を恋しがる人を見るのは不思議なことだ。ちょうど地上の詩人や夢想家が内なる世界を恋しがるのと同じように。

「外」と「内」という言い方は混乱を招くかもしれない。しかし覚えておいてほしい。

あなたは私たちのもとへ来るために内へ入り、私たちはあなたのもとへ行くために外へ出るのだ。

こちらでの通常の状態では、私たちはほとんど主観的な生活をしている。

あなたの世界に触れるにつれて、より客観的になっていく。

あなたは私たちの世界に触れるにつれて、より主観的になっていく。もしそれを理解していれば、あなたはほとんどいつでも、少しのあいだこちらへ来ることができる——十分に深く自分の内へ入ることによって。

もし試してみたいと思い、恐れないなら、私はあなたをこちらへ連れて来ることができる。

身体の意識を完全に失うことなく——つまり深い眠りに入らなくてもだ。

試してみたいときには私を呼びなさい。すぐに来られないこともあるだろうが、そのときは落胆しないでほしい。

そのときたまたま別のことをしているかもしれない

が、その場合は別の機会に来る。

急ぐ必要はない。それをあなたに伝えたいのだ。

今年できなかったことは、来年できるかもしれない。

しかし常に何かを追い求めて急いでいると、この種の仕事ではほとんど成果を上げることができない。永遠という時間は、人間の自己が完全に発達するために十分に長い。

むしろ、そのために用意されているかのように思える。

かつて言われた「人生の目的は人生そのものである」という言葉は、確かなものだった。

私は今、それをより深く理解している。

新しい視点から永遠を見つめる機会を得たからだ。

この視点は、時間と永遠の両方を理解するのに非常に良い。

私は今、以前には見えなかったことが見える。

すなわち、私はこれまで一度も時間を無駄にしたことがないということだ。

たとえ失敗であっても、それは貴重な経験の一部だった。

私たちは失うことで再び得る。私たちは、そこに何があるのかを学ぶために、力の中へ入り、またそこ

から出る。

人生の中に出入りするのと同じように。このことにおいても、他のすべてにおいても、人生の目的は人生そのものなのだ。

急いではない。人はゆっくりと力と知識を身につけることもできるし、力づくでそれらを手に入れることもできる。意志は自由である。しかしゆっくりとした成長のほうが、その反動はより穏やかなものになる。

第二十二の手紙

永遠の蛇

今夜は永遠について話したい。こちらへ来るまで、私はこの問題を本当に理解してはいなかった。私は月や年や世紀という単位でしか考えていなかったが、今では円全体の動きを見渡すことができる。

物質から出てくると、物質へ入っていくことは、自己という心臓の収縮と拡張のようなものであり、永遠という観点から見れば、それらは比較にならないほど短いものにすぎない。

あなたにとって一生は長い時間だろう。かつては私にもそう思えたが、今ではそうは感じない。

人々はよく「もし人生をやり直せるなら、こうするの

に」と言う。

しかし人は特定の人生をやり直すことはできない。
それは、心臓が一つ前の鼓動をもう一度打ち直す
ことができないのと同じだ。

しかし誰もが次の人生に備えることはできる。たと
え自分の人生を失敗だったと思っていても——最
高の理想から見れば、多くの人がそうだろう——
考える力を持つ者であれば、必ず何らかの経験を取
り込み、それを次へ持ち越すことができる。

新しい地上の人生の光の中へ出てきたとき、その
詳細を思い出せないかもしれない。

もっとも、十分な訓練と強い意志によって思い出せ
る者もいる。しかし、ある人生で形づくられた傾向
や、理由のはっきりしない衝動や欲求は、ほとんど

の場合、次へと持ち越される。

あなたは、今の人生だけがすべてだという考え方から離れるべきだ。

また、死後にこちらで送る生活が、一つの状態で永遠に続くものだという考えも捨てるべきだ。

あなたは、今包まれているこの粗い物質の中で永遠に生き続けることができないのと同じように、内なる世界の微細な物質の中で一つの状態のまま永遠に存在し続けることもできない。必ず飽きてしまうし、耐えられなくなる。

どうか、このリズムという考えをしっかりと理解してほしい。すべての存在はリズムの法則に従っている。神々でさえ例外ではない。ただし私たちよりも大きな規模で、より長い周期で、その流れと引き戻

しを繰り返しているのだ。

私は地上を離れたくなかった。最後まで抵抗した。しかし今では、自分がこちらへ来たのは条件によって避けられないことだったとわかる。もしもっと早くから準備していれば、より長い航海のための備えができただろう。しかし燃料も水も尽きてしまえば、港に入らざるを得ない。

小さな人生の船であっても、定められた七十年よりも長い航海に備えることは可能だ。しかしそのためには燃料を節約し、水が無駄にしてはならない。水が生命の流体であることを理解する者もいるだろう。

多くの人は、死後の生活が終わりのない霊的な領域への進歩であるという考えを持っているが、それに反発する人も多い。しかし、そのように語る人の

多くは、自分が言っている「霊的な領域」というものをほとんど理解していない。

永遠の生命はすべての魂にとって可能である。しかし、一つの方角へ進み続けることはできない。進化は曲線であり、永遠は円である。自らの尾を飲み込む蛇のようなものだ。濃い物質の中へ入ること、そこから出ることの両方を受け入れなければ、物質を超えることは決して学べない。中にとどまることも外にとどまることも自由にできる者たちもいるが、彼らはどちらの形の生も避けようとはしない者たちである。

私はかつて、死と呼んでいたものを恐れていた。しかしこちらには、同じように「死」と呼ぶものを恐れている者たちがいる。彼らが死と呼ぶものが何か、あなたは知っているだろうか。それは再び世界に生まれることなのだ。そう、その通りである。

こちらにも、あなたの世界の人々と同じように、このリズムを理解していない者が多い。私は、再び地上へ戻ることになると知らない男女に出会ったことがある。彼らは「大いなる変化」を、地上の人々が死を語るときのように語り、その先にあるすべてを「証明されていないし証明できないもの」として語っていた。それは滑稽でなければ悲劇的なことだろう。

私は、自分が死ななければならないと知ったとき、記憶と哲学と理性を持っていこうと決意した。

さて、ここで少し驚くかもしれないことを言いたい。『The Law of Psychic Phenomena』という本を書いた人物がいて、その中で彼は、心の二つの部分——彼が主観と客観と呼んだもの——について語っている。彼は、主観的な心は帰納的推論を行うことができず、客観的な心から与えられた前提

をそのまま受け入れ、その前提からは驚くほどの論理で推論するが、その前提の背後へさかのぼることはできない、つまり逆にさかのぼって推論することはできないと述べている。

さて、覚えておいてほしい。

私がいるこの物質の状態では、人々は主として主観的な生を生きている。ちょうど地上の人々が主として客観的な生を生きているのと同じように。こちらの人々は主観の中にいるため、地上での客観的な生活のあいだに与えられた前提から推論する。

だからこそ、いわゆる西洋の国々で最後に生きていた人々の多くは、リズムや再生という考えが好まれていないため、もう地上へ戻ることはないという固定した考えを持ってこちらへ来る。

そのため、彼らの多くは今でもその前提から推論を続けている。

あなたは理解していないのだろうか。

こちらで自分がどうなると信じているかが、実際に自分がどうなるかを大きく決めているということ。

再生を信じない者も、永遠にそのリズムから逃れることはできない。しかし彼らはその信念にしがみつき、やがてリズムの潮流が彼らを巻き込み、再び粗い物質の中へ押し戻す。

そのとき彼らはまったく準備ができておらず、こちらでの生活の記憶をほとんど持たずに戻っていく。彼らが地上の生活の記憶をこちらへ持って来たのは、それを持って来るつもりでいたからなのだ。

長いあいだ再生を信じてきた多くの東洋の人々は、自分の過去の人生を覚えている。それは覚えるつもりでいたからである。

そうだ、私が地上を離れなければならないと気づいたとき、私は自分自身に一種の暗示をかけた。

出ていくときも、再び入ってくるときも、記憶を保ち続けると決意したのだ。もちろん、再び重い物質の中へ入るときにすべてを覚えていると断言はできない。

しかし可能なかぎりそうするつもりだし、もし間違った母親を選ばなければ、ある程度は成功するだろう。

この点については十分に注意するつもりであり、再

生の考えに理解のある母親を選びたいと思っている。

できれば、前の人生で私を——として知っていた女性を母に選びたい。

そして幼いころに、自分がその人間であると告げたときに、疑いから私をたしなめたり、内に引きこもらせたりしない人であってほしい。

多くの子どもたちは、こちらでの生活の記憶を地上へ持ち越していると私は信じている。しかしその記憶は、子どもたちは新しく創られた存在であり、「神の手から新たに生まれた」のだといったような考えを絶えず与えられることによって、やがて失われてしまう。

永遠は実に長い。そして地上にも天にも、普通の子

どもを教える教師の哲学では思いもよらないほど多くのものが存在している。

もしあなたが不滅の生命という考えをしっかりとつかみ、それにしがみつ়くことができたなら！

もし自分が始まりも終わりもない存在であると実感できたなら、そのとき初めて本当に価値のあることを始めることができるだろう。永遠という意識は驚くべきものだ。自分を百万年という尺度で考える者にとっては、小さな悩みは本当に小さなものに見える。

数字は十億でも何でもよいが、考え方は同じだ。人は百万年という時間も、百万ドルという金額も、百万という数そのものも、本当の意味では理解することができない。その数字はただ大きさを示す象徴にすぎない。年であれ金であれ、同じことだ。そ

の概念を完全に固定することはできない。常に何かがそこからこぼれ落ちる。どんな大金持ちでも、自分の財産がその瞬間に正確にいくらあるのかを知ることはできない。利子が常に増減し、価値は変動し続けるからだ。不減もそれと同じである。自分が百万年生きたとか何兆年生きたとか考えるのではなく、本当に始まりも終わりもない存在であると考えてなのだ。自分が豊かだと知っている人は、いくら金を持っているという人よりも豊かである。その額が大きかろうと小さかろうと同じことだ。だから永遠の意識の中に安らぎ、その意識の中で行動しなさい。

今夜はこれで終わりにする。

第二十三の手紙

被告のための弁論

私があなたの手を使って書くことで、あなたに害が及ぶのではないかと心配しているあの友人に伝えてほしい。この問題については、こちら側で、教師と私のあいだで十分に検討されたうえで、あなたの側に現れ始めたのだということを。

一般的に言われるミディアムシップ——すなわち、地上にいる多少なりとも不健全な人の身体が無差別に開かれ、善悪を問わず通りがかりの霊に入り込まれたり支配されたりするようなもの——とは、これはまったく別のものである。

ここでは、かつて地上であなたの友であった私が、こちらへ来たあと、より多くの知識を得た立場から

あなたに教えるために手を差し伸べているのだ。

私はあなたの神経系に、無責任で悪意ある力が入り込み、あなたを支配するための通路を開いているわけではない。

実際、もし善であれ悪であれ、そのようなことを試みる霊がいれば、まず私と対峙しなければならないだろうし、私は無力ではない。

私は今では思い出し、また教えられたことによって、一般にミディアムシップと呼ばれているものからあなたを守るための方法を知っている。

さらに言えば、たとえ愛する者を失った人々がどれほど懇願したとしても、あなたは決してそのような人々のために自分を差し出してはならない。いわゆる見えない世界をさまよう者たちが、あなたの身

体が入り込める構造になっているという理由だけで、あなたに入り込む権利などない。

それは、通りの群衆が、好奇心や空腹や寒さを理由にあなたの家に押し入る権利がないのと同じである。許してはならない。

かつて一度だけ許可されたことはある。しかしそれは例外的なものであり、誰の個人的な願望や好奇心に基づいたものではなかった——あなた自身のものでさえもない。おそらく二度と許されることはないだろう。

私があなたとともに書き始めてから、多くのことが変わった。最初のこと、私は外側からあなたの手や腕を使っていた——あなたが覚えているように、ときには翌日動かせなくなるほど強い力で。

それから、自分が見える手段に慣れてくるにつれて、別の方法を試し、あなたも文字の性質が変わったことに気づいたはずだ。

最初はぎこちなく、大きく形の悪い文字だったが、やがて私が使う道具への支配がうまくいくにつれて、次第にはっきりしていった。

そして今では、ここ数回、さらに別の第三の方法を用いている。私はあなたの心の中へ入り、完全なテレパシー的な結びつきをあなたの心と結び、自分が言いたいことを直接あなたの心そのものに刻み込んでいる。

この方法で書くためには、あなたは完全に受け身になり、すべての個人的な思考を静め、私の思考に身を委ねなければならない。

しかしそれは、あなたが魅力的な本を読むときに日常的にしていることと同じである。あなたは心を作
者に委ね、印刷された文字を通して導かれながら、
引き込まれ、受け身になるのだ。

このようにして通信の方法を完成させていく試み
は、私にとって非常に興味深いものであった。

あなたの友人に伝えてほしい。私は子どもでもなけ
れば、無謀な実験家でもない。地上での最後の人
生だけでなく、その前の多くの人生においても、私
は高い学問の探究者であり、真理に完全に身を捧
げてきた。

私はこれまで一度も、人間を軽率に利用して害を
与えたことはないし、ましてやあなたのような真の
友であり学ぶ者に対して、そのようなことを始める
はずがない。

また私は、あなたの生活や学び、仕事にいかなる形で
でも干渉するつもりはない。そのような考えはばか
げている。

地上で二本の足で歩いていたころ、私は危険な人
物だと思われたことは一度もなかった。衣服を変
え、より軽いものをまとったからといって、私の性質
が変わることはない。

私は世界に伝えたいことがある。現時点では、あな
たが私のために書き記すことのできる唯一の人で
ある。これは私の責任でもあなたの責任でもない。
問題は、私が手紙を書きたいかどうか、あるいはあ
なたが書きたいかどうかではなく、それが世界にと
って有益かどうかである。

私は有益だと思っている。あなたはおそらくそうだ

ろうと考えている。Bは、それが非常に価値があり、しかも他に類のないものだと考えている。一方で、誰それや誰それは疑いと不安を抱いている。それは私にもあなたにもどうすることもできない。

彼らのことは大切に思っている。なぜ彼らは、私が通ってきた扉を閉ざそうとするのだろうか。私は決してこちら側から彼らの生活に干渉しようとはしない。

彼らは自分の仕事をやり遂げる力を持っているからこそ、それを担っているのだ。しかしこれは、私が自らに課したまったく別の仕事であり、あなたは親切にもそれを助けることに同意してくれた。

あなたはこの労力に対して、ほとんど報いを得られないかもしれない。せいぜい、知ったかぶりの人々が首を振り、優越感に満ちた笑みを浮かべること

や、より科学的だと自負する人々が、私のことをあなた自身の「潜在意識」にすぎないと示唆することくらいだろう。しかし私はその仮説に腹を立てることはないし、あなたもそうする必要はない。

もちろん、あなたは心配していない。もし心配していたなら、私は書くことができない。私が書くためには、あなたの心は風のない夜の湖のように静かでなければならないのだ。

皆に私の愛を伝えてほしい。

第二十四の手紙

禁じられた知識

最近、私はさまざまなことをしていた。先日どこへ行ったか、あなたには想像もつかないだろう——日本の天皇の大葬に行ってきたのだ。あなたはパリから日本へ行って、そんなに短い時間で戻ってくることはできないだろう。しかし私はそれをした。

出発の一時間前まで、私はその天皇が亡くなったことさえ知らなかった。教師が私を探し出し、一緒に行こうと誘ったのだ。そこで何か、私が見るべきことが起こると言った。

彼の言葉は的中した。私は一つの魂——偉大な魂——が、自ら命を絶つ形で出ていくのを見た。それは悲しく、恐ろしいものだった。

しかしこれを書いているとき、教師がそばに来て立ち、この件についてはこれ以上書かないようにと助言している。

こちらでは美しいものだけでなく、恐ろしいものも目にする。自ら命を絶つことについて言えるのはただ一つ、もし人々がそのようにして去る者たちに何が待っているかを知っていたなら、彼らは自分の知っている苦しみの中にとどまるほうを選ぶだろうということだ。これ以上詳しく話せないのは残念だ。あなたにとって興味深い内容だろうからだ。目撃者の証言は、理論の繰り返しよりも常に説得力がある。

教師が現れて助言したことで、しばらく書く気持ちが途切れてしまった。しかしまた来るつもりだ。

後記。

あなたがとても望んでいたことを、私は実現することができた——溺れて偶然にこちらへ来てしまったあの少年を見つけたのだ。

あなたがその写真を見ていたとき、私はあなたの目を通してそれを見て、その顔を記憶にとどめた。そして私は彼を見つけた。彼はあたりをさまよい、ひどく戸惑っていた。私があなたのことを話し、あなたが彼を助けてほしいと頼んだのだと言うと、彼は驚いた様子だった。

私は少しだけ彼を助けることができた。もっとも、彼にはここに友人がいる——年配の男で、私よりもはるかに彼に近い存在だ。彼は徐々に新しい状況に慣れていくだろう。

あなたは彼と話そうとしないほうがよい。彼は別の道を歩んでおり、すでに見守られている。彼には仲間がいるからだ。

私ができた助けは、情報を与えるという程度のものであった。彼はある思いにとらわれすぎていたので、それを紛らわせる必要があった。そこで、楽しくもあり、かつ学びにもなるような時間の過ごし方をいくつか提案した。

「時間を過ごす」という表現に、あなたは疑問を持つかもしれない。しかしこちらにも時間は存在する。

順序があるところには時間がある。過去・現在、そして——未来と言ってよいだろうか——それらがすべて同時に存在する「時」が来るかもしれない。

しかし過去・現在・未来がある程度区別されている
かぎり、時間は存在する。それは単に順序の原理
にすぎない。それ以外のものだと思っていたのだろ
うか。

内面、つまり自己の奥深くにおいては、すべてが一
つに調和して存在しているかのように感じられる静
かな場所を見いだすことができる。しかしその中で
さえ、魂がそれぞれを個別に見ようとした瞬間に、
順序が生じる。

すべてと一つになるということは、また別の問題で
ある。それは時間を超えているように見える。しか
し、何かと結びつこうとしたり、それを意識しようと
した瞬間に、時間が現れるのである。

第二十五の手紙

影のない世界

私はここに来てしばらくしてから、この世界の最もはっきりした特徴の一つに気づいた。

ある夜、ゆっくり進んでいると、一団の人々がこちらへ近づいてくるのが見えた。彼らのいるあたりはとても明るかった。

人数が多かったからだ。ふとその光を見たとき、ある言葉が思い浮かんだ。ヘルメス学の書物にある言葉だ。

「光が最も強いところには、最も深い影がある。」
しかしその男女をよく見ると、彼らには影がまったくなかった。

私は一番近くにいた男に声をかけた——これは私がまだ来たばかりで、今よりもずっと無知だったころのことだ——そして、この影のない、しかも非常に明るい世界という奇妙な現象について指摘した。彼は私の驚きに微笑み、こう言った。

「あなたはここに来てまだ間もないのでしょうか？」

「はい。」

「では、私たちが自分たちでこの場所を照らしていることをご存じないのですね。私たちの身体を構成している物質は発光しているのです。あらゆる方向へ光が放たれているのに、どうして影ができるのでしょうか。」

「では太陽の光の中ではどうなのですか？」と私は

尋ねた。

「ああ」と彼は答えた。「太陽の光の中では、私たちはまったく見えません。太陽の光は粗く強すぎて、霊の光を打ち消してしまうのです。」

今この瞬間、あなたが座っているその薪の火の暖かさを、私が感じていると言ったら、不思議に思うだろうか。

薪の火には不思議な力がある。石炭の燃焼は、サイキックな雰囲気にもまったく異なる影響を与える。

もしこれまで一度も幻視を見たことがなく、見えない世界の微妙な感覚や予感に鈍感だった人が、毎日一時間か二時間、燃え盛る薪の火の前で静かに心を落ち着けてみるなら、その人の目や他のより微細な感覚は、それまで夢にも思わなかったようなも

のに開かれるかもしれない。

火によって神を礼拝する東洋の人々は賢く、多くの幻視を持っている。燃える蠟の光にもまた魔法のような作用がある。ただし薪の火とは異なる種類のものだ。夕方、一本のろうそくの灯りだけの中で座ってみなさい。すると「虚空」からどのような光景が現れるかを見ることになるだろう。

長いあいだ、私は少年リオネルについて何も話していなかった。彼は今、生まれ変わるときに技術者の家に生まれたいという考えにとっても興味を持っている。その考えに何度も戻っている。

「どうしてそんなに急いで私のもとを離れようとするのだ？」と、彼がその話を初めてしたとき、私は尋ねた。

「でも、完全に離れる感じはしないんだ」と彼は答えた。

「夢の中であなたのところへ来ることもできるだろうし。」

「最初は無理だ」と私は言った。

「しばらくのあいだは閉じ込められたような状態になり、見えず聞こえずになる。そして私のところへ来られるようになるころには、私もすでに地上へ戻っているかもしれない。」

「じゃあ一緒に来ればいいじゃないか」と彼は言った。

「ねえ、父さん、どうして僕たち双子として生まれないんだ？」

その考えはあまりにもおかしくて、私は大声で笑った。

しかしリオネルには何が面白いのかわからなかった。

「双子というものは実際にいるんだよ」と彼は真面目に言った。

「ボストンにいたとき、双子の兄弟を知っていたんだ。」

しかし私は、地上へ戻るときに誰かの双子になるつもりはない。だからしばらく私と一緒にいたいなら、ここで静かにしていなさいと彼に言っている。

「でもどうして一緒に戻れないの？」と彼はなおも

尋ねる。「いどこでも、近所でもいいからさ。」

「もしかしたらできるかもしれない」と私は答える。

「ただし、そんなに急がなければな。」

この少年は不思議だ。この世界には、微細な物質を使って働いたり、発明したり、実験したりする機会が無限にあるのに、彼は鉄や鋼に触れたがっている。奇妙なことだ。

いつかの夜、彼をあなたのもとへ連れて行こうと思う。あなたが眠りに落ちる直前に、彼を見ることができるようだ。

そのときに見えるものこそが本当の幻視である。眠ってから見るものは、目覚めの状態へ戻るときに通る抜ける物質の揺れによって混乱しやすい。少年

のことを忘れないでほしい。私はすでに、どのようにしてあなたの手を使って書いているかを彼に話してあり、彼はとても興味を持っている。

「どうして僕もその方法で電信を操作できないの？」と彼は尋ねたが、私はやめておくように勧めた。すでに送信され料金も支払われた地上の通信を邪魔してしまうかもしれないからだ。

ときどき私は彼を連れて、パターンの世界へ行く。彼はそこで自分の小さな模型を持っていて、私が他のものを調べているあいだ、それで遊んでいる。

それは車輪の模型で、彼は自分の指から出る電気でそれを回している。もちろん、それはあなたの知っているような鋼でできているわけではない。

あなたの言う鋼は重すぎる。この世界ではあまりに

も速く落ちてしまい、跡さえ残さないだろう。

理解してほしい。

二つの世界は、単に振動の速度が違うだけでなく、異なる性質の力を帯びた物質からできている。

二つの固体は同じ場所を同時に占めることはできないと言われるが、その法則は、あなたの世界の物体とこちらの物体の組み合わせには当てはまらない。

水が熱くもあり濡れてもいるように、同じ空間の中に、地上の物質とエーテル的な物質が同時に存在することができるのだ。

言葉の問題で議論しないでほしい。こちらで使っている物質を表す言葉は、あなたには存在しない。な

ぜならあなたはそれを知らないからだ。もし今この瞬間、暖炉の前の敷物の上にリオネルと彼の電気の車輪を置いたとしても、あなたには見えないだろう。

あの薪の火の不思議な力でも、それらを見えるようにはできない——少なくとも昼間の光の中では。

そのうちのある晩に——いや、その話はまた別のときにしよう。もう行かなければならない。

第二十六の手紙

砂の上の円

私は今、こちらでの人生のロマンをようやく楽しみ始めたところだ。もともと私はロマン的な気質を持っていたのだろう。

しかし場所を変えてからでなければ、それに十分に身を任せる時間も機会もなかった。

地上では、やるべきことが多すぎた。義務も多く、求められることも多すぎた。だがここでは私は自由だ。

あなたは、以前こちらにいたときのことを思い出せないかぎり、この自由というものの意味を理解することはできないだろう。そして今のあなたにはまだ

それを思い出せないと思う。

私が「ロマン」と言うとき、それは存在の魅力、人生の灰色の顔をバラ色に変える魔法のような触れ方のことを意味している。何を言いたいかはわかるだろう。

夢を見る時間があり、その夢を実現することができるのはすばらしいことだ。というのも、こちらでは夢と実現が同時に起こるからだ。すべてがとても現実的で、想像力は非常に強く、物事を結びつける力もほとんど限りなく大きい。

こちらで夢想する者たちは、決して怠けているわけではない。

私たちの夢は一種の創造なのだ。仮にそうでなかったとしても、私たちは好きなように過ごす権利が

ある。私たちは休暇を得るだけの働きをしてきたのだ。やがてまた労働はやってくる。再び粗い物質をまとい、その重さを引き受けることになる。

考えてみてほしい。地上では、重い足を一步一步動かし、百ポンドや二百ポンドもある身体を一マイル運ぶだけでも大きなエネルギーを必要とする。

それに比べれば、こちらで世界を一周するほうがよほど少ないエネルギーで済む。これが、私たちが楽しみや夢の創造のために使える余剰のエネルギーの大きさだ。

おそらく地上では、あなたは働きすぎている——本当に必要な以上に。周囲に積み上げている無数の不要なもの、人工的に作り出された欲求、それらを満たすための息もつかせぬ生活の速度。

それらは私たちから見ると、ばかげていて、どこか哀れにさえ思える。あなたたちの経済は子どもの遊びのようなものだし、政府は必要のないことを行うための重々しい仕組みにすぎない。

あなたたちの仕事の大半は無意味であり、もしあれほど苦しむことがなければ、魂が——望まなくとも——自分たちの努力の多くがむなしいものであると学ぶこともなかっただろう。

そうでなければ人生はほとんど無意味なものになっていただろう。

かつて私は、砂の上に自分の小さな円を描くために、どれほど苦勞し、汗を流し、うめいていたことか。

しかし今では、もっと時間をかけて考えていれば、

過去の人生で得た知識の一部を思い出すことができただろうと思う。

たとえ結局は同じように円を描かなければならなかったとしても、もっと容易に、半分の時間でできただろう。

こちらでは、望めば何時間でも雲の色の変化を眺めて過ごすことができる。

あるいはもっと良いのは、仰向けに横たわって思い出すことだ。思い出すというのは実にすばらしい。

心を年から年へ、人生から人生へ、世紀から世紀へとさかのぼらせ、ついには自分が——亀であったところにまで戻ることができる。しかし同時に、前へと進むこともできる。

人生から人生へ、世紀から世紀へ、時代から時代へと進み、ついには自分が大天使になっているところに至る。後ろを見ることが記憶であり、前を見ることが創造である。

もちろん、私たちは自分自身の未来を創っている。他に誰がそれをするだろうか。

私たちは他者によって影響を受け、動かされ、導かれ、助けられたり妨げられたりするが、鎖を鍛えるのは常に自分自身なのだ。私たちは自分で結び目を作り、それを後になって苦労しながら解かなければならない。

過去の人生をたどる中で、私は最後の人生の理由や意味を理解するようになった。

それは多くの人生の中でも、ある意味では最も満

足のいかないものの一つだった——一つを除いて。

しかし今ではその目的がわかる。そして、こちらにいたときに自分でその計画を立てたのだと理解している。

私はある時期に地上へ戻ることを決め、そこで特定の友人たちと出会うように手配していたのだ。

しかし今、私は転機を越え、再び上昇の道を歩み始めている。すでに次に来るときのための準備も始めているが、急ぐ必要はない。どうか安心してほしい。私はこの自由と喜びを十分に味わうまでは、地上へ戻るつもりはない。

また、まだ多くの学びも必要だ。これまで忘れていたが今思い出している過去の人生で学んだことを

見直したいのだ。

学校に通っていたとき、数週間や数か月前の授業を復習することがあっただろう。その習慣は正しい原理に基づいている。

今、私はその復習をしている。そしてやがて地上へ戻る前に、この復習をさらに見直し、特に持ち帰りたい記憶を意志によってしっかりと定着させるつもりだ。

今、私の記憶の前に広がっている膨大な経験の全体をそのまま持ち帰ることはほとんど不可能だ。

しかし、いくつかの基本的なこと——哲学的な原理や例——は決して忘れてはならない。

また、いくつかの方法や、あなたがいわゆるオカル

トと呼ぶであろう実践の習慣も持ち帰りたい。

それによって、新しい身体で再び成熟したときに、この壮大な経験の全体を意志によって呼び戻すことができるようになる。

いいかい、あなたの過去については教えない。あなた自身で取り戻さなければならないし、取り戻すことができる。記憶と想像の違いを知っている者なら誰でも可能だ。その違いは微妙だが、昨日と明日の違いと同じくらい確かなものだ。

あなたには、こちらへ来てとどまることを急いでほしくない。できるかぎり長く今いる場所にとどまりなさい。

こちらで私たちがしていることの多くは、まだ身体を持っている状態でもほとんど同じようにできる。

ただしより多くのエネルギーを使う必要はあるが、それがエネルギーの役目だ——使うためにある。蓄えるときでさえ、それは将来使うために蓄えているのだ。そのことを忘れてはならない。

私が今、よく休み、夢を見て楽しんでいる理由の一つは、できるだけ多くのエネルギーを蓄え、力を持って戻るためだ。

あなたが少し怠けること、そして自分自身の魂と親しくなることについて、私の助言を受け入れてくれたのは良いことだ。

自分の魂を探そうと意識的に取り組む者には、驚くべき発見が待っている。魂は追いかけてもつかめない幻ではない。それは進むべき道を示し、物質主義や忘却の岩礁を避けるための灯台の光であ

る。

私はギリシャでの転生を振り返ることで大きな喜びを得た。あのギリシャ人たちの集中力はすばらしかった。彼らは多くを知っていた。たとえばレーテの水——何という発想だろう——あれは見事な記憶によってこちらからもたらされたものだ。

もし人が思い出そうとするなら、もし自分がこれまで何であったかを考える時間を持つなら、将来どうなり得るかについての希望はもっと大きくなるだろう。

人は神のような存在になることさえできる——あるいは、普通の人間と比べれば神と呼べるほどの大きさと威厳を持つ存在になることができるのだ。「あなたがたは神である」という言葉は、単なる比喩ではなかった。

私はガリラヤの師(イエス・キリスト)と出会い、交わりを持った。あの人は人であり、同時に神でもあった。今こそ世界はあの存在を必要としている。

第二十七の手紙

魔法の輪

あなたの人生と私たちの人生の違いは、私がいくら言葉で説明しても、完全に理解するのは難しいだろう。まずは物質の違いから考えてほしい。私たちの身体を形づくっている物質だけでなく、私たちを取り巻く自然のものの物質も違うのだ。

こちらの世界のものに対して「自然のもの」という言い方をすることに、違和感を覚えるだろうか。まさか私たちが自然から逃れたと思ってはいなかっただろうね。誰も自然から逃れることはできない——神でさえもだ。自然は存在している。

想像してみてほしい。六十年、七十年ものあいだ、重い地上の身体の中で生きてきたとする。その身

体は太りたがり、関節はこわばり、リウマチになり、ときにはストライキを起こすように動かなくなり、寝込んで不器用な修理を受けなければならない。

そんな身体を、ある日突然、軽くて弾力のある身体に取り替えたとしたらどうだろう。想像できるだろうか。正直に言って、私自身も一、二年前なら想像するのは難しかっただろう。

この身体をまとい、しかもそれ自体が光を放ち、太陽の粗い光に消されないかぎり自分の周囲を照らすような状態で、場所から場所へ、人から人へ、考えから考えへと移動する自分を思い描いてほしい。

やがて時間がたつと、食べ物を求める習慣さえ次第に薄れていく。私たちはもはや空腹や渇きに悩まされることはない。とはいえ、たとえば私はときどき

少しだけ栄養を取ることがあるが、それはかつて食べていた肉料理に比べれば、ほんのわずかな量にすぎない。

そして私たちは、地上にあった数えきれないほどの細かな義務にももはや悩まされることはない。

こちらでは、気分というものに対してより信頼が置かれている。

約束というものも、あまりしない——つまり拘束力のある約束だ。たいていの場合、例外はあるにせよ、望みは自然に一致する。私が友人に会いたいと思うとき、ちょうどその友人も私と会いたいと思っていて、私たちは自然に引き寄せられるように出会う。こちらでの交わりは非常に美しいが、一人でいる時間にもまた独特の魅力がある。

最初の二、三か月を過ぎてからは、私は孤独を感じなくなった。

もちろん最初は、水から出された魚のような気分だった。ほとんどの人がそう感じる。ただし、地上への執着や野心を持たない非常に霊的な人々の場合は例外もある。

私は「死ぬ」という考えに強く抵抗していたので、この新しい状態は最初、自分の敗北の証のように思えた。

そして私は、地上での激しい生活の中でより有効に使えたはずの貴重な時間を無駄にしてしまうのではないかと感じながら、あてもなくさまよっていた。

もちろん教師は私のもとに来た。しかし彼は賢明す

ぎて、最初から私を背負って運んでくれるようなことはしなかった。

彼は私にいくつかの原則を思い出させ、それを自分で応用するように任せた。そして私がその応用をつかむにつれて、自分自身をもつかめるようになった。

やがて少しずつ、この新しい状態の美しさと驚きが見えてきて、時間を無駄にしているのではなく、後に活かせる大きな経験を積んでいるのだと理解するようになった。

私はここで多くの人と話をしてきた。知的にも道徳的にもさまざまな段階にある人々だ。しかし残念ながら、人生の意味や成長の可能性をはっきり理解している人は、地上と同じくらい少ない。

前にも言ったように、身体の質が変わっただけで、突然すべてを知るようになるわけではないのだ。

地上でうぬぼれていた人は、こちらでもうぬぼれていることが多い。

ただし、次の人生では、その反作用の法則によって——もしうぬぼれすぎていたなら——しばらくのあいだ控えめな、あるいは内気な人として戻されることもある。こちらへ来るとき、人は自分の性格や特徴をそのまま持ってくる。

私は、人生のあいだ仕事の習慣に縛られていた人々を気の毒に思うことが多い。

そうした人々の多くは、長いあいだそこから離れることができず、こちらで楽しむ代わりに、以前の仕事の場面へ何度も戻り、戦略や金銭の問題を繰り返す。

返し考え続け、まるで死ぬ前と同じように疲れ切ってしまう。

あなたも知っているように、こちらには教師たちがいる。私の教師ほどの存在は少ないが、新しく来た魂を助けることを喜びとしている者は多い。

彼らは新しい者を完全に放置することは決してない。助けは常に差し伸べられている。ただし、それが受け入れられないこともある。

その場合でも、何度も繰り返し与えられる。人に尽くす者たちは、報酬も感謝も求めずにそれを行うからだ。

もし私がこちらの生活について科学的な論文を書くつもりであったなら、まったく違う形で始めていただろう。まず十年ほど待って、すべての事実を整理

し、分類してから書き始めただろう。

そして最初から順序立てて書き、あなたが途中で眠ってしまうほど退屈な本になっていたはずだ。

そしてあなたが眠り込んで落とした鉛筆を、私はときどきつついて拾わせなければならなかっただろう。

しかし私は、こちらへ来てまもなく書き始めた。

これらの手紙は、異国を旅する旅人の手紙のようなものだ。そこには印象が記され、しばしば誤りもあり、ときには偏った見方もあるかもしれない。しかし少なくとも、誰かの言葉を繰り返しただけのものではない。

あなたが私の写真を暖炉の上に置いてくれている

のは良いことだ。それは私が来る助けになる。写真には大きな力がある。

私は最近、夢というキャンバスの上にあなたのためにいくつかの絵を描いてきた。あることのむなしさや無意味さを示すためだ。

私たちにそんなことができると思わなかったのかね。

いわゆる死者が生きている者に影響を与える力は非常に大きい。ただし共感のつながりがある場合に限る。望まない影響から身を守る方法はすでに教えたのだから、恐れる必要はない。こちらからの攻撃の危険があれば、私は必ず警告するために見張っている。

すでにあなたの周りには魔法の輪が描かれてお

り、たとえ望んだとしても、それを越えられるのは非常に進んだ強力な存在だけだ——教師と私が一緒にそれを作った。あなたは今、私たちの仕事をしているのだから、守られる権利がある。働く者が報酬を受けるのは当然だという原則は、どちらの世界でも同じである。

今や、悪意ある無責任な霊的存在を呼び込む扉を開くことができるのは、あなた自身だけだ。もしうっかりそれを開けてしまっても、私たちはすぐにそれを閉じるために駆けつける。こちらにはある程度の権限があるのだ。そう、こんなに早くそう言えるようになったことに、あなたは驚くだろうか。

第二十八の手紙

もしあなたがたが幼子のようにでなければ

かつて私は、この世界を「遊びの世界」と呼ぶ男の話を聞いたことがある。「なぜなら」と彼は言った。「ここでは私たちは皆子どもであり、自分の望む環境を自分で作り出すからだ。」遊んでいる子どもが椅子を塔にしたり、跳ね回る馬にしたりするように、私たちもこの世界では、想像したものをその瞬間に現実のものにすることができる。

子どもの想像力のあの驚くべき鮮明さに、あなたは驚いたことがないだろうか。子どもは恥ずかしげもなく、確信をもってこう言う。

「この敷物は庭だ。この床の板は川だ。この椅子は城だ。そして私は王様だ。」

なぜ子どもはそんなことを言うのだろうか。どうしてそんなことが言えるのだろうか。それは——ここが重要な点だが——つい最近までいたこちらでの生活を、無意識のうちにまだ覚えているからだ。彼は失われた自由と想像力の力の一部を、地上の生活に持ち越しているのである。

だからといって、この世界のすべてが想像の産物だという意味ではない。

決してそうではない。ここに存在するもの、微細な物質の中に存在するものは、あなたの世界のものと同じように現実であり、比較的しっかりした存在である。しかしここには、さらに微細な物質——思考の物質——における創造の可能性がある。

あなたが地上で何かを形あるものとして作るとき、

それはまず思考の中で作られる。しかしあなたの創造と私たちの創造には違いがある。あなたは、思考の型のままでは、それが本当に存在しているとは信じない。固い物質で形を与えて初めて、それが現実だと認めるのだ。

しかしこちらでは、私たちは他者の思考による創造物を見ることができる——お互いがそう望めば。

そして、これはあなたを安心させるために言うが、私たちはあなたの思考による創造物も見ることができる。

そして自分たちの意志の力をあなたの意志に加えることで、それをよりはっきりとした形で現実化するのを助けることもできる。

ときには、特に長く残し、他の者が見て楽しめるよ

うにしたい場合、こちらでも少しずつ積み上げるようにして作ることがある。しかし思考による形は、高く発達した霊にははっきりと見える。

もちろん、すべての霊が高く発達しているわけではない。むしろ、かなり進んでいる者はごく少数だ。しかしこちらで最も鈍い人でさえ、あなたたちの多くが失ってしまったものを持っている——それは、自分の思考による創造を信じる力だ。

この創造を可能にする力は、魂が再び固い物質をまとったときにも失われるわけではない。しかしその力は次第に押さえ込まれ、想像力は、大人たちの不信によって弱められてしまう。大人たちは子どもにこう言い続ける。「それはただの遊びだ。それは本当ではない。ただの想像にすぎない」と。

もしこれらの手紙を出版することがあるなら、この

箇所にはワーズワースのあのすばらしい詩「幼年期の
記憶からの不滅の暗示」の一節を入れてほしい。

「われらの誕生はただ眠りと忘却にすぎない。
われらとともに昇る魂、われらの生命の星は、
かつて別のところに沈み、
遠くからやって来る。
完全な忘却のうちにではなく、
まったく何も持たぬ状態でもなく、
栄光の雲を引きずるようにして、
われらは来る、われらの故郷である神のもとから。
幼きころ、天はわれらのまわりにある。
やがて成長する少年のまわりに、
牢獄の影が閉じ始める。
しかし彼は光を見、その源を見る、
そして喜びの中でそれを見る。
若者は日ごとに東から遠ざかりながらも、
なお自然の祭司であり、

その輝かしい幻に導かれて進む。
やがて人はそれが消え去り、
ありふれた日の光の中に溶けていくのを見る。」

想像力の可能性にはほとんど限界がない。しかし
その力を十分に発揮するには、自分の想像を信じ
なければならない。もしあなたが子どもに言う母親
のように、自分に向かって「これはただの遊びだ。
本当ではない」と言い続けるなら、思考の中で作っ
たものを現実にすることは決してできない。

想像力そのものもまた子どものようなものであり、
励まされ、信じられなければ成長できず、本来の働
きを果たすことができない。

あなたたちの中には、私がこちらにいることによっ
て助けられている人もいる。それは幸いなことだ。
私はここにいるほうが、あちらにいるときよりも多く

のことができる。なぜなら今は、以前よりもさらに自分の想像力を信じているからだ。

この世界を「遊びの世界」と呼んだあの男は、自分の内にある力を使ってさまざまな実験をしている。

彼から聞いた話をここで語る許可は得ていないが、それらはあなたを驚かせるだろう。

その一つとして、彼はいわゆる死後に、自分と妻が生前に不可能だと思っていた共同の計画を実現するのを助けた。それはある種の家を建てることだった。

しかし、こちらの人々の大半が地上に家を建てようとしているなどと思ってはいけない。決してそうではない。多くの者は、自分がいる場所で働くことに満足しており、地上のことには関わろうとしない。も

ちろん、私のように一つの世界だけでは満足せず、両方に関わりたいと思う「夢見る者」もいるが、彼らは地上で詩人が少ないのと同じように、ここでも少数派だ。大多数の人にとっては、そのとき自分がいる世界で十分なのだ。

ただし私には一つ、地上で実現するのを手伝うと楽しいと思う考えがある。あなたはそれに気づかないかもしれないが、私はそれを知っているだろう。

もちろん私は、誰かの現在の生活に干渉していると思われるようなことは決してしない。しかし、見えづ感じられない形で、自信に満ちた想像の力によって助けることができるなら、害はなく、私は一つの証明をしたことになるだろう。

第二十九の手紙

予期しなかった警告

これらの私の手紙を読んだことで、軽率でよく考えない人たちが霊を探し回り、人間の領域に無責任で、しばしば嘘をつくエレメンタルの霊たちを招き入れるようなことがあっては、私は非常に残念に思う。そういうことは決してしないように伝えてほしい。

あなたの手を通してこのように私が来ることは、まったく別の問題である。私は手順の科学的な方法を教えられていなければ、このようなことはできなかったし、また、あなたが自分の余計な思考や、関係のあるなしにかかわらず質問を差しはさんで私を絶えず妨げるようであれば、これもできなかった

だろう。

あなたが完全に受け身で、好奇心さえ持たず、私が地上で速記者の手を使ったのと同じようにあなたの手を使わせてくれるからこそ、私は長くまとまった文章を書くことができるのだ。

ほとんどの霊的な通信は、たとえ本物であったとしても、価値はあまりない。その理由は、それらがほとんど常に、それを通す人間の心によって色づけられてしまうからである。

これらのメッセージが来ているあいだ、この問題について何も読まないこと、そして私がいるこの世界について何も考えないようにしているのは正しい。そうすることで、先入観を避けることができ、それが私の考えの流れを妨げることもなくなる。

あなたも知っているかもしれないが、私は地上にいたころ、スピリチュアリズムを調べていた。

他の多くのオカルト的な事柄と同じように、その背後にある真理を求めて調査していたのだ。

しかしそのときも、そして今ではなおさら強く確信しているのだが、このような現象が存在するという科学的な証明——それ自体にはもちろん証明としての価値はあるが——それを除けば、ほとんどの霊探しは時間の無駄であるだけでなく、それに関わる人にとって明らかな害でさえある。

これは、いわゆる「霊」であり、実際に今この瞬間にも世界と通信している存在から言われると奇妙に聞こえるかもしれない。そう感じるなら、それは仕方がない。もし私が矛盾しているように見えるなら、そう見えるだけのことだ。しかし私は、無責任な

ミディアムシップをはっきりと否定する立場を取っておきたい。

もしミディアムシップに参加する人が、そのサイキックな通路の向こう側に、本当に誠実で重要なことを伝えるべき存在がいて、しかもその人を通してそれを伝えることができると確信できるなら、話は別だ。

しかしこちらの世界も地上と同じように放浪者で満ちている。

この世界は主にあなたたちの世界から来た者たちで成り立っているのだから、あなたたちと同じ種類の存在がいるのは当然である。死の扉を通っただけで、彼らは大して変わっていないのだ。

繊細で感受性の強い女性に、ハイドパークの中央

に座って、通りすがりの群衆に向かって、自分を通して話したり触れたり、その磁気を混ぜたりするように招くことを勧めるだろうか。あなたはぞっとするだろう。もし私が見てきたいくつかのものを見たなら、さらにぞっとするはずだ。

さらに、こちらにはもう一つの種類の存在がいる。かつて神智学者たちがエレメンタルと呼んでいた種類のものだ。

エレメンタルについては多くのばかげたことが書かれてきたが、これだけは事実として受け取ってほしい。

エレメンタルにかなり近いものとして理解されているような、エネルギーの単位、意識の単位が存在する。これらの存在は、一般にそれほど高度に発達してはいない。しかし地上の生活という段階が彼らの

目標であり、進化の次の避けられない段階であるため、そこへ強く引き寄せられている。

だから、あなたのテーブルや戸棚を叩く存在が、亡くなった祖父の霊だと決めつけないほうがよい。

それは単に盲目的で強く望んでいる存在、熱心な意識であり、自分の進化を早めるためにあなたを利用しようとしているのかもしれない。

あなたの中に入り込むか、あるいはあなたを通して働くことで、地上やその粗い振動を味わおうとしているのだ。

それはあなたに害を与えられないかもしれない。

しかし逆に、大きな害を与える可能性もある。だから、その者たちとのあいだを隔てている幕を破ろう

とする試みは、むしろ抑えたほうがよい。その幕はあなたが思っているよりも薄く、見えなくても感じることはできるのだから。

これだけ言えば、この問題についての私の役目は果たされた。次に来るときは、説教の代わりに物語でも話せるだろう。

私はまるで星界のシェヘラザードのような気分だ。しかし千一夜を語り終える前に、あなたが私に飽きてしまうのではないかと心配している。

千一夜！ そのころまでには、私は先へ進んでいるだろう。いや、別の世界へ「再び死ぬ」という意味ではない。ここでの生活について、あなたに伝えたいことをすべて語り終えたなら、許されるならば、他の星々を探究したいと思っているのだ。

私は、最近遺産を相続して、ようやく無限の資金と旅の機会を手に入れた若者のようなものだ。

しばらくは家のまわりにとどまり、いろいろ整えたり、新しい自由な移動に慣れたりするだろう。

しかしやがて、翼を試したくなるときが来る。もし今の比喩が混ざりすぎているなら、遠慮なく直してくれていい。私は気にしない。

第三十の手紙

シルフと魔術師

もしあなたの目が物質の幕を突き抜けることができ、パリという都市の周囲や上空の微細な世界で何が起きているかを見ることができたなら、あなたは驚きに息をのむだろう。

私は最近、パリで多くの時間を過ごしている。そこで見た奇妙なことをいくつか話そうか。

セーヌ川の左岸にあるヴォージラル通りという通りに、中年で内向的な生活を送る一人の男が住んでいる。

彼は一種の魔術師である。彼には常に、シルフと呼ばれるエレメンタルの精霊の一体が付き従い、仕え

ている。

このシルフを彼はメリリンと呼んでいる。その名前をどの言語から取ったのかはわからない。彼は複数の言語を話すようで、ヘブライ語も知っているらしい。

私はこのメリリンが彼の部屋に出入りしているのを見たことがある。いや、場所を教えるのはよくない。その男は特定できてしまうだろうが、シルフのほうは調査員でも捕まえられないだろう。

メリリンは彼のベッドを整えたり、スープを作ったりはしない。

そうした雑用は家政婦がしている。

しかしこのシルフは、用事をこなしたり、物を見つけ

出したりする。

彼は古書や写本の収集家であり、その多くの宝物はメリリンによって、セーヌ川沿いの古書の露店や、より立派な書店から見つけ出されたものだ。

この男は悪魔崇拝者ではない。

ただの無害な熱心家であり、オカルト的なものを好み、エレメンタルの世界を自分の目で見るとために、その幕を突き破ろうとしているだけだ。

もう少し酒——ブランデーやワイン——を控えれば、もっとはっきり見えるようになるかもしれない。彼は本物の探究者なのだから。

しかし彼は肉体的な欲望に惹かれ、それが霊性を損なっている。

ある日、私は用事に向かうメリリンに出会い、手で合図し、自分の名前を呼んで自己紹介した。これに気づいたその小さな存在は、私のそばにやって来て立った。

「どこへ行くのかい？」と私が尋ねると、彼女は川の向こう側を指し示した。

私は、この善良な魔術師の召使いに主人の用事を尋ねるのはよくないのではないかと思い、少しためらった。彼女もまたためらったが、やがてこう言った。

「でも、彼は人間の霊に興味を持っているの。」

それで話はしやすくなり、私は尋ねた。

「彼の用事をしているのかい？」

「ええ、いつも。」

「なぜ彼の用事をするんだい？」

「彼に仕えるのが好きだから。」

「どうして彼に仕えるのが好きなんだい？」

「私は彼のものだから。」

「魂はそれぞれ自分のものだと思っていたが。」

「でも私は魂じゃないの！」

「では君は何なんだい？」

「シルフよ。」

「いつか魂になると思っているのかい？」

「ええ、なるわ！ 彼は、私が忠実に仕えればそうなるって約束してくれたの。」

「でも、どうやって君を魂にすることができるんだ？」

「わからない。でもきっとしてくれるわ。」

「どうしてそうなるわかるんだい？」

「彼を信じているから。」

「なぜ彼を信じるんだい？」

「彼が私を信じてくれているから。」

「君はいつも彼に真実を話すのかい？」

「いつもよ。」

「真実とは何かを、誰に教わったんだ？」

「彼よ。」

「どうやって？」

この問いには彼女も困った様子で、私はこのままでは行ってしまうのではないかと思った。そこで急いでこう言って引き止めた。

「答えられない質問で困らせたいわけじゃない。最初にどうやって彼に仕えるようになったのか教えてくれ。」

「それ、話していいの？」

「じゃあ君には良心があるのかい？」

「あるわ。彼がそう教えてくれたの。」

「でも彼は人間の霊に興味があると言っていた
ね。」

「ええ。それに私は、良い霊と悪い霊の区別もできるの。」

「それは彼が教えたのかい？」

「いいえ。」

「ではどうやって覚えたんだ？」

「もともと知っていたの。」

「では長く生きているんだね？」

「ええ、とても長く！」

「では、いつ魂を持つ、あるいは魂になるつもりなんだ？」

「彼がこちらの世界——私たちのいるこの世界へ来たときよ。」

その大胆さに私は驚いた。この善良な魔術師はシルフをだましているのだろうか。それとも本当に自分の言っていることを信じているのだろうか。

「彼はそれについて何と言っているんだ？」と私は尋ねた。

「今私が彼に仕えれば、あとで彼が私に仕えてくれるって。」

「どうやってそれをするつもりなんだ？」

「わからない。」

「彼に聞いてみたらどうだい？」

「私は質問はしないの。答えるだけ。」

「たとえば、どんな質問に答えるんだ？」

「どこそこにいる人がどこにいて、何をしているかを教えるの。」

「その人たちが何を考えているかもわかるのか

い？」

「いつもじゃないけど……ときどきはわかる。」

「どうやって判断するんだ？」

「感じでわかるの。そばにいて暖かく感じたら、その人は彼に好意的。冷たく感じたら敵。何も感じなければ、その人は彼のことを考えていないか、どうでもいいと思っているの。」

「今夜の用事は？」

「ある女性に会いに行くの。」

「嫉妬はしないのかい？」

「“嫉妬”って何？」

「彼が女性に関心を持つことに不満はないのかい？」

「どうして不満に思うの？」

私はシルフの性質を知らなかったので、この問いには答えられなかった。

少し驚いた。

すべての女性的な存在は嫉妬するものだと思っていたからだ。しかし彼女がまた去ってしまうのではないかと心配になり、急いでさらに質問した。

「どうやって彼と知り合ったんだ？」と私は尋ねた。

「彼が呼んだの。」

「どうやって？」

「呪文で。」

「どんな呪文だ？」

「シルフを呼ぶ呼びかけよ。」

「ああ、彼がシルフを呼んで、君が来たわけだね。」

「ええ、もちろん。彼が優しかったから好きになって、自分から姿を見せたの。」

「どうやって見せたんだ？」

「彼の目をくらませて閉じさせて、それから見えるようにしたの。」

「今ではいつでも君が見えるのかい？」

「いいえ。でも私がいることはわかっている。」

「今でもときどきは見えるのかい？」

「ええ、よく見えるわ。」

「最初に見たときはどうだった？」

「とても喜んで、優しい名前と呼んでくれて、いろいろ約束してくれた。」

「魂を与えるという約束も、そのときかい？」

「ええ。」

「では、君は魂を持ちたいと思っていたのか？」

「もちろん！」

「でもどうして？」

「私たちの多くは人間になりたいの。人間が好きな
の——大半はね。」

「なぜ人間が好きなんだ？」

「それが私たちの性質だから。」

「でもすべてがそうなのか？」

「悪意を持った空気の霊もいるわ。」

「魂を持ったら何をするんだ？」

「身体を持って、地上で生きるの。」

「今仕えているその人を離れるのかい？」

「いいえ！ むしろ彼と一緒にいるために身体が欲しいの。」

「では彼も一緒に地上へ戻るのかい？」

「そう言っているわ。」

これにはまた驚かされた。

私はこの魔術師に興味を持ち始めていた。彼は大胆な想像力を持っている。

空気の精が人間の魂へと成長することなどあるのだろうか、と私は考えた。

あの男は思い込みをしているのか。それとも、この美しい使いをだましているのか。

今回は少し考えすぎたようだった。

再び話しかけようとしたときには、彼女はすでに去っていた。

追いかけようとしたが見つけられなかった。

もしすぐに戻ったとしても、別の道を通ったに違いない。

どれだけ探しても、彼女の姿は見えなかった。

さて、ここであなたは疑問に思うだろう。私はこのフランス人の魔術師に仕える空気の存在と、どの言

語で会話したのかと。

私は自分の言葉で話し、彼女も同じ言葉で答えたように感じた。

これはどういうことだろう。おそらく、私たちは思考そのものの微細な言語を使っていたのではないだろうか。

言葉の通じない相手と出会ったときでも、目の表情や顔つき、身ぶりによって意思のやり取りを感じることがあるだろう。

それを百倍に強めた状態を想像してほしい。それなら、私がシルフと交わしたような簡単な問答も成り立つのではないだろうか。

断言はしないが、そうかもしれない。というのも、先

ほど言ったように、私は自分の言葉で話し、彼女もそれで答えているように感じたのだから。

こちらでは実に不思議な体験ばかりだ。正直なところ、地上へ戻るのが少し怖い。

しばらくのあいだは、あまりにも退屈に感じるだろうから。

この自由で鮮やかな生を捨てて、長い眠りのような状態に入り、そのあと哺乳瓶をくわえ、九九やギリシャ語やラテン語の動詞を覚える生活に戻れるだろうか。

きっと戻らなければならないのだろう——だが、まだそのときではない。

おやすみ。

第三十一の手紙

天界の数学の問題

ときどきあなたが私の存在をはっきりと感じる、その感覚の強さから、私がどれほど強い生命を生きているかを判断できるだろう。

私は墓の露に濡れた青白い亡霊などではない。私は現実に存在しているし、少なくとも自分ではそう感じているが、地上で多少不健康な身体を持って歩いていたところと同じくらい健全である。

あの恐ろしい亡霊たちは、もし戻ってきたとしても、私のように話したりはしない。実際にそれを見たり聞いたりした人に聞いてみるといい。

あなたが「向こうの世界」からの通信にあまり関わ

らずにいられたのは良いことだ。

もしあなたが私を怖がっていたとしたら、それは驚くべきことだっただろう。しかし、あなたのように私の存在を感じ取ることができたなら、恐れる人もいるだろう。

ある夜、私は一人の友人の部屋の扉をノックした。歓迎されるだろうと半ば期待していたのだ。すると彼は驚いてベッドから飛び起き、またすぐに飛び戻り、毛布を頭からかぶった。本気で、それが私ではないかと恐れたのだ！

私は心臓発作の原因になったり、昔の歌にあるように「一夜にして白くなった」髪のようなショックを与えたりする責任を負いたくなかったので、静かに立ち去った。

おそらく彼は翌日、壁の中にネズミがいたのだと自分に言い聞かせただろう。

もしあなたが私を怖がっていたなら、私はあなたを恥ずかしく思っただろう。あなたはそれ以上のことを知っているのだから。しかし多くの人はそうではない。

ときどきこうして戻ってきて、あなたと話すのは私にとって本当に楽しいことだ。「昔からの友に勝る友はいない」という言葉のとおりであり、シルフや霊たちとの交わりも、かつて知り愛した人々がすべて私に背を向けてしまったとしたら、決して満足のいくものではないだろう。

シルフの話が出たので言うが、昨夜教師に会い、以前話したあのフランスの魔術師が、本当に自分の空気の仲間に約束したことを果たし、彼女が人

間の女性として地上に生まれるために必要な魂を得るのを助けられるのかどうか尋ねた。

教師の答えは「できない」だった。

もちろんその理由を尋ねた。すると彼は、エメンタルの存在——私たちがそう呼ぶ意味での元素の中に住むエネルギーの単位——は、この生命周期のあいだに、自分の領域を離れて人間の段階へ移ることはできないと答えた。

「では、いずれは可能になるのですか？」と私は尋ねた。

「わからない」と彼は答えた。

「しかし地上のまわりにいる、より未発達なすべての存在は、人間へ向かって進んでいると私は思う。」

人間という段階は、彼らがいつか必ず到達する発達
の段階だが、この生命周期のあいだではない。」

私はその魔術師を知っているかどうかも教師に尋
ねた。すると彼は、その男を千年ものあいだ知っ
ていると答えた。

遠い過去のある人生で、そのパリの魔術師は力へ
と至る道に足を踏み入れていたが、利己的な快樂
への欲望によって道を外れ、本当の哲学的な真理
へ戻るまで長くさまようかもしれないと言った。

「彼は責められるべきでしょうか、それとも同情され
るべきでしょうか？」と私は尋ねた。

「同情はこの問題には関係ない」と教師は答えた。

「人は自分の望むものを求めるのだ。」

教師が去ったあと、私は自分自身に問いかけ始めた。私は何を求めているのか、何を望んでいるのか。答えはすぐに出た。「知識だ。」一年前なら「力」と答えただろう。しかし知識は力に先立つものだ。真の知識を得れば、必要な力は自然と備わるだろう。

あなたに、そしてもしかすると他の人々にも、他の方法では得ることのできないかもしれない知識の断片を少しでも伝えたいという思いから、私は何度も何度も戻ってきて、あなたと話しているのだ。

私があなたに与えることのできる最も大きな知識はこれだ。人は意志の力によって、死後も客観的な意識を保つことができるということである。こちらでは多くの人々が、主観的な幸福の状態に沈み込み、地上や天上で何が起きているかに無関心になっ

てしまう。私自身も、そうしようと思えば簡単にそうできる。

以前にも言ったと思うが、地上の人間は主観的意識と客観的意識の両方を持ちながら、主として客観的に働いている。それに対してこちらでは、同じく両方の意識を持っているが、主観へと傾く傾向がある。

ほとんどいつでも、心を静めて内側に目を向ければ、主観的な至福の状態に入ることができる。それは死という境界のこちら側にいる魂たちが味わっているものと似ている。

実際、人間がエーテル的な世界について知っていることのほとんどは、このような潜在的な体験によって得られている。身体の嵐や情熱が静まるとき、人は自分の内なる生命を垣間見ることができ、そ

の内なる生命こそがこの第四次元の領域の生命なのだ。

どうか、私が矛盾しているとか曖昧だとか責めないでほしい。私たちにとって客観的意識が可能であるのと同じように、あなたにとって主観的意識が可能だと言ったが、ただ傾向が逆なだけなのだ。

数週間前にあなたに書いた、あの恋人たちのことを覚えているだろう。彼は先にこちらへ来ており、彼女を待ち、二つの存在状態のあいだにある不安定な湿地帯を越えるのを助けていた。

私は先日、この恋人たちに再び会った。しかし彼らは、私の出現にまったく興奮しなかった。

それどころか、私が彼らを呼び起こし、ついに一緒になってから沈み込んでいた主観的な至福の状態

から引き戻してしまったことで、むしろ迷惑をかけてしまったように感じた。

彼が長い年月のあいだ彼女を待っていたときには、期待によって自分を目覚めさせ続けていたし、彼女もまた地上にいるあいだ、常にこちらにいる彼のことを思っていたので、その極性は保たれていた。

だが今では彼らは互いを手に入れた。彼はこの微細な世界の微細な材料で喜びをもって彼女のために築いた「小さな家」にいて、外を見ても内を見ても互いの顔が見える。

彼らは満足しており、これ以上得るものは何もない（少なくともそう互いに言い合っている）。

その結果、彼らは主観的な至福の腕の中へと沈み

込んでいく。

この至福の状態、いわば反芻の状態を、彼らは楽しむ権利がある。誰もそれを奪うことはできない。それは地上や他の場所での活動によって得たものであり、リズムの法則に従った正当な報いとして彼らのものなのだ。

彼らは長いあいだそれを楽しむだろう。共に過ごした時間や離れていた時間の経験を繰り返し味わいながら生きるだろう。

しかしやがて、どちらか一方が過度の甘さに飽きる日が来るだろう。その魂の筋肉は使われないことで伸びきり、精神的なあくびをひとつする。そして反作用の法則によって外へと出ていく——戻ってくることなく。

どこへ行くのか、とあなたは尋ねるだろう。もちろん地上へ戻るのだ！

想像してみよう。彼(あるいは彼女)が、その達成と感じている主観的な至福の状態から目覚め、祝福された健やかな孤独の中で少し散歩をする。

そして心と目に朝のような冴えを取り戻しながら、地上の恋人たちの一組に近づく。その瞬間、物質の呼び声——血と温もりの、活動が極限まで高められたあの激しく恐ろしい呼び声——が、物質のこちら側にいる半ば目覚めた魂を捉える。

そして彼は再び物質形成の世界へと入り込む。地上の肉体の中に沈み込み、隠される。誕生を待つのだ。

彼は以前の休息のために、大きな力をもって現れ

るだろう。もしその単位が強ければ、「産業の指導者」と呼ばれるような人物になるかもしれない。しかし私は最初に「彼または彼女」と言った。少し言い方を変えよう。男性のほうが、その積極的な極性のために、ほぼ確実に先に目覚めるだろう。

さて、この恋人たちについて描いたこの想像図は、すべての魂がこのように地上へ戻るという教義を示しているわけではない。

私はただ、この二人がどのように戻るかを推測しているだけだ(彼女もまた、目覚めて一人であることに気づけば、すぐに彼に続くだろう)。そしてこのように戻るだろうと私が思う理由は、彼らが主観的な至福にあまりにも浸りすぎているからだ。

いつ戻るのかはわからない。来年かもしれないし、百年後かもしれない。彼らのエネルギーの単位の

大きさがわからないので、どれほどの主観的至福に耐えられるのか、そしてどれほど強い反動が起こるのかを見当することはできない。

きっとあなたは、私自身がいつかそのような至福の状態に沈み込むのかどうか気になっているだろう。そうなるかもしれない。それはきっと楽しいだろう——しかし長くは続けないし、今でもない。もっとも、こちらにはその喜びを共にする恋人もいないのだが。

第三十二の手紙

焦点の変化

ここ数週間、私は教師の導きのもとで、地上を行き来し、その中を歩き回っていた。今の言い回しにあなたは微笑むだろう。しかし、あなたの知っている何人かの友人たちは、まるで私が『ヨブ記』に出てくる悪魔であるかのように、本気で私を恐れたではないか。

さて、まじめな話に戻ろう。私はかつての人生で人々の中にあって生き、働いていた土地や都市を訪れてきた。旅の多くの利点のひとつは、人が自分の過去の存在を思い出す助けになるということだ。場所には確かに不思議な力がある。

私はエジプト、インド、ペルシャ、スペイン、イタリア

に行った。さらにドイツ、スイス、オーストリア、ギリシャ、トルコ、その他多くの国々にも行った。最近、戦争のためにあなたが通ることのできなかったダーダネルス海峡も、私にとっては閉ざされてはいなかった。どんな状態にも、それぞれ利点がある。今の私の状態でさえそうだ。補償の法則は確かに働いている。

過去のある人生では、私は広く旅をする者だった。

さて、どうして私がこの世界とあなたの世界のあいだを自由に行き来し、両方を見ることができるのか、不思議に思うだろう。

しかし、あなたの世界と私の世界はほぼ同じ空間を占めていることを思い出してほしい。地上の表面の領域は、私たちの世界の中でもより低く、より物質的な層のひとつにすぎない。ここで「層」という言

葉は、あなたが使う「重なり」の意味で使っている。

前にも言ったように、私たちが行くことのできる場所には、地上の表面よりかなり上にあるものもある。「空の中の住まい」という表現は、単なる比喩ではない。

私はいつでもほんの少し焦点を変えるだけで、あなたの世界に自分がいることに気づく。

肉眼で見えないからといって、そこにいない証拠にはならない。

この焦点の変化は、意志の働きと方法の理解によって行われるのだが、それを行わなければ、あなたの世界の何かと同じ場所にいても、それに気づかないことさえある。

ここはよく注意してほしい。これは私が言おうとしていることの半分にすぎない。もう半分はこうだ。あなたもまた、空間的に言えば、いつでも私たちの世界の興味深いもののすぐ近くにいることがあり得るが、それに気づいていないだけなのだ。

しかし、この世界に焦点を合わせれば、あなたもある程度それを意識するようになる。同じように、私が方法を知ってあなたの世界に焦点を合わせると、私は意識の中でそこに存在し、多くの都市のさまざまな光景や、多くの土地の変化に富んだ様子を楽しむことができる。

こちらに来たばかりのころは、地上の様子をうまく見分けることができなかったが、今ではかなりよく見えるようになった。

いや、私はこの焦点を変える方法を他人に教える

ための公式をあなたに与えるつもりはない。なぜなら、人類の現在の発達段階では、そのような知識は利益よりも害をもたらすからだ。私はただ事実を述べるにとどめ、その応用については、好奇心と能力を持ち、それを実証できる者に任せる。

これらの手紙を書いている私の主な目的は、少数の人々を納得させること、すなわち肉体の変化と呼ばれる死の後にも魂が存続するという事実に対する確信を強めることにある。

多くの人は、自分は信じていると思っていながら、実際には確信を持っていない。もし私がこれらの手紙を通して、生きて活動している存在としての自分の存在を感じさせることができれば、それはある人々の中で不死の教えへの信念を強めることになるだろう。

今は物質主義の時代である。多くの男女は、死後の生命に対して本当の関心を持っていない。しかし、遅かれ早かれ誰もがこちらへ来ることになる。そして私がこれから教えることによって、少しでもその変化が容易になり、その旅が恐ろしいものではなくなる人がいるのなら、それは価値のあることではないだろうか。あなたにとっても、私にとっても、少しの努力を払うだけの価値があるのではないだろうか。

大いなる変化に近づく人が、これらの手紙を真剣に学び、その原理を心に深く刻み、そしてこちらへ移行したあともそれを思い出そうと意志するなら、その人は何も恐れる必要はない。

私たちは、取り組む多くのことにおいて失敗する。しかしこのことに関しては、私は失敗しないであろうと願っている。あなたの側でも失敗しないでほし

い。

私はあなたなしではこの仕事をする事ができないし、あなたも私なしではできない。これは、私があるあなたの潜在意識にすぎないのではないかという考えに対する答えである。

私はコンスタンティノープルに行き、何百年も前に自分がある特別な体験をしたまさにその部屋に立ったことがある。私はその壁を見て、触れ、その歴史と、それに関わる自分自身の歴史を、エーテル的な記録として読み取った。

またペルシャのバラ園を歩き、その花の香りを嗅いだこともある。それらは、かつて私がナイチンゲールとともにそこを歩き回り、今とは異なる姿と意図を持っていたころに、私を恍惚とさせたあのバラの、何百代も後の子孫である。

その香りこそが、私に記憶を呼び起こさせたのだ。

ギリシャでもまた、私は昔の日々を追体験した。彼らが衰退する前、なんと素晴らしい民族であったことか！

彼らの力の秘密は集中にあったのだと思う。あの半島の周囲のエーテルには、彼らの大胆な思想と大胆な行動の記録が書き込まれている。古いエーテル的な記録は非常に鮮明で、後の記録を通してさえ輝いて見える。

というのも、いわゆるアストラルの記録は、あらゆる場所で層となって重なって存在しているからだ。私たちは親和性や意志によって、その中のある層を別の層の代わりに読む。これは、大英博物館の膨大な書物の中から、自分の望む一冊を選び出すの

と同じくらい自然なことだ。最も驚くべきことでも、その秘密を解く鍵を持っていれば、説明はいつも単純なものになる。

振動については多くの無意味なことが書かれてきたが、それでもなお真実はその周辺にある。これほど煙がある以上、そこには必ず火がある。

インドでは、私は瞑想しているヨーギたちに出会った。彼らの特有の呼吸法がなぜ霊的な効果を生むのか知っているだろうか？

いや、知らないだろう。では教えよう。長く息を止めることで、体内にある種の——毒とでも言おうか——物質が生じる。その物質が霊的な性質に作用し、振動を変えるのだ。

それだけのことだ。ヨーガについては膨大な書物が

書かれているが、そのように述べているものがあるだろうか。

訓練されていない健康な肺は、通常の働きの中で、この毒を生理学者がよく知っている過程によって排出する。

すなわち、物質的な領域に適応し、そこで満足して活動している自然な人間においてはそうである。

しかし、物質的な領域に生きながら霊的な世界に適応するためには、振動の変化が必要になる。

この振動の変化は、先に述べた毒をわずかに過剰に取り入れることで生じることがある。それは危険か？

無知な者にとっては危険である。しかしその扱いに

熟達した者にとっては、薬局にある多くの薬と同じ程度の危険しかない。

また別の機会に、私が地上を行き来し、その中を歩き回ることで見つけた他の秘密について話そう。

第三十三の手紙

五つの決意

私はある夜、東方の宮殿の屋上に立ち、星々を眺めていた。焦点を変えることで見えない世界を見ることができるあなたなら、私が逆の過程によって濃密な物質の世界を見ることができる理由も容易に理解できるだろう。そう、同じことなのだ。ただ向きが逆なだけである。

私は東方の宮殿の屋上に立ち、星々を見つめていた。

そこには人間は一人もいなかった。眠りについた都市を見下ろしながら、その上空に見張りをしている魂の群れを見、また使者たちが行き来しているのも見た。

ときおり、その霊の群れの中に青ざめた、半ば恐怖に満ちた顔が現れることがあったが、そのとき私は、下の都市で誰かが亡くなったのだと知った。

しかしこちらに来てからあまりにも多くの霊を見てきたので、私はむしろ星を眺めるほうに興味を引かれていた。

私は昔から星を愛していたし、今も愛している。

いつの日か、許されるなら、それらについてもっと多くを知りたいと思っている。

しかしこれらの手紙を書き終えるまでは、地球の近くを離れるつもりはない。

木星ほど遠くからでは、まったく書くことができない

かもしれない。

思考とほとんど同じ速さで行き来できるのは事実だが、何かが、もっと遠くへ旅するのはしばらく延期したほうがよいと告げている。

おそらく一度そこへ行ってしまうと、長いあいだ戻りたなくなるだろう。

この地上とのやり取りは、私にとって大きな意味を持っている。

病のあいだ、私はときどき戻ることができるだろうかと考えていたが、まさかこのような形になるとは想像もしなかった。

しかも、この実験に私とともに踏み出すほど大胆でありながら、同時に安定した責任感のある人物が

見つかるとは思ってもいなかった。

訓練されていない心の人の手を通して書くことは、その人が完全に催眠状態にでもならない限り不可能だっただろう。

また、平均的な知的な人を通して書くこともできなかっただろう。そういう人たちは十分に受動的になることができないからだ。

安心してほしい。あなたは一般に言われる意味での霊媒ではない。

すなわち、二つの世界のあいだに開いた隙間に置かれ、吹き込むどんな風にも鳴らされる風琴のような受動的な道具ではない。

私がこちらへ来てからあなたの世界で見てきたこと

を語ることには、それが可能であるという事実を示す以上の大きな目的はない。

次にあなたがこの世界を見て、その素晴らしい風景や人々を目にすると、それと同じように私があるあなたの世界を見ているのだということを思い出してほしい。

二つの世界に生き、意志によって行き来するのは興味深いことだ。しかし私があるあなたの世界へ行くときは、あくまで訪問者としてであり、その運営に関わろうとは決してしない。

二つの世界の境界には非常に厳しい関所があり、そこを行き来する者は何も持ち運ぶことができない——偏見さえも。

もしあなたがこちらへ来るときに、特定のものだけ

を見ようと決めていたなら、見たものに誤った価値を与えてしまうかもしれない。

多くの人がそのような心構えでこちらへ来て、ほとんど何も学ばなかった。発見をするのは、心を開いた旅人である。

私はこちらへ来るとき、いくつかの決意だけを持ってきた。

自分の個性を保つこと。地上での記憶を保つこと。そして再び地上へ戻るときには、この世界での記憶も持ち帰ること。

偉大な教師たちに会うこと。過去の転生の記憶を取り戻すこと。

次に地上へ戻るときのために、偉大な人生の基礎

を築くこと。

簡単に聞こえるだろう？

実際にはこれ以外にも多くのことをすでに成し遂げている。

しかし、これらを心に留めていなければ、ほとんど何も達成できなかったかもしれない。

死について本当に悲しいことはただ一つ、普通の人間がそこからあまりにも少ししか学ばないということだ。

地上での生の連なりが相対的に果てしなく続くものだとして理解していなければ、人々が一つ一つの人生であまり進歩しないことに対して、私は大きな後悔を感じただろう。しかし私は自分を慰めている。

急ぐ必要はないのだと。存在という鎖の中の真珠は小さいかもしれないが、それぞれ必然の位置にあり、その鎖は円であり、永遠の象徴なのだ。

そして、まだ限られた私の見方からすると、こちらの世界の多くの人々も、あなたの世界と同じように自分の人生を無駄にしているように思える。それは、私が理想的な知識からどれほど遠いかを示している。

いつか星の視点からこれらすべてを眺めることができれば———そうできる日が来ることを願っているが———人生の風景にある平坦な広がりも、距離によってやわらぎ、全体が美しい遠近感を帯びるだろう。

そのとき初めて、かつて自分がその絵の中の小さ

な一点にすぎなかったときには思いもよらなかった
美しさが見えてくるに違いない。

第三十四の手紙

ライオネルの旅立ち

私は息子ライオネルを失った。彼は去ってしまった——すべての肉体の道を行って、と言いかけたが、それは言い直さねばならない。すべての霊が遅かれ早かれ進む道——すなわち地上へ戻る道へと、彼は行ったのだ。

少し前のある日、私は彼を、かつて手紙で話したあの場所——森に覆われた丘のふもとの小川のそばにある小さな小屋で、思いにふけっているのを見つけた。そこは私たちのお気に入りの休息場所だった。

しばらく待っていると、やがて彼は目を開け、私を見た。

「お父さん、私の大好きな先生が明日結婚するんだ。」と彼は言った。

「どうしてそれがわかるんだい？」と私は尋ねた。

「だって、ずっと見ていたんだよ！」と彼は答えた。

「ときどき戻って訪ねているんだ。先生は私がそこにいることに気づいていないけどね。何か起こりそうだってずっと感じていたんだ。」

「なぜだい？」

「先生がとても輝いているからだよ。前にはなかった光が、先生のまわりにあるんだ。」

「その光は何が原因なんだ、ライオネル？」

「うーん、たぶん“恋をしている”っていう状態なんだと思う。」

「君は驚くほど賢い子だね。」と私は言った。

彼は大きく澄んだ目で私を見た。

「ぼくは本当は子どもじゃないよ。」と彼は答えた。

「ぼくは山と同じくらい古いんだ。お父さんや他の人たちと同じようにね。ぼくらはみんな始まりも終わりもない存在だって言ったでしょ？」

「そうだね。でも続けて、先生のことを話してごらん。」

「先生は、ぼくの遊び友だちのお兄さんと恋をして

いるんだ。その人のことは、ぼくが小さいころに知っていたよ。磁石を使わせてくれたり、風の揚げ方を教えてくれたり、機械の仕組みを見せてくれたんだ。その人は技師なんだ。」

「なるほど。」と私は言った。

「それなら、君は大好きな先生がその人と結婚するのを喜んでいるわけだね。」

ライオネルはさらに目を大きくして言った。

「お父さんと別れるのは寂しいけど、これは逃せない機会なんだ。」

「なんだって？」

「ぼくが戻るためのチャンスなんだよ。ずっと待って

いたんだ。」

「でも準備はできているのかい？」

「準備って何？ ぼくは行きたいんだ。」

「私を置いていくのか？」

「また見つけるよ。それに——ああ、お父さん！ お父さんが戻ってくるころには、ぼくのほうが年上になっているよ。」

この考えは彼をととても喜ばせているようだった。

私はまだ人間的な感情を残していたので、彼が自分の意思で去っていくことを悲しく思った。

しかし意志は自由である以上、引き止めようとはし

なかった。

彼はまだ子どもの姿であり、この世界で成長する時間もなかったが、思考においてはすでに成熟していた。

「そうだね。」と私は言った。

「そのときには、君がまた子どもになる私を助けてくれるかもしれないね。」

彼は続けた。

「ほら、ヴィクターみたいなお父さんのもとに生まれれば、機械について学べることは全部学べるよ——少なくとも彼が教えられることはね。でも大きくなったら、自分で彼の知らないこともたくさん見つけるよ。前に話した、あの“型の世界”で作っている

小さな機械を覚えている？」

「ああ。」

「地上に戻ったら、それを現実にするんだ。だってもう、ぼくの指から出る電気でちゃんと動いているんだよ！」

「しかし、それを物質として——鋼か何かで——作ったときにも、本当に動くのかい？」

「もちろん動くよ。ぼくの発明なんだから。有名になるよ。」

「でも、もし誰かが先にそれを見つけてしまったら？」

「そんなことはないと思う。」

「では、その型のまわりに守りをかけて、誰も触れられないようにしてあげようか？」

「そんなことできるの、お父さん？」

「できると思う。」

「じゃあすぐに行こうよ！」と彼は言った。

「すぐにやろう。あと一日か二日でこの世界を離れるかもしれないんだから。」

彼のせつかな様子に、私は思わず微笑んだ。きっと彼はその結婚式に立ち会い、その後はほとんど会えなくなるだろう。

私たちは型の世界へ行き、彼の助けを借りて、その

小さな機械のまわりに円を描いた——彼がそれを自分のものとして主張できるようになるまで守るための結界だ。

ああ、インスピレーションよ！ 発明よ！ 天才よ！
地上の人々はそれらの言葉の本当の意味をほとんど知らない。

詩人の名作は、生まれる前にすでに歌われていたのかもしれない。

技術者の発明は、彼が成長し、科学を学び、それを自分のものとして受け取る準備が整うまで、型の世界に彼の守りによって保たれていたのかもしれない。

あるいは、二人の人間がほぼ同時に同じ発見や発明をする場合、それは一方が、もう一方が地上へ

戻るときに残していった設計を手に入れたのかもしれない。

あるいはまた、まだ再び生まれるのを待っている第三の人間の創造物を、二人が同時に目に見えない世界から受け取ったのかもしれない。

ライオネルは、これからの人生について、そしてミス——がどれほど素晴らしい母親になるかについて、私に夢中で話し続けた。彼女はいつも彼に優しくかったのだ。

「たぶんね」と私は言った。

「君のようにすぐに戻ろうとする者たちは、前の人生で自分に優しくしてくれた人を探し出すのかもしれない。」

「もう一つ理由があるんだ」とライオネルは言った。

「ミス——は、ぼくが数年前に別れた自分の母の友だちなんだ。また手を握ってもらえるなんて、とても嬉しいよ。」

「彼女は君だとわかると思うかい？」と私は尋ねた。

「どうだろうね。でも彼女は再生を信じているよ。」

「どうしてそんなことがわかるの？ 君はここに来たときまだ小さかったじゃないか。」

「七歳だったけど、そのときにはもう、ぼくらは地上で何度も生きるんだって教えてくれていたんだ。」

「その考えを最初に西洋にもたらした魂たちに祝福

あれ！」と私は叫んだ。

「さて、坊や、君が去ったあとで私にできることはあるかい？」

「もちろんあるよ。新しいお母さんを見守って、もし危険がぼくや彼女に迫ったら知らせてほしい。」

「では、その人を今、私に紹介してくれ。」

私たちは二人で物質の世界へ出て行った。どのように行くのかは、すでにあなたに話したとおりだ。

彼は私をボストン郊外の小さな家へ連れて行った。

部屋に入ると——そのとき地上では夜の十一時ごろだった——若く美しい女性がベッドのそばにひざまずき、翌日に愛する男性と結ばれるその結婚が

祝福されるよう、神に祈っているのが見えた。

ライオネルは彼女に近づき、その首に腕を回した。

彼女は、まるで本当に触れられたかのように驚いて立ち上がった。

「ミス、ミス——、ぼくだとわからないの？」と彼は叫んだ。

しかし私には聞こえても、彼女には聞こえなかったらしく、彼女は半ばおびえたようにあたりを見回した。

そして、その触れられた感覚と気配が気のせいだと思ったのだろう、再びひざまずいて祈りを続けた。

「もう行こう」と私は言い、私たちは彼女をその夢と祈りの中に残して立ち去った。

それがライオネルを見た最後だった。彼は別れ際にかう言った。

「しばらくは彼女のそばにいるよ。ときどき行き来して、お父さんのところにも来るかもしれない。でも戻らなかったら、数年後にまた会おうね。」

「そうだね」と私は言った。

「魂は親和性と願いによって引き寄せられるのだ。地上でも、この世界でも。」

そのあと教師に会ったとき、私はライオネルのことを話し、彼が地上での生活を始めたあとでも、母の体の中に宿る存在として、ときどきこちらに来ること

ができるかどうかを尋ねた。

「おそらく無理だろう」と教師は答えた。

「もし彼が熟達した魂であれば可能かもしれない。
しかし高度に発達していても、真の熟達に至っていない魂には不可能だ。」

「しかし」と私は言った。

「地上に生きている人間でも、夢の中でこちらに来ることがあるではないか。」

「それはそうだ。しかし魂が再生のために物質に入るとき、それは可能性の状態に入り——この言葉を使ってよいならば——新しい身体を形づくり、それに適応するためにすべての力が必要とされる。
その巨大な努力のためにだ。誕生して目が開き、肺

が空気に触れて広がると、その作業は楽になり、余ったエネルギーでこの隔たりを越えることもできるようになる。」

そして彼は続けた。

「だが、もうすぐ母になる女性たちは、自分の中に宿る魂をぼんやりと感じ取ることがよくある。その奇跡の本当の意味を完全に理解していなくても、奇妙な夢や幻を見る。それらは多くの場合、まだ生まれていない子の過去の人生の一端なのだ。

彼女たちは、その存在がかつて住んでいた夢の国を見る。また理由のわからない欲求を感じるが、それはまだ生まれていない者の潜在的な願いの反映にすぎない。根拠のない恐れを感じることもあるが、それはその存在がかつて抱いていた恐怖なのだ。

偉大な魂を宿している母は、この形成の期間に、自分一人では到達できなかったほどに霊的に成長することがある。

一方で、犯罪者となる魂を宿した母は、通常とはまったく異なる奇妙な偏りを示すこともある。

もし女性が十分に知識を持ち、理解していれば、自分の感情や考えから、将来どのような魂が自分の子になるのかを見極め、それに応じて導く準備をすることもできるだろう。ここでもまた、より多くの知識が必要なのだ。」

こうして私は、これまでのすべての経験と同じように、ライオネルの旅立ちを通して何かを学んだ。

第三十五の手紙

美しき存在

そうだ、私は天使を見たことがある。もし天使という言葉で、かつて地上で人間として生きたことのない霊的存在を指すのならば。

人間が岩に対してそうであるように、天使は人間に対して生命の鮮やかさにおいてそれほど違う。

もし私たちがかつてあのエーテル的な歓喜の状態を経験したことがあるとしても、長く物質と関わるうちにそれを失ってしまったのだ。

それを再び取り戻すことができるだろうか。おそらくできる。その結果は私たち自身の手の中にある。

私が「美しき存在」と呼ぶものについて話そうか。

それに天上での名前があるとしても、私はそれを聞いたことがない。それは男なのか女なのか。あるときは男のように見え、またあるときは女のようにも見える。ここには私には解き明かせない神秘がある。

ある夜、私は月の光の上に横たわっているように感じた。これは、すべての人の中に宿る詩人が私の中で目覚めていたということだ。

私は月光の上に横たわっているように感じ、恍惚が私の心を満たしていた。その瞬間、私は時間の束縛から逃れ、あのエーテル的な静けさの中に生きていた。

それは静止ではなく、歓喜が極限まで高められた

活動にほかならない。私はきっと、東洋の賢者たちがニルヴァーナと呼ぶあの逆説的な状態の前触れを味わっていたのだろう。

私は月光と自分自身をはっきりと意識しており、そして自分の中に宇宙のすべてがあるように感じていた。それは「我あり」というあの至高の宣言の実現に、これまでに最も近づいた瞬間だった。

過去も未来も、その一瞬の中に等しく存在しているように思えた。

もしそれが昨日だと囁かれても、私はその通りだと受け入れただろうし、それが百万年後だと言われても同じようにうなずいただろう。

しかし、それが本当に昨日であろうと百万年後であろうと、まったく問題ではなかった。おそらくこの

美しき存在は、瞬間と永遠が一つである者のもと
にのみ現れるのだろう。

そのとき私は声を聞いた。

「兄弟よ、それは私だ。」

誰が語ったのかについて、私の中に疑いはまったく
なかった。

「それは私だ」とそのように語ることができるのは、
その個性があまりにも大きく、ほとんど普遍に近い
存在だけだ。

すべての存在の海に浸りながら、その内に含まれ
ているがゆえに最も小さなものをも知っている存
在だけが、そのように語ることができる。

私の前に立っていたのは、その美しき存在だった。

自らの光で輝いていた。もしそれが少しでも劣っていたなら、私は驚きのあまり息をのんだだろう。

しかしその姿と存在のあまりの完全さが、静けさの雰囲気周囲に広がっていた。

私は驚かなかった。なぜなら、そのときの私の意識そのものが驚きであったからだ。

私はあまりにも日常を超えたところに引き上げられていたため、その瞬間の体験を測る基準を持っていなかった。

永遠にされた若さを想像してほしい。

はかないものが永遠となった姿を。

子どもの顔の輝きと、あらゆる時代の知識を宿した

目を想像してほしい。

その目の中に千の人生の輝きが凝縮されていることを。そして、その唇に浮かぶ微笑みは、あまりにも純粋な愛であるため、それを向けられる者からの愛を求めることさえない。

しかし地上の言葉では、この世ならぬものを表すことはできないし、人間の理解は、その一瞬に美しき存在が私に示した喜びをとらえることはできない。

というのも、この体験によって、存在の可能性は私にとって広がり、魂の意味はより深くなったからだ。

美しき存在を見た者は、もはや以前と同じではいられない。

しばらくのあいだは忘れ、日常の営みの中でその

魔法を見失うこともあるだろう。しかしひとたび思い出せば、再びあのときの恍惚の翼に寄せられるのだ。

それは地上に生きる者にも起こりうるし、星々のあいだにいる者にも起こりうる。

しかしそれが訪れるとき、その体験はすべての者にとって同じであるに違いない。

なぜなら、その存在が宿る状態にある者にしか、美しき存在は自らを現すことができないからである。

美しき存在の歌

空気の中にかすかなざわめきを感じたら、もう一度耳を澄ませなさい。そこには何かがあるかもしれない。

心の中に、不思議でやさしい温もりを感じたとき、それはどこかのあたたかく美しい源から送られてきたものかもしれない。

知らなかった喜びがあなたの存在を満たし、あなたの魂がどこへとも知れぬ愛しい神秘へと外へ外へと伸びていくとき、その神秘そのものが、あたたかく愛に満ちた見えない腕で、あなたへと近づいているのだと知りなさい。

私たちは、目には見えない世界に生きているが、互いに見えない存在ではない。

ここにはやさしい色彩があり、この上なく美しい形があり、目は地上では見たことのない美しさに見とれてしまう。

ああ、ただ存在するということの喜びよ。そして鳥が伴侶に歌うように、一日中、魂の中で歌う喜びよ。

なぜなら、あなたの魂が歌うとき、それは常に伴侶に向けて歌っているのだから。

あなたを震わせ、羽音のざわめきに耳を傾けさせたのは、ただ春だけだと思っていたのか。

心の春は常にあり、秋が来ることはないかもしれない。

聞きなさい。ひばりが歌うとき、それはあなたに向かって歌っている。水が歌うとき、それもあなたに向かって歌っている。

そしてあなたの心が喜びに満たされるとき、どこかに必ずそれに応える別の心があり、耳を澄ます天の魂もまた、その母なる喜びに満たされるのだ。

私はここにいることが嬉しいし、そこにいることも嬉しい。どこへ行っても美しさがある。

その理由がわかるだろうか、地上の子どもたちよ。

空間のデイジーの野原で、私と遊びに来なさい。四つの風が出会うその場所で、私はあなたを待っている。

希望の庭の果てにあるきらめきをたどれば、道に迷

うことはない。

地球が空間を切り裂くように進むその轟きの向こうにも、音楽がある。

地上の鈍い耳には聞こえない調べの音楽があり、互いに調和した魂そのものが和音となるハーモニーがある。

聞きなさい。聞こえるだろうか。

ああ、耳は聞くためにあり、目は見るためにあり、心は愛するためにあるのだ。

時間は過ぎても跡を残さず、年月は空を舞うシルフのように足跡を残さず、世紀はゆっくりと厳かに進んでいく。

しかし私たちは微笑む。なぜなら、その厳かな歩み
の中にも喜びがあるからだ。

喜び、喜び、至るところにある。それはあなたのため
であり、私のためであり、あなたにも私と同じよ
うに与えられている。

四つの風が出会う場所で、私に会いに来てくれる
だろうか。

第三十六の手紙

空洞の球体

しばらく前に、私はあなたに地獄の領域へのいくつかの訪問について書き始めたが、途中で呼び出されてしまい、その手紙は完成しなかった。今夜、その話の続きをしよう。

あなたは知っておかなければならない。地獄はたくさんあり、そのほとんどは私たち自身が作り出したものだ。これはありふれた言い方だが、事実に基づいている。

ある日、酒に溺れた人間が行きそうな種類の地獄を見てみたいと思い、私は世界を取り巻く空洞の球体の中で、酒乱が最も多い国に対応する場所を探した。魂は、この世を離れると、特別な理由がな

い限り、生前に住んでいた場所の近くにとどまることが多い。

酒飲みで満ちた地獄を見つけるのは難しくなかった。彼らが何をしていると思うか？罪を悔いていたのか？まったく違う。

彼らは、地上の酒の蒸気や、過度に酒を飲む者たちの重い蒸気が漂っている場所の周囲をうろついていた。そのため、敏感な人々が酒場の近くを嫌うのも無理はない。

もし私が見たすべてを話せば、あなたは嫌悪して私のために書くのを拒むだろう。ここでは一、二の例で十分だ。

私は、両方の世界を見渡せるように、自分を共感的で中立な状態に置いた。

落ち着きのない目と苦しげな顔をした若い男が、金ぴかで磨き上げられた偽のマホガニーが、みじめな旅人に「この世の王国の贅沢」を楽しんでいるかのような錯覚を与える、ある「ジン宮殿」に入ってきた。

彼の服は擦り切れ、靴はひどくすり減っていた。あごには無精ひげが生えていた。なぜなら、ひげ剃りの代金は酒一杯の代金であり、人は手に入るなら自分が最も欲するものを選ぶからだ。

彼はカウンターにもたれ、魂を破壊するような飲み物を一杯飲んでいて、そしてそのすぐそばに、彼よりも背が高く、彼の上に覆いかぶさるようにして、その嫌悪すべき、膨れ上がった、ぞっとする顔を彼の顔に押しつけ、まるで彼のウイスキーの息を嗅ぐかのようにしている存在がいた。

それは、私がこの世界に来て以来見た中でも最も恐ろしいアストラルの存在の一つだった。

その存在の手(私はその生命力を示すためにこの言葉を使う)——その手は若者の体をつかんでいた。一本の長くむき出しの腕は肩に、もう一本は腰に回されていた。それは文字通り、酒に浸された生命を吸い取り、彼を吸収し、利用し、死によって強められた欲望を間接的に味わおうとしていた。

だが、それは地獄の存在だったのか？とあなたは問うだろう。そうだ。私はその心を見て、その苦しみを知ることができたからだ。

永遠に(「永遠」という言葉は、終わりが無いように思えるものに使える)この存在は渴望し続け、決して満たされることはない運命にあった。

そこには、かつて人間であった心の残りがわずかにあった——時折、自分の状態の恐ろしさをかすかに垣間見るだけの分が。逃げたいという願いすらなく、逃れられないという意識そのものがさらに苦しみを増していた。そしてその目には恐怖があった。未来への恐怖——見ることはできないが、自分を今よりさらに大きな苦しみへと引きずり込もうとしている未来への恐怖が。

なぜなら魂だけが持続し、魂に見捨てられたものは崩壊し、消滅するからだ。

そしてその金ぴかの酒場でカウンターにもたれていた若者は、名状しがたい恐怖に満たされ、その場を離れようとした。しかし今や主人となったその存在の腕はますます強く彼を締めつけ、湿った蒸気のような頬がさらに彼に押しつけられ、その吸血的

な存在の欲望は犠牲者の中に同じ欲望を呼び起こし、若者はもう一杯を求めた。

まさに、地上と地獄は隣り合った状態であり、その境界は一度も明確に描かれたことがない。

私は欲望の地獄も、憎しみの地獄も見た。

虚偽の地獄も見た。そこでは、哀れな住人がつかもうとするすべてのものが別のものへと変わり、望んだものを否定する形となり、真実は永遠に嘲笑され、何も現実ではなく、すべてが変わり続け、不確かで、虚偽そのものののように、自分自身の反対へと変わっていく。

私はまだ嘘に屈していない者たちの苦悶の顔を見た。現実をつかもうとする必死の努力を見たが、それは手の中で溶けてしまった。虚偽の習慣は、この

形の変わりやすい世界では、その人の周囲に絶えず変化する像を作り出し、嘲り、逃げていく。

愛する者の顔を見ようとするか？約束は与えられるが、その顔は現れるとすぐに歪んだ鬼の顔へと変わる。

野心の成果を思い出そうとするか？それは別の形の恥に変わり、誇りは弱い羞恥へと変わる。友情の手を握ろうとするか？

手は差し出されるが、その握りの中にはナイフがあり、嘘つきの生命を貫くが、彼を死なせはしない。そしてその無駄な試みが、何度も何度も繰り返される。やがて不安な良心が疲れ果てるまで。

死の床での後悔と、その後続く病的な記憶の収穫には注意せよ。自分の業の重荷を背負って勇敢

に永遠へ進むほうが、みじめな臆病さでこそこそと地獄の裏口から忍び込むよりもはるかにましだ。

もし罪を犯したなら、その事実を勇気をもって認め、二度と繰り返さないと決意せよ。

しかし最後の時に罪に執着する者は、その状態の向こうでそれを何度も何度も生き直すことになる。

すべての行為には必ず反作用があり、すべての原因には必ず結果が伴う。その結果を変えられるものは何もない——ただし、意志という強力な力学を除いては。意志が結果を変えるとき、それはより強い原因を新たに生み出すことで行われる。まるで大洪水がホースからの細い水流を飲み込み、ホースそのものとその流れを一緒に押し流すように。

自分が罪を犯したと認めたなら、それよりも強い善

い行いを起こし、その報いを受けよ。

地獄についてはまだ語るべきことが多いが、今夜はこれで十分だ。また別の機会にこの話に戻ろう。

第三十七の手紙

空っぽの中国のカップ

どれほど魂が古く、経験を積んでいようとも、子どもたちがそれぞれの人生において、世の中の人工的な基準に従って、あらゆる物事の相対的な価値をもう一度学び直さなければならないのは不思議ではない。なぜなら、このこちらの世界では、それらの価値は意味を失ってしまうからである。

ある魂が人間の世界において家や土地や名誉を持っていたとしても、それによって私たちの目における価値が高まることはない。私たちは、その人が捨ててきた富から利益を得ることを望むこともできない。こちらの「その後の世界」において、魂は自分の家を自ら築くのであり、その材料は空気のように自由である。もし私が他人が建てた家を使うなら、自分で創造する楽しみを失ってしまう。

ここには盗む価値のあるものは何もない。だから夜に泥棒を恐れて震える者もない。退屈な人間でさえ、自分自身の中心へと引きこもることで避けることができる。

なぜなら退屈な人間というのは、自分自身にばかり閉じこもっているため、他人の中心にまで入り込むことができないからである。

地上では、人は称号を重んじる。世襲のものであれ、後から得たものであれ。しかしここでは、人の名前は本人にとってさえそれほど重要ではない。名刺などは天の床の隙間から落ちてしまい、どんな召使いの天使もそれを主人に届けることはないだろう。

ある日、私は最近こちらに来たばかりの女性に出会った。彼女はまだここに来て日が浅く、普通の人間や天使より自分が優れているという自信を失っていなかった。

その朝、私は過去を思い出していたので、最高のローマのトーガを身につけていた。するとその女性は私をカエサルか何かの古代の貴族だと勘違いし、上流の女性たちが集まる場所へ案内してほしいと頼んできた。

私はそのような場所を知らないと答えざるを得なかった。しかし彼女は孤独で戸惑っている様子だったので、しばらく私のそばで休み、望むなら質問してよいと勧めた。

「私はここに数か月いますが、かなりの経験を積んでいます」と私は言った。

彼女は明らかに困惑した。私の古典的な衣装と「数か月しかいない」という言葉の間に、何か不釣り合いなものを感じたのだろう。

「もしかしてあなたは俳優なのですか」と彼女は言った。

「ここでは誰もが俳優なのです」と私は答えた。

それは彼女をさらに混乱させた。彼女は理解できないと言った。かわいそうに、私は彼女に同情し、私たちが生きている条件をできるだけ説明しようと努めた。

「まず知っておかなければならないのは」と私は言った、「ここは実現された理想の国だということです。だから、王になりたいとずっと望んできた人は、

ここでその役を演じることができます。そして誰もそれを笑いません。なぜなら、それぞれの魂にはお気に入りの夢があり、それを自分なりに満足できる形で演じているからです。」

「私たちはここで、子どものような寛容さと礼儀を取り戻しています。子どもは互いの遊びを決して嘲笑しませんから。」

「では天国とはただの遊び場なのですか？」と彼女はショックを受けたように言った。

「いいえ」と私は答えた。「しかし、あなたはまだ天国にはいません。」

彼女の不安そうな表情を見て、私はすぐに付け加えた。

「しかし地獄でもありません。地上ではどのような宗教を持っていたか？」

「ええ、私の国と身分にふさわしい普通の宗教を信じていましたが、あまり深く考えたことはありません。」

「煉獄という考えはご存じでしょう。」

「私はカトリックではありません」と彼女は少し強い調子で言った。

「それでも、あなたの立場の人がカトリックであれば、自分は煉獄にいると思うでしょう。」

「確かに私は幸せではありません」と彼女は認めた。

「すべてがとても奇妙だからです。」

「こちらに友人はいませんか？」と私は尋ねた。

「知り合いはたくさんいるはずですが、親しい友情は好みませんでした。私はよく人を招いていました。夫の政治的立場上、それが必要だったので。」

「こちら側で、かつて特別に親切にした人はいませんか？ 誰かの悲しみを和らげたり、貧しさを助けたりしたことは？」

「私は組織的な慈善活動を支援していました。」

「そのような助けはあまりに形式的すぎて、こちらでは記憶に残りにくいのです。子どもはいませんか？」

「いいえ。」

「こちら側に兄弟姉妹はいないのですか？」

「ただ一人の兄がいましたが、身分にふさわしくない結婚をしたことで、私は彼と争いました。」

「しかし、きっと」と私は言った。

「お母さまはいたはずでしょう。こちらに来たとき、迎えてはくれなかったのですか？」

「いいえ。」

これは私を驚かせた。というのも、私はこう聞かされていたからだ——まだ地上に戻っていない母の魂は、自分が産んだ子どもが霊の世界へ再び生ま

れ変わろうとするとき、特別な震えのようなものでそれを知る、と。それは一種の共感的な“後産の痛み”のようなものであり、母性の最後にして最も甘美な報いなのだと。

「では、お母さまは再生してしまったのでしょうか」と私は言った。

「あなたはそんな異教的な考えを信じているのですか？」とその女性は、わずかに優越感をにじませて尋ねた。

「私はてっきり、そういうのは変わった人たち——神智学者とか、その類の人たちだけが信じているものだと思っていました。」

「私は昔から変わり者でした」と私は認めた。

「ですがご存じでしょう、奥さま。地上の人間の約四分の三は、何らかの形でその考えを知っているのです。」

私たちはしばらく話を続けたが、その間ずっと私は、この哀れで孤独な女性をどう助けられるかと思案していた。誰も彼女を待っていないのだ。

私は心の中で、知り合いの助けの天使たちを一人ひとり思い浮かべ、誰が地上の常識的な観点から最もふさわしいだろうかと考えた。

最も高貴な者たちはたいてい、こちらに来たばかりの不幸な女性——私の新しい保護対象が属していた礼儀正しい社会の言葉を借りれば、婉曲にそう呼ばれる人々——のそばにいるのが常だった。

他の者たちはあちこちにいたが、たいていは最も助

けを必要とする魂たちと共にいた。

そして今、私の隣にいるこの女性の必要は切実ではあるが、緊急というほどではなかった。もしリオネルがここにいれば、しばらく彼女の相手をしてくれたらろう。

私は、この世界でも編み物をしながらおしゃべりをする女性たちと知り合いになっておけばよかったと思った。

驚かないでほしい。

長年の習慣が一瞬で消えると思ったのか？

地上の女性たちがよく編み物の夢を見るように、こちらでもそうなのだ。この世界で編み物をするのは、あなた方の世界で夢を見るのと同じくらい簡単なのだ。

理解してほしい。私が今生きているこの世界は、あなたの生きている世界より本質的に神聖なわけではないし、そこに住む者にとって特別に神秘的というわけでもない。

真剣に生きる魂にとっては、あらゆる状態が神聖である——卑しいものを除いては。そしてその両方は、こちらにも地上にも存在している。

さて、この孤独な女性の話に戻ろう。私はまだ彼女をどうすべきか考えていた。そのとき、ふと顔を上げると、教師が近づいてくるのが見えた。

彼はもう一人の女性を連れていた。その女性は、最初の女性と、まるで空っぽの中国のカップ同士のようにそっくりだった。

それから私と教師はその場を離れ、二人を一緒に残した。

「あなたが、これほど発達した魂以外の者たちのためにも関わるとは知りませんでした」と私は教師に言った。

彼は微笑んだ。

「私が来たのは、あの気の毒な女性たちの困惑を解くためではなく、あなたの困惑を解くためだ。」

そして彼は、相対的な価値について語り始めた。

「ある意味では」と彼は言った。

「一つの魂は他の魂と同じくらい助ける価値がある。しかし、より深い意味では、そうではないかもし

れない。私が強い者たちに時間と注意を向けているからといって、弱い者たちの苦しみに無関心だと思ってはならない。

私は、助けを最も必要としている場所へ行くのだ。

ただし、私が教えることを学べるのは強い者だけだ。弱い者たちは、救世主たちとその従者たちの保護下にある。

しかしそれでも、私たちと救世主たちの間には兄弟愛があり、相互の理解がある。それぞれが自分の領域で働いているのだ。

救世主たちは多くの者を助け、私たちは少数を助ける。彼らが受ける愛の報いは私たちより大きい。私たちは彼らと同じく報いのために働いているのではない。それぞれが自分の存在の法則に従っ

ているのだ。

すべての人に愛される教師になるためには、すべての人に知られなければならない。しかし私たちは、ごく少数の選ばれた者にしか自らを明かさない。

なぜ救世主たちの道を行かないのか？それは、均衡が保たれなければならないからだ。人々の目に見える偉大な働き手がいれば、その背後には見えないもう一人の働き手がいる。どちらの教師がより価値があるのか？その問いは成立しない。北と南は互いに依存しており、磁石には必ず二つの極があるのだ。」

第三十八の手紙

時間のないところ

これまで私が話してきたことから、あなたももう理解していると思うが、空気のような境界を越えたすべての魂が天国か地獄のどちらかにいるわけではない。極端な状態に至る者は少なく、大半の者は地上で与えられた期間を生きたのと同じように、ここでも与えられた期間を過ごしている。そして、自分の置かれている状態の可能性や意味を十分に理解しないままにいる。

知恵というものはゆっくり育つ木のようなものである。その幹の年輪は地上での人生であり、その間の溝は人生と人生のあいだの期間である。どんぐりがオークの木になるのに時間がかかるからといって嘆く者がいるだろうか？

同じように、私があなたに理解してほしいと努めてきた真理——魂には大いなる余裕があるという真理——を悲しいものと感じるのは、理にかなっていない。

もし人が数年で大天使になってしまったなら、成長の苦しみにによって大きく苦しむだろう。法則は厳格だが、しばしば優しくも見える。

それでも天国にいる魂は多く、また天国も多く存在する。私はそのいくつかを見てきた。

だが、ほとんどの人が私のように場所から場所へ、状態から状態へと移動していると思ってはならない。

私があなたに語っている事柄自体は特別なものではないが、一人の人間がこれほど多くのものを見

て語ることができるという点では、確かに例外的である。私はそれを主に教師のおかげで得ている。彼の導きがなければ、これほど豊かな経験を得ることはできなかっただろう。

そう、天国は数多くある。昨夜、私は地上にいた頃に時おり感じた、美への強いあこがれを覚えた。

この精妙な世界の最も不思議な現象の一つは、共鳴による強力な引き寄せである——つまり出来事の引き寄せだ。何かを強く望めば望むほど、それに近づいていく。羽のように軽い存在は、自由な意志によって押し出されると、驚くほど速く動く。

私は美を求める思いに満たされた。美とは、すなわち天国の別名である。私は実際にそこへ移動したのだろうか、それとも天国のほうが私のもとへ来たのだろうか。それは分からない。ここでは空間の意

味がとても小さいからだ。

外にある谷には内にも対応する谷がある。ある場所を望めば、私たちはそこにいる。おそらく教師ならこれを科学的に説明できるだろうが、今の私にはできない。だが、昨夜私がいたその天国について話したい。それはあまりにも美しく、その魅力が今も私を包んでいる。

私は、糸杉のような濃い色の頂を持つ木々が二列に並んでいるのを見た。その長い並木道の先には、やわらかく拡がる光があった。

どこかで「千の太陽に照らされた天国」という話を読んだことがあるが、私の見た天国はそうではなかった。

近づくにつれて、その光は月明かりよりも柔らか

く、しかしより澄んでいた。おそらく太陽の光も、幾重もの石膏の幕を通して見れば、同じように柔らかく見えるのかもしれない。しかしその光は、どこから来るのでもなかった。ただ、そこに在ったのだ。

近づくと、二つの存在が手を取り合ってこちらへ歩いてくるのが見えた。その顔には、地上では決して見られないほどの幸福があらわれていた。時間というものを意識しない魂だけが、あのような表情を持つことができるのだろう。

私はそれらを男と女だと言いたいところだが、あなたが理解している男や女とはまったく異なるように見えた。

彼らは歩きながら互いを見ようとしなかった。手の触れ合いだけで、すでに完全に一つとなっており、目で確かめる必要などまったくなかったのだ。ど

こちらともなく来る光と同じように、彼らはただ「在る」だけだった。

さらに進むと、明るい衣をまとった子どもたちの一団が、花の中で踊っているのが見えた。彼らは手をつないで輪になり、踊っていた。

その衣は花びらのようで、踊る動きに合わせて揺れていた。大きな喜びが私の心を満たした。彼らもまた時間を意識しておらず、私の知るかぎり永遠にそこで踊っているようにも思えた。

しかし、その喜びが一瞬のものなのか、長い時のものなのかは、私にも彼らにも何の意味もなかった。光や、手を取り合って通り過ぎた恋人たちと同じように、彼らはただ「在る」のであり、それで十分だった。

私は糸杉の並木道を抜け、花の咲く木々に囲まれた広い平原に立っていた。空気には春の香りが満ち、鳥たちが歌っていた。

平原の中央には大きな円形の噴水があり、水を空中へと投げ上げ、それが羽のような細かな霧となって降り注いでいた。言葉では言い表せない魅力が、あたり一面に満ちていた。

この花の香りに満ちた円形の天国の中を、あちこちで天使のような存在たちが歩いていた。その多く、あるいはほとんどは、かつて人間であったに違いない。彼らは二人ずつ、あるいは群れになって歩き、静かに微笑みながら過ごしていた。

地上では「平和」という言葉をよく使うが、あの場所の平和と比べれば、地上のどんな平和もただの騒がしさに過ぎない。私はそこが最も美しい天国

の一つであることを悟ったが、同時に、そこにいるのは自分一人だけであることも理解していた。

孤独を感じるその思いが私の心に宿ったその瞬間、少し前にあなたに書いたあの美しい存在が、私の目の前に立っているのが見えた。その存在は微笑み、こう言った。

「自分の孤独を悲しく意識した者は、もはや天国にはいない。だから私は、もうしばらくあなたをここにとどめておくために来たのです。」

「ここは、あなたが住んでいる特別な天国なのですか？」と私は尋ねた。

「ああ、私はどこにも住んでいないし、同時にどこにでも住んでいるのです。」とその美しい存在は答えた。「私は自ら進んでさまよう者の一人であり、どん

な天上の場所でも、また地上のどんな場所でも、そこに家の魅力を見いだすのです。」

「では、あなたは時々地上にも行くのですか？」

「ええ、最も遠い地獄にさえ私は行きます。しかし長くそこに留まることはありません。私の目的は、あらゆるものを知ることでありながら、何にも執着しないことです。」

「では、あなたは地上を愛しているのですか？」

「地上は私の遊び場の一つです。私は時に地上の子どもたちに歌いかけます。そして詩人たちに歌うとき、彼らは自分のミューズがそばにいるのだと思い込むのです。これは、ある夜、人の中に住む一つの魂に向けて私が歌った歌です。」

「妹よ、私はあなたが気づかないときにも、しばしばあなたのそばにいる。

詩人の魂は、私にとっては深い井戸のようなもので、その奥に私は自分の姿を映して見ることができる。

私は光と色のきらめきの中に生きているが、地上の詩人たちは、その魔法のような言葉でそれを表そうとしても、むなしく終わる。

私は夕焼けの中にあり、星の中にある。私は月が老いてゆくのを見守り、あなたが若くなっていくのを見てきた。幼いころ、あなたは流れる雲の中に私を探した。大人になってからは、恋人のまなぎしの輝きの中に私を捕まえたと思ったかもしれない。しかし私は人を逃れ続ける存在である。

私は手招きし、そして飛び去る。私の足が花咲くデイジーの頭を押しつぶすことはない。

あなたは私を見つけることもできるが、また失うこともある。人間は私を留めておくことができないのだから。

思いや形の中に美を求める者には、私は最も近くにいる。しかし私を閉じ込めようとする者からは、私は離れていく。

あなたは毎日、私の住む場所へ来ることができる。

時には私に会えるだろうし、時には会えないだろう。なぜなら私の意志は風の意志であり、私はどんな呼びかけにも従わないからだ。

しかし私が呼ぶとき、魂たちは天の四方から飛んでくる。

あなたの魂もまた飛んでくる。なぜならあなたは、私の魔法の呼びかけによって呼ばれた者の一人だ

から。

私はあなたを必要としており、あなたもまた私にとって意味を持っている。

私は、夢や恍惚の中にあるあなたの魂を見るのが好きなのだ。

私に属する者の一人が楽園の夢を見るたびに、すべてが輝いている私にとって、その光はさらに強くなる。

ああ、この瞬間の魅力を忘れてはならない。心の状態の誘いを忘れてはならない。

なぜならその心の状態こそが、地上のどんな賢者よりも賢く、この瞬間の宝こそが、時代を通じて蓄えられた富よりも豊かで貴重だからである。

瞬間こそが現実であり、時代とは幻想であり、記憶であり、影にすぎない。

それぞれの瞬間がすべてであると確信しなさい。そしてその瞬間は時間よりも大きい。

時間は砂時計を持ち、その歩みは遅い。その髪は年月の霜で白くなり、その鎌は絶え間ない刈り取りで鈍くなっている。

しかし時間はいまだかつて、飛び去る瞬間を捕らえたことがない。それを捕えようと網を投げ続けて老いていったのだ。

ああ、生命の魔法と、生きるものの無限の組み合わせの神秘よ！

私は太陽が生まれたとき若く、月がその娘である
地球の腕の中で死ぬときにも若いままであろう。

あなたも私とともに若くあり続けたいか？塵は何で
もない。魂こそがすべてである。

水面に浮かぶ三日月のように、愛が目覚める瞬間
がある。

疲れた世界の膝に落ちた色あせた花のように、愛
が終わる瞬間もある。

しかし愛には小さな愛と大なる愛があり、光がそ
の輝きを愛するように、魂もまた互いを愛する。

内なる光が輝いているところには死はない。その光
は内なる領域——その先——到達しがたい達成
の場を照らし出している。

あなたは私をどこで見つけられるか、もう知っているはずだ。」

第三十九の手紙

死の教え

ここに来てからの数か月のあいだに、私は何度も、男女が深い無意識の状態で横たわっているのを見てきた。

その眠りは、最も深い眠りよりもさらに深く、顔には何の表情もなく、興味を引くものもなかった。最初は、その眠りの性質を理解していなかったなので、実験として一人二人を起こそうとしてみたが、成功しなかった。

興味を引かれたある場合には、後日また何度も戻って見に行ったが、彼らは同じように昏睡状態のままで横たわっていた。

「なぜこんな眠りにつくのだろう？」と私は自問し

た。「言葉でも、触れても目覚めないほど深い眠りに、なぜ人は落ちるのか？」

ある日、教師と一緒にいたとき、私は以前に見て、観察し、目覚めさせようとして失敗したあの無意識の男のそばを通りかかった。

「このように眠っている人たちは、いったい誰なのですか？」と私は教師に尋ねた。すると彼は答えた。

「彼らは、地上に生きていたときに、死後の魂の不滅を否定していた者たちである。」

「なんと恐ろしいことだ！」と私は言った。「彼らはもう二度と目覚めないのですか？」

「いや、目覚めるだろう。だがそれは、ある者は数

世紀後、ある者はさらに長い時の後だ。抗うことのできないリズムの法則が、彼らを眠りから引き出し、再び受肉へと導くときに。なぜなら、再生の法則はリズムの法則と一つだからである。」

「この男のような者でも、目覚めさせることはできないのですか？」

「あなたはすでに試みたのではないか？」と教師は鋭い目で私を見て言った。

「はい」と私は認めた。

「そして失敗したのだな？」

「はい。」

私たちはしばらく見つめ合い、私は言った。

「あなたなら、私よりも大きな力と知識を持っている
のですから、私ができなかったこともできるのでは
ありませんか。」

彼は答えなかった。その沈黙は私の興味をさらにかき立て、私は熱心に言った。

「やっていただけませんか。この人を目覚めさせて
ください。」

「あなたは、自分が何を求めているのか分かってい
ない。」と彼は言った。

「では教えてください。あなたには彼を目覚めさせ
ることができるのですか？」

「おそらくは。しかし、彼を眠りにとどめている法則

——彼自身が生前に、自らの魂にかけた呪い、すなわち無意識と消滅を求めたその法則——それに対抗するには、さらに強い法則を働かせなければならない。」

「それは何ですか？」

「意志だ。意志の力である。」

「あなたにそれができますか？」

「先ほど言ったとおり——おそらくは。」

「では、やっていただけますか？」

「繰り返すが、あなたは自分の求めていることを分かっていない。」

「どうか説明してください。」と私は食い下がった。
「これは私が見た中でも、最も驚くべきことの一つ
なのです。」

教師の顔は非常に厳粛であった。彼はこう答えた。

「この男は過去にどれほどの善を行ったというの
か。私が、彼自身が意図的に作り出した原因と結
果の法則のあいだに立ってまで、彼を助ける理由
がどこにあるのか。」

「私は彼の過去を知りません。」

すると教師は問い返した。

「では、なぜ私にそれをさせようとするのか。」

「理由、ですか？」

「そうだ。この男の不幸な状態への同情からか。それとも単なるあなたの知的好奇心からか。」

私は、彼への同情だと言えればよかったのだが、このような教師に対して真実や動機をごまかすことはできない。そこで私は、それが知的好奇心によるものであると認めた。

「それならば」と彼は言った。

「私は、この男を用いて、訓練された意志の力を示す実験を行うことが正当化される。」

「彼に害はないのですか？」

「むしろその逆だ。たとえ衝撃を受けたとしても、その体験は彼の心に深く刻まれ、将来どの人生にお

いても、死がすべての終わりだと信じたり、他人に
そう教えたりすることは二度とできなくなるだろう。
彼自身について言えば、これほど大きな力を費や
してまで目覚めさせる価値は本来ない。だがもし
目覚めさせるとすれば、それはあなたのためだ。
『あなたが信じるために』である。」

あのとき起こった光景を、あなたが想像の目で見ら
れるように描写できればよいのだが。私たちの足元
には男が横たわっていた。

その顔は色を失い、表情もなく、その上に教師の壮
麗な姿がそびえていた。その顔は力に満ちて美し
く、目は思考の輝きで光っていた。

「見えないか」と教師は言った。

「この、一見生命のない姿の周りに、かすかな光が

あるのが。」

「はい、でもその光は本当にかすかなものです。」

「それでも」と教師は言った。

「その光は、この弱い魂が永遠の真理に結びついている力よりも、はるかに強いのだ。だが、あなたには横たわるその姿の周りに淡い光しか見えないだろうが、私にはその光の中に、この魂の過去の多くの情景が見える。彼はただ魂の意識の不滅を否定しただけでなく、その死の教えを他の人々にも説き、彼らを自分と同じようにしてしまった。まったく、この男は私が目覚めさせるに値しないのだ！」

「それでも、あなたは目覚めさせるのですか？」

「そうだ、私はそうする。」

私の教師が、どのような言葉と行為によって、その男を自ら作り出した消滅のまねごとの状態から、激しい努力の末に目覚めさせたのかを、詳しく語ることとは許されていない。

それでも私は、これまでになくはつきりと、教師個人の力だけでなく、訓練され方向づけられた意志の抗いがたい力を理解した。

私は、新約聖書に記されたあの場面を思い出した。イエスが墓の中の死者に向かって「ラザロよ、出て来なさい！」と言った場面である。

「人の魂は不滅である。」と教師は宣言した。目覚めた男の怯えた目をじっと見つめ、その視線を意志で押さえつけながら。

「人の魂は不滅である。」と彼は繰り返した。そして命令するような口調で言った。

「立ちなさい！」

男はよろめきながら立ち上がった。ここでの私たちの身体はすべて羽のように軽いのだが、それでも彼の眠っていたエネルギーはあまりにも鈍く、そのわずかな動作さえ困難に見えた。

「あなたは生きている。」と教師は言った。

「あなたは死を通過し、そして今も生きている。生きていることを否定してはならない。あなたにはそれを否定することはできない。」

「しかし私は信じない……」と男は言いかけた。

頑固な物質主義がなおも、自分自身の存在という
真実に逆らおうとしていたのである。

その記憶が、今しがた通り抜けてきた体験を経て
もなお残っていることに、私は何よりも驚いた。だ
がしばらくして理解した。

それは、この魂を取り巻く霊的記録の中にある教
師の強いイメージが、その記憶を呼び覚ましたの
だ。

「私たち二人の間に座りなさい。」と教師は新たに
目覚めた男に言った。

「そして一緒に考えようではないか。あなたは地上
で生きていたとき、自分を偉大な論理家だと思っ
ていたのではないか、某氏として？」

「そう思っていた。」

「だが、自分の論理が誤っていたことは分かるだろう。」と教師は続けた。

「なぜなら、あなたは確かに死を通過し、そして今も生きているのだから。」

「しかしここはどこなのだ？」男は戸惑いながら周囲を見回した。

「ここはどこだ、そしてあなたは誰なのだ？」

「あなたは永遠の中にいる。」と教師は答えた。

「そこはあなたが常にいた場所であり、これからも常にいる場所だ。」

「ではあなたは？」

「私は法則の働きを知る者である。」

「どんな法則だ？」

「リズムの法則だ。それは魂を粗い物質の中へ、またそこから外へと押し出す。そしてそれは海の潮を満ち引きさせるのと同じように、人の意識を眠りと目覚めへと動かす。」

「では、私を目覚めさせたのはあなたなのか？あなたはそのリズムの法則なのか？」

教師は微笑んだ。

「私は法則そのものではない。」と彼は言った。

「しかし私はそれに従っている。あなたと同じように。ただし、私は意志によって一時的にそれを超えることができる——これもまた、あなたと同じようにだ。」

この単純な言葉の深さに、私は息をのんだ。

しかしその男は、その意味に気づいていないようだった。

「あなたと同じように」——この男は、誤った意志によって、不滅という法則から一時的に離れていたのだ。

そして教師は、正しく導かれた意志によって、自らの中の死すべき性質を超えていたのだ！この一瞬の理解に、私は人間の心に秘められた神のような

可能性を見て、魂が歌うのを感じた。

「私はどれくらい眠っていたのだ？」と男は尋ねた。

「あなたは何年に死んだのだ？」と教師は聞き返した。

「1817 年だ。」

「そして現在は、キリスト暦によれば 1912 年である。あなたは 95 年ものあいだ、死んだような眠りの中に横たわっていたのだ。」

「では本当に、あなたが私を目覚めさせたのか？」

「そうだ。」

「なぜそんなことをした？」

「それが私の意志にかなったからだ。」と教師はやや厳しく答えた。

「あなたが目覚めるに値したからではない。」

「もしあなたが目覚めさせなかったなら、私はどれくらい眠り続けていたのだ？」

「それは言えない。おそらく、あなたと同じ出発点にいた者たちが、進化する生命の道において、はるか先へ進んでしまうまでだろう。数世紀かもしれないし、あるいはもっと長い時かもしれない。」

「あなたは自分で大きな責任を背負ったのだな。」と男は言った。

「それを私に思い出させる必要はない。」と教師は

答えた。

「私はその責任を自分の中で十分に考え、そのうえで自分の目的のために引き受けることに決めたのだ。なぜなら意志は自由だからだ。」

「だが、あなたは私の意志を打ち負かしたではないか。」

「そうだ。しかしそれは、より強い私の意志によってだ。その意志は、正しく導かれ、より大きなエネルギーに支えられているがゆえに、より強いのだ。」

「では、これから私をどうするつもりだ？」

「あなたの教育の責任を引き受ける。」

「教育だと？」

「そうだ。」

「それで、私に楽な道を与えてくれるのか？」

「いや、むしろ非常に厳しいものになるだろう。しかしあなたは私の教えから逃れることはできない。」

「あなた自身が私を教えるのか？」

「“自ら”という意味では、私の進んだ弟子の一人のもとにあなたを置くことになる。」

「誰だ？ここにいるこの男か？」と彼は私を指さした。

「違う。彼には別の役目がある。今からあなたをその教師のところへ連れて行こう。」

「その人は私に何を見せるのだ？」

「不滅の全体像だ。そしてその教えを決して忘れることも、逃れることもできないほどに理解したとき、あなたは地上へ戻らなければならない。

そしてそれを他の人々に教えなければならない。

これまであなたが物質主義と死の誤った教えによって人々を惑わせ、誤らせてきたのと同じだけ、多くの人々を不滅の真理へと導かなければならない。」

「もし私が拒否したらどうなる？意志は自由だと言ったではないか。」

「拒否するのか？」

「いや、そうではない。しかし、もし拒否したとしたらどうなるのか？」

「その場合、行動と反作用の法則——東洋ではカルマと呼ばれるものだ——のもとで成長し発展する代わりに、あなたはその法則の犠牲となるだろう。」

「よく分からない。」

「カルマの法則、すなわち原因と結果の法則を理解する者こそ、真に賢い者である。」と教師は言った。

「さあ行こう。あなたを新しい教師のもとへ連れて行く。」

そう言うと、教師とその弟子は、灰色の遠方の中へ

消えていった。私はその場に長いあいだ残り、見聞きしたことを思い巡らしていた。

第四十の手紙

天上の階層

これから私は、ある人々にとっては衝撃的に感じられるかもしれないことを述べようと思う。

しかし、自分の考えに執着し、他者の考えを受け入れる気のない人は、「生きている」と呼ばれる世界と、「決して死んでいない」世界とを隔てている、嚴重に守られた扉を開こうとすべきではない。

私が述べようとしているのは、こういうことである。すなわち、多くの神々が存在し、唯一の神とはそれらすべての総体であるということだ。

すべての神々は神の中に存在している。この言葉をどう受け取るかは、あなた方の自由だ、世界よ。

なぜなら真理は、誰の夢よりも——あなたの夢であれ、私の夢であれ——はるかに重要なのだから。

私は神を見たのか？私は「神の子」と呼ばれてきた存在を見た。そして、あなたも覚えているだろうが、その人は「子を見た者は父を見たのだ」と言った。

では他の神々はどうなのか？とあなたは問うだろう。世界の神話には多くの神々がいる。そう、それらの実在はここにある。

何だと！とあなたはさらに言うかもしれない。人間が想像で神々を作り、それにこの見えない世界での居場所を与えたのか、と。いや、そうではない。

彼らはもともとここに存在していたのであり、人間は遠い昔に、自らの霊的・精神的な知覚によって彼

らに気づいたのだ。

人間が彼らを創造したのではない。人間がそうしたのだと言う物質主義者たちは、存在の法則についてほとんど何も知らない。原始の人間は、自らの霊的な親和性と彼らとの近さによって、それらを知覚したのである。

あなたはこれまで、さまざまな神々の物語を読んできたとき、昔の神話の語り手たちを見下すように語り、自分がより啓蒙された時代に生きていることを幸運だと思ったかもしれない。

しかし、実際に啓かれていたのは、あの古い物語の語り手たちのほうであった。彼らはもう一つの世界を見て、見たものを記録していたのだから。

世界で親しまれている多くの神々は、かつて人間と

して地上に生きたとされている。実際に彼らはそう生きていた。この考えはあなたを驚かせるだろうか？

人はどのようにして神になるのか。そして神はどのようにして人になるのか。考えたことがあるだろうか。

人が神になるのは、神の意識を発達させることによってであり、それは単に神についての自分の考えを発達させることとは違う。近年、あなたは「マスター」と呼ばれる存在、すなわち超人的な達成を得た人々について多くを見聞きしてきただろう。

彼らは、この世の小さな楽しみや評価を捨て、より大きなものを得るために努力してきた。

神々そのものが変化していくのに応じて、人間の

神に対する考えも変化する。

「すべては生成し続けている」と、約二千四百年前にヘラクレイトスが言ったとおりである。神々だけが変わらず、人間だけが進歩していると思ったのか？

もしそうなら、いつかあなたは自分の神を追い越してしまい、自分自身を崇拜するようになるだろう。上に仰ぐべき存在がなくなってしまうからだ。

教師に伴われて、私は古い神々のいくつかと対面したことがある。

もし私が、他の神々を軽蔑し、自分の神だけを正しいとするような態度でここに来ていたなら、そのような特権は与えられなかっただろう。

神々は包容的であると同時に選別的でもあり、自分たちをありのままに見ることができる者にのみ、その姿を現すのである。

これは多神教や汎神論、あるいはその他の恐れられている主義へとつながるのか？

主義とは単なる言葉にすぎない。事実は存在する。かつては、誤った神の幻を見たという理由で人が火あぶりにされた時代もあった。

しかし今でも、私が神々について学んだことをすべて語るのはためられる。それでも多くのことをあなたには伝えられる。

たとえば、ローマ人がネプチューンと呼んだ神について考えてみよう。あれが単なる神話の詩的な創作だと思っていたのか？それ以上の存在だったの

だ。

彼は海を支配するとされていた。では、自然の要素や洪水を制御する働きが、それを行う能力のある存在によって担われ、分担されていると考えることは、どこが不自然だろうか。

私たちは自然の法則という言葉をよく口にするが、その法則を実際に働かせている者は誰なのか。「自然の法則」という言葉は誰もが使うが、その法則には、地上と同じように天にも執行者がいるのである。

また、惑星的な存在、惑星の神々がいるとも聞いている。しかし私はまだ、そのような存在と意識的に交わるという栄誉にはあずかっていない。

もし惑星的な存在がそれほど近づきたいものなら

ば、神々の神に近づくとき、私はいったいどのようなように振る舞えばよいのだろうか。

ああ、人間の心というものは何と逆説的なのだろう。しもべの前では畏れ震えながら、その主には何の恐れもなく近づこうとするのだから。

私は、この地球という惑星の守護霊が、はるか昔の存在の周期の中で、自らを進化させ、巨大な力と責任を持つ神へと成長したのだと聞いている。

顕微鏡を使ったことのある者にとって、この考えはそれほど恐ろしいものではないはずだ。無限に小さいものと無限に大きいものとは、永遠の蛇の尾と頭なのである。

では、未来の存在の周期において神々となるのは誰だと思うか？それは、この惑星の現在の周期の

中で、自らを人間的な限界を超えて高めた者たちではないだろうか。

現在の人間の霊の中でも、最も強く、最も崇高な者たちではないだろうか。神々でさえ休息の期間を必要とするのだから、今その役目についている者たちも、いずれは交代することを望むに違いない。

成長を志す人々にとって、発展への扉は常に開かれている。

第四十一の手紙

見えざる世界に愛される存在

私は以前に、私が「美しき存在」と呼んでいる者についてあなたに書いたことがある。その存在は、その領域を宇宙そのものとし、すべての人間と天使を仲間とし、日々や時代そのものを遊び道具としているような存在である。

なぜかは分からないが、その美しき存在は最近、私が知識を得ようとする努力に関心を示し、とても親切にも、私が他では決して見ることのできなかつた多くのものを見せてくれている。

もし天使に案内されてこの惑星を巡る旅ができるなら、その旅人は特別に恵まれていると言える。地上での有力者への紹介状など、この紹介に比べれ

ば何でもない。

この導きによって、私はあらゆる存在の魂の内側を見ることができ、彼らの家を訪ねるときも応接間に限られることはない。美しき存在はどこへでも自由に出入りできるのだ。

あなたは、素晴らしい夢を見たとき、「もしかしたら眠っている間に天使が口づけしてくれたのではないか」と思ったことはないだろうか。私はそうしたことを実際に見たことがある。

ああ、どうか想像力を思いきり解き放つことを恐れないでほしい。本当に真実なのは不思議なことの方であり、ありふれたことの多くはほとんどが偽りにすぎない。偉大な思いがあなたをぐっと引き上げたとき、地面にしがみつこうとしてはいけない。手を放しなさい。ひらめきにとらえられた者は、その幻

を信じる勇気さえあれば、私がそうであったように、この美しき存在と顔を合わせることさえできるかもしれない。空を飛んでいるとき、人の視力は鋭くなる。十分に高く、速く飛べば、思いもよらないものを見ることができる。

ある夜、私は一粒の花の種について考え込んでいた。なぜなら、どんなに小さなものでも、その中に一つの世界を含んでいるかもしれないからだ。その種の歴史を、世代から世代へとさかのぼり、時間の始まりにまでたどろうとしていた。もっとも「時間の始まり」という言い方には自分でも微笑んでしまう。時間にはこれまで幾度も夜明けと夕暮れがあったのに、それでもなお尽きることがないのだから。

私は、その種の系譜を、洞窟人が争いを忘れ、その親である花の香りを嗅ぐという不思議な喜びに心を奪われた時代までさかのぼっていた。そのとき、

左の耳元で低く音楽のような笑い声が聞こえ、蝶の羽のように軽いものが左の頬に触れた。

振り向くと、瞬く間に今度は右の耳で笑い声がし、右の頬にも同じような柔らかな触れがあった。そして何かがヴェールのように私の目の前をよぎり、澄んだ声がこう言った。

「誰だと思う？」

私はこの神聖な遊びの喜びに満たされ、胸を震わせながら答えた。

「たぶん、目の見えない子どもたちにデイジーの野原の夢を見させる妖精ではないかな。」

「どうしてそれが分かったの？」と美しき存在は笑いながら、私の目からヴェールをほどいた。

「その通り、私はその妖精よ。でも、あなた、私が目の見えない赤ちゃんたちの目に触れるとき、ドアの隙間からのぞいていたでしょう。」

「私はいつも人間たちの部屋の扉の隙間からのぞいているのです」と私は答えた。

すると美しき存在はまた笑った。

「今夜、私と一緒にもう一度のぞいてみない？」

「喜んで。」

「私が一緒なら、苦しみながらなんて無理よ。」

そうして私たちは、その場ですぐに、これまでにな
いほど不思議な夜の巡りへと出かけた。

まず、私の友人の家に行き、彼と家族が夕食をとっている部屋に静かに立った。私たちの姿に気づいたのは猫だけで、大きな喉鳴りを立て、喜んで体を伸ばした。もし私が一人でそこに来ていたら、その猫は私を怖がったかもしれない。しかし、美しき存在を恐れる者など、猫でさえいないのだ。

そのとき、子どもたちの一人——一番幼い子が、パンとミルクの夕食から顔を上げて言った。

「お父さん、どうしてミルクはおいしいの？」

「それはよく分からないな」と父親は答えた。

「たぶん牛がそれを与えるのを喜んでいるからじゃないかな。」

「このお父さんは詩人になれたかもしれないわ」と
美しき存在は私にささやいたが、誰にも聞こえては
いなかった。

別の子どもが眠いと訴え、テーブルの端に頭をの
せた。母親は起こそうとしたが、美しき存在が不思議なヴェールを彼女の目の前にひらめかせたので、それができなかった。

「眠りたいならそのまま寝かせておきましょう」と母親は言った。

「あとでベッドに運べばいいわ。」

私はその子の脳の中に、すでに夢が始まっているのを見た。

そして美しき存在が、その心の織物の上におとぎ話を紡いでいるのを知った。ほんの一瞬後、その子はぱっと目を覚ました。

「夢を見たよ」と彼は言った。

「あそこに——(この手紙を書いている人)が立っていて、前みたいに僕に微笑んでいた。それに一緒に天使もいた。僕、天使を見るのは初めてだよ。」

「こっちへいらっしゃい」と美しき存在は私にささやいた。

「夢を見ている子どもたちからは、何一つ隠すことはできないのだから。」

それから私たちは、私の息子ライオネルの未来の

母親のもとを訪れた。

ああ、母性という神秘よ！その美しき存在の目は星のように輝いていた。私たちは、このもう一つの「花の種」を見つめていた。

その系譜は洞窟人の時代をはるかに超え、火の霧の時代や、朝の星の子らの時代にまでさかのぼるのだ。

「行きましょう」と美しき存在は再び言った。

「母となる夢を見る花嫁たちにも、多くのことが明かされる。今夜は私たちは知られないままでいましょう。」

私たちは、にぎやかな町を分ける川のほとりを歩いた。すると突然、川岸の家からギターの音色と、女

性の甘い歌声が聞こえてきた。

「ほかの唇とほかの心が
愛の物語を語るとき、……

そのときあなたは思い出すでしょう——私を思い出すでしょう。」

美しき存在は私の手に触れ、ささやいた。

「人間たちにとってこんなにも甘美な人生は、私にとっては魔法の書物のようなもののなの。」

「しかし、あなた自身は人間の人生を味わったことがないのでは？」と私は尋ねた。

「いいえ、毎日味わっているわ。ただ“味わう”だけで、通り過ぎるの。もしそれを全部取り込んでしまったら、先へ進めなくなるかもしれないから。」

「それでも、それをすべて味わい尽くしたいと思う
ことはないのかい？」

「ああ、でもときめきは“味わうこと”にあるのよ。消
化するのは、どちらかといえば退屈な作業だも
の。」

「あなたは神的な気まぐれを持っているね」と私は
親しみを込めて言った。

「気をつけて」と美しき存在は答えた。「何かを恐れ
る者は、自分の恐れのお霧の中で私を見失うわ。」

「あなたは本当に抗えない存在だ！」と私は叫ん
だ。

「あなたはいったい誰なんだ？何者なんだ？」

「さっきあなた自身が言ったでしょう？私は、目の見えない赤ちゃんにデイジーの野原の夢を見させる妖精だと。」

「私はあなたを愛している」と私は言った。

「言葉にできない愛で。」

「すべての愛は言葉にできないものよ」と美しき存在は答えた。

「さあ、兄弟よ、視界の丘に登りましょう。息が切れたら、私のひらめくヴェールをつかめばいい。休むまで待ってあげるから。」

その夜、私たちは実に不思議なものを見た。すべてを語れば、あなたはきっと疲れてしまうだろう。

私たちは活動中の火山の火口の上に立ち、火の精
たちの舞いを見つめた。

サラマンダーという存在が、ただ酒好きの詩人の幻
想だと思っていたかい？

彼らは、自分自身にとっても、そしてそれを見る者
にとっても、ロンドンの通りを走る乗合馬車の御者
と同じくらい現実の存在なのだ。

現実と非現実——もし今私が、見知らぬ国の旅人
としての記録ではなく、論文を書いているのなら、
この現実と非現実について多くを語る事ができる
だろう。

この美しき存在は、私の宇宙に対する考え方その
ものを変えてしまった。私が再び地上に戻るとき、

これらの驚くべき体験をすべて覚えていられるだろうか。

おそらく多くの人と同じように、生まれる前の人生の詳細は忘れ、言い表せないものへのかすかな憧れと、世界の人々の哲学では想像もつかないほど多くのものが天地に存在するという、揺るぎない確信だけを携えていくのだろう。

もし少しだけ覚えていて、完全には思い出せないなら、私は次の人生で詩人になるかもしれない。それも悪くはない。

この再生という海に自分の小舟を乗り出すことは、なんと大きな冒険なのだろう！

しかし、こうして話がそれていく様子を見ると、私は第二の子ども時代に入ったようだ。そう、私は今

「見えざる世界」における第二の子ども時代を生き
ているのだ。

その夜、美しき存在と共に旅をし、目が疲れるほど
美を味わったあと、私の同行者は私を地上の光景
へと導いた。

それを一人で見えていたなら、きっと私はとても悲し
くなっていただろう。しかし、美しき存在がそばにい
ると、誰も悲しくなることはできない。それがこの不
思議な存在の魅力なのだ——そのそばにいただけ
で、不滅の生命の喜びを味わうことができる。

私たちは、地上でいうところの「悪徳の巣窟」と呼ば
れる場所での真夜中の宴を見た。

私は衝撃を受けただろうか？ 恐怖を感じただろう
か？ まったくそうではなかった。私はその人間たち

の振る舞いを、水滴の中の微小な生き物の動きを
観察する科学者のように見ていた。

すべてを星の視点から見ているように感じた。神の
視点、と言いかけたが、小さなものも大きなものも
同じように見る神の視点とは何か、私たちに本当に
分かるのだろうか。

むしろ星のたとえの方がふさわしいのかもしれない。
あるいは「私たちの中の神」という意味でなら、
話は別だが。

これを読んでいるあなたも、いつかこちらへ来たとき、
多くの驚きに出会うだろう。小さなものが大きく
見え、大きなものが小さく見え、すべてが無限の計画
の中で正しい位置を占めているように感じるか
もしれない。

その計画の中には、あなたの悩みや迷いさえも、必然であり美しい一部として含まれているのだ。

天界から地上へ、美から醜へと移りながら、この天使のような存在と共に歩く中で、その思いが私の中に生まれた。

この美しき存在の影響を説明できたらと思う。それは宇宙の中の何にも似ていない。

月光のようにとらえどころがないが、母親よりも思いやりに満ちている。バラよりも繊細でありながら、醜いものにも微笑みを向ける。

海の息よりも純粹でありながら、不純なものを嫌悪することがない。子どものように無邪気でありながら、古き神々よりも賢い。矛盾に満ちた驚異、天上の放浪者、見えざる世界に愛される存在である。

第四十二の手紙

存在しないものの犠牲者

先日、私は知り合いの一人に会った。その女性は長年の知人で、私とほぼ同じ時期にこちらへ来た人だった。

ここで昔の知り合いに会うと、たいてい地上にいた頃と同じように挨拶を交わす。私たちは一般的にあなた方より形式ぶらないが、それでも以前の習慣をある程度は引きずっている。

私はその夫人に、ここでの生活をどう楽しんでいるか尋ねた。すると彼女は、あまり楽しくないと言った。誰もが何か別のことに興味を持っていて、自分と話したがらないのだという。

私はこのような不満を聞いたのは初めてで、その奇妙さに驚いた。なぜそんなに人付き合いが悪いのかと尋ねると、彼女は原因は分からないが、不思議で仕方がないと答えた。

「どんな話をしているのですか？」と私は聞いた。

「まあ、自分の悩みを話しているのよ。友だち同士なら普通そうするでしょう？でも、みんなちっとも興味を示さないの。なんて自己中心的なのかしら！」

かわいそうな人だ！彼女はここでも地上と同じように、自分の悩みは自分以外には興味がないということに気づいていなかった。

「では」と私は言った。

「私に打ち明けてみてはどうです？あなたの悩みを

話してください。私は逃げませんよ。」

「まあ、どこから話せばいいのか分からないわ」と
彼女は答えた。

「本当に嫌なことばかりなの。」

「たとえば？」

「ひどい人たちよ。私が——に住んでいた頃、あの
世では下宿屋の女主人やだらしない女中に悩まされ
ることはないだろうと思っていたのに、ここでも
同じなの。むしろもっとひどいくらい。」

「ここで下宿屋に住んでいるというのですか？」

「じゃあ、どこに住めばいいの？私はお金持ちじゃ
ないでしょう。」

これまでこの変化に満ちた世界で聞いた中でも、これほど驚く話はなかった。

「見えざる世界」に下宿屋があるとは！自分の観察がいかに限られていたかを思い知らされた。

これはまったく新しい発見だった。

「その下宿の食事はいいのですか？」と私は聞いた。

「いいえ、この前のところよりひどいわ。」

「食事は量が少ないのですか？」

「少ないし、まずいの。特にコーヒーがひどいのよ。」

「お聞きしますが」と私はさらに驚きながら言った。

「本当にここでも、地上と同じように一日三食食べているのですか？」

「変なことを言うのね」と彼女はきつい口調で答えた。

「私はここが、あなたの言う地上とそれほど違うとは思わないわ。ただ、こっちの方が落ち着かなくて不安定で、居心地が悪いだけ。」

「そうですか、続けてください。」

「朝になっても、夜に誰が隣に座るのか分からないの。人が出入りして落ち着かないのよ。」

「それで、何を食べているのですか？」

「昔と同じものよ。肉とじゃがいも、それにパイやプディング。」

「それを今でも食べているのですか？」

「もちろんよ。あなたは違うの？」

私はどう答えてよいか分からなかった。

もしここでの私の本当の生活を話しても、彼女は理解できないだろう。それは、二年前に同じ町に住んでいた頃に私の内面的な生活を話しても理解できなかったのと同じことだ。そこで私はこう言った。

「私はあまり食欲がないのです。」

彼女は、なぜかは分からないが、私をどこか信用していないような目で見た。

「あなた、今でも哲学に興味があるの？」と彼女は尋ねた。

「ええ。おそらくそれで、あまり空腹を感じないのかもしれませんが。」

「あなたは昔から変わった人だったわね。」

「そうかもしれませんが。でも、奥さん——、こういうものを全部捨てててしまいたいと思うことはありませんか？」

「全部って、何を？」

「つまり、下宿屋とか、気の合わない人たちとか、肉

やじゃがいもやパイやプディング、それに物質的なものの影のようなものの全体のことです。」

「“物質的なものの影”って、どういう意味？」

「あなたが食べているそれらの料理や菓子は、本当のものではない、という意味です。実在していないのです。」

「まあ！」と彼女は叫んだ。

「あなた、クリスチャン・サイエンス信者にでもなったの？」

それを聞いて、私は思わず大笑いした。

霊的な世界での食べ物の現実性を否定する者が、物質世界での食べ物の現実性を否定するクリスチ

ャン・サイエンスと同じだと言われるとは、その類比がおかしくてたまらなかった。

「それなら、あなたをクリスチャン・サイエンスに改宗させましょうか」と私は言った。

「冗談じゃないわ！」と彼女はきっぱり言った。

「あなたは昔からいろいろな考えや哲学で私を説得しようとしたけれど、一度だって成功しなかったじゃない。それなのに今度は、私が食べているものは本物じゃないなんて言うのね。」

私はしばらく考えた。この女性に自分の状態の真実を理解させるにはどうすればいいか。

やがて、ふと方法を思いついた。

「あなたは、自分がただ夢を見ているだけだと分かっていますか？」と私は言った。

「何ですって！」と彼女は鋭く言い返した。

「そうです。あなたは夢を見ているのです。これらはすべて夢なのです——この下宿屋も何もかも。」

「それが本当なら、目を覚まさせてくれればいいじゃない。」

「もちろんそうしたいです。しかし、おそらく自分で目覚めるしかないでしょう。教えてください、こちらへ来る前、つまり以前、来世についてどんな考えを持っていましたか？」

「“こちらへ来る前”ってどういう意味？」

「つまり、亡くなる前のことです。」

「でも、私は死んでなんかいないわ！」

「もちろん、誰も死んでいません。ただ、あなたの状態が変わったことは分かっているはずです。」

「ええ、変わったのは分かるわ。でも悪い方にね。」

「最後に病気になったことは覚えていますか？」

「ええ。」

「そして、そこから抜け出したことは？」

「そう言うなら、そうかもしれないわ。」

「自分の身体を離れたということは分かっています

か？」

彼女は自分の姿を見下ろした。それはいつもと同じで、少し時代遅れの黒い服までそのままだった。

「でも、ちゃんと体はあるじゃない」と彼女は言った。

「では、前の体がなくなったことには気づいていないのですか？」

「いいえ。」

「それがどこにあるかも分からないのですか？」

私はますます驚いた。こんな現象にはこれまで出会ったことがなかった。

「たぶん」と彼女は言った。

「もしあなたの言う通りなら、あの体は埋められた
んでしょけど、今の体も私には同じに感じるの。」

「ずっと同じように感じていましたか？」と私は、自
分が最初にこちらへ来たときの経験を思い出しながら尋ねた。

新しい軽い体に合わせるのに苦労したことを思い出していた。

「そういえば」と彼女は言った。「一、二年前に少し
困ったことがあったのを思い出すわ。長い間とても
混乱していたの。たぶん、あのときは気が狂っていたのね。」

「ええ、おそらくそうでしょう」と私は答えた。

「ところで奥さん——、天国へ行きたいと思ったことはありませんか？」

「ええ、死んだら天国へ行くものだと思っていたわ。でも見ての通り、私は死んでいないの。」

「それでも」と私は言った。

「もし行きたいのなら、今からあなたを天国へ連れて行けるかもしれませんよ。」

「冗談でしょう？」

「いいえ、本気です。来ますか？」

「死なずにそこへ行けるって、本当に確かなの？」

「だから言っているでしょう、死んでいる者などいな

いのです。」

私たちはゆっくりと進んだ。

急に別の状態へ移すのはよくないと思ったからだ。
その道すがら、これから訪れる場所——いわゆる
正統的なキリスト教の天国——の様子を、言葉で
描いて聞かせた。

私は、中央の光から柔らかな輝きを受けながら、救
い主の前に立つ幸福で愛に満ちた人々のことを語
った。

「おそらく」と私は言った。

「そこに住む人々の中には、地上にいた頃に思い描
いていたように、神ご自身の御顔を見る者もいる
でしょう。私の場合は、光だけを見て、その後にキリ

ストの姿を見ました。」

「私はずっとキリストにお会いしたいと思っていたの」と同行の女性は畏れを含んだ声で言った。

「本当にお会いできると思う？」

「強く信じるなら、できると思います。」

「あなたがそこにいたとき、天国の人たちは何をしていたの？」と彼女は尋ねた。

「神を礼拝し、そして幸せにしていました。」

「私は幸せになりたいの」と彼女は言った。

「これまであまり幸せだったことがないの。」

「天国で大切なのは」と私は助言した。

「他の人すべてを愛することです。それが彼らを幸せにしているのです。もし神の御顔だけを愛しているのなら、それは完全な天国とは言えません。なぜなら神の喜びとは、結びつきの喜びだからです。」

こうして私は、少しずつ彼女の心を、霊界の下宿屋のようなイメージから、彼女が理解できるであろう唯一の霊的世界——正統的な天国の観念へと導いていった。

私は音楽についても語った。

そう、教会音楽と呼びたければそう呼んでよいものだ。私は彼女の混乱した心の中に、安息日の喜びと平和、そして天国における友との交わりへのはっきりした願いを生み出した。

このような段階的な準備がなければ、彼女はその世界の状態に適応することができなかつただろう。

私たちが、歌と賛美によって神を礼拝する人々の前に立ったとき、彼女は熱狂の波に包まれ、ついに自分が帰るべき場所に来たのだと感じたようだった。

私は彼女が再び私を探しに出てこないように、適切な形で別れを告げたかった。

そこで昔のように手を差し出し、さよならを言い、またここを訪ねると約束し、ここにとどまるよう勧めた。

おそらく彼女はそうするだろう。天国は、その美しさに身をゆだねた者を強く引きとめる力を持っているのだから。

第四十三の手紙

証人の雲

この世界の存在同士の違いが、地上の人々の違いよりもさらに大きいと知って、あなたは驚くだろうか？しかしそれは当然のことだ。なぜなら、この世界はあなたの世界よりもはるかに自由だからである。

もし私がここにいる悪しき存在について何も語らなければ、義務を果たしたことにはならないだろう。おそらく誰もそれをあなたに教えてくれないかもしれないが、この知識は自己防衛のために必要なのだ。

まず最初に言っておきたいのは、この世界の霊たちと、あなたの世界の霊たちとの間には強い共鳴があるということだ。そう、どちらも霊であり、その違

いは主として身にまとっているものの違いにすぎない。一方は肉体をまとい、もう一方はより微細ではあるが、同じように実在する身体をまとっている。

さて、善き霊——それが「完全にされた正しい人々の霊」であろうと、あるいはただ完全を志している者であろうと——彼らは、自分たちと調和する理想を持つ地上の霊たちに強く引き寄せられる。人間同士の間には存在する引力は、肉体を持つ存在と肉体を離れた存在との間に生じる引力に比べれば弱いものである。異なるもの同士が引き合うように、物質の違いそのものが引力となる。男性が女性に惹かれる以上に、肉体を持つ存在は霊的存在にとって魅力的なのである。

両者は通常お互いを理解しない。それは男女が互いを理解しないのと同じだ。しかし影響は確かに存在する。そしてこちらの存在はその源をあなた方よ

りもよく理解している。

なぜなら彼らは多くの場合、あなたの世界の記憶を持ち続けているのに対し、あなた方は彼らの世界の記憶を失っているからである。

人と霊との共鳴の力が最も強くなるのは、人が激しい感情にとらわれているとき——愛であれ憎しみであれ、怒りであれ、その他どんな興奮であれ——である。そのとき人の中の火の要素が最も活発になり、霊は火によって引き寄せられる。

(ここで文章は突然中断し、影響が去ったが、数分後に再び戻ってきた。)

なぜ私が一度離れたのか、不思議に思っているだろう。それは、これから語る内容がある霊たちが語らせたくないと思っているため、私たち二人の周り

に広い保護の円を描く必要があったからである。

では続けよう。人が興奮したり、高揚したり、あるいは感情的に強くなっているとき、霊たちはその人に近づく。これが受胎が可能となる仕組みであり、これがインスピレーションの秘密であり、怒りがそれを養うものによってさらに強くなる理由でもある。

そしてこの最後の点こそ、あなたにしっかり理解してほしいところである。あなたが怒りを爆発させるとき、あなたは多くのものを失う。その中には自己のコントロールも含まれる。そしてその瞬間、別の存在が一時的にあなたを支配することもあり得るのだ。

この主観的な世界は、私がそう呼んできたが、憎しみに満ちた霊であふれている。彼らは争いを引き起こすことを好み、この世界でも地上でもそれを楽し

しむ。他人の怒りの興奮を味わい、憎悪の毒に陶醉する。ある人々がモルヒネに溺れるように、彼らは不調和な情念のすべてに耽るのである。

この点と危険性が分かるだろうか。あなたの心にある小さな怒りの種を、彼らは自らの憎しみによって養い、燃え上がらせる。それは必ずしもあなた個人への憎しみではない。多くの場合、彼らはあなたに個人的な関心すら持っていない。しかし自らの邪悪な情念を満たすために、彼らは一時的にあなたに取りつくのである。他の例もいくらでも見つかるだろう。

怒りの癖がある人、あるいは他人の欠点を責める癖がある人は、必ず悪しき霊に取り囲まれる。私は一人の人間の周囲に十体以上の霊が集まり、その悪意ある磁力で彼を刺激し、落ち着こうとするたびに再び煽り立てるのを見たことがある。

時には単なる争いへの無関心な興味が、個人的なものへと変わることもある。こちらの怒れる霊が、ある人間に取りつくことで毎日のように怒りの興奮を味わえると気づくと、その人が怒り、荒れ狂うたびに刺激を得るようになる。これは人に起こりうる最も恐ろしい不幸の一つである。極端に至れば、憑依となり、ついには狂気に至ることさえある。

同じ法則は、色欲や貪欲といった他の醜い情念にも当てはまる。色欲には気をつけなさい。精神や心の要素を伴わない性的な引力には注意しなさい。私は、あなたの手を通して、他のどの手を通して書き記したくないようなものを見てきた。

代わりに、貪欲の例を挙げよう。私は金を数える守銭奴を見たことがある。そして、その金を彼を通して味わっている霊たちの恐ろしい目を見た。金は単

なる購買力や連想を超えた特別な影響力を持つ金属である。ある霊たちは、守銭奴と同じように金を愛し、同じように獲得しようとする、締め付けるような情念に取りつかれている。金が最も重い金属の一つであるように、その力も凝縮し、凝縮させる力なのである。

私はこれによって、あなたが金そのものを警戒すべきだと言っているのではない。使えるだけ手に入れなさい。金は有用なのだから。ただし、それを眺めてうっとりしてはならない。富の象徴——家や土地、株や債券、あるいは適度な現金——を所有しているだけで貪欲な霊を引き寄せるわけではない。しかし、硬貨をため込んでそれを眺めて楽しむようなことはしないほうがよい、と私は忠告する。

しかし、ある種の宝石は持っていることで助けになる。それらは力ある霊を引き寄せるからである。た

だしあなたはおそらく、自分との親和性によって宝石を選ぶだろうし、その選択は賢明なものになるかもしれない。

さて、避けるべき情念や情念に引き寄せられる霊について警告するという私の役目を果たしたので、今度は別の感情や、人に関わる別の霊的な仲間について話を進めよう。

あなたは、まるで太陽の光を放っているかのような人に出会ったことがあるだろう。その人が部屋にいただけで、なぜか自分も明るい気持ちになるような人に。その理由を考えたことがあるだろうか。真の答えはこうである。彼らはその愛らしい性質によって、人生の喜びや美しさを証しする「証人の雲」を自らの周りに引き寄せているのだ。

私自身も、地上にいるある愛に満ちた心の持ち主

の温かな光の中で、しばしばその恵みを浴びたことがある。その人の周りに集まる霊たちが、「ここにいるのは心地よい」と互いに語り合うのを聞いたこともある。あなたは、その人に何か悪いことが起こり得ると思うだろうか。もし危険が迫れば、愛と共感に満ちた多くの霊たちが警告しようと努めるだろう。

また、喜びに満ちた心は、喜ばしい出来事を引き寄せる。

さらに、素直さや穏やかな謙虚さもまた、やさしい肉体を離れた霊たちにとって非常に魅力的である。「あなたがたが幼子のようにならなければ、そこに入ることはできない」と言われるとおりである。

見えない遊び友だちと楽しそうに遊んでいる子どもを、あなたはよく見たことがあるのではないか。

あなたはそれを空想の友だちと呼ぶだろう。だが、それは空想かもしれないし、そうでないかもしれない。想像するということは、新たに創り出すことでもあり、すでに存在しているものを引き寄せることでもあるのだ。

私は「美しい存在」が、幸福な地上の人間の上に恍惚として漂っているのを、何度も見たことがある。

喜びの歌が心から湧き上がるとき、それは目に見えない多くの存在を引き寄せ、彼らもまた歌う者とともにそれを楽しむ。なぜなら、以前にも言ったように、音は一つの世界から別の世界へと伝わるからである。

決して泣いてはならない——ただし、失われたバランスを取り戻すためにどうしても必要な場合は別だ。泣く霊たちは比較的無害である。なぜなら彼ら

は弱いからだ。涙の嵐が過ぎ去るとき、それは魂の大気を澄ませることもある。しかし、泣いている最中は、その周囲は泣く霊たちで満ちている。もし地上の人があまり大きな悲しみの音を立てていなければ、エーテルの幕の向こうから彼らの涙が滴る音が聞こえるかもしれないほどである。

「笑えば世界も共に笑う」というのは確かに真実かもしれない。しかし、あなたが泣くとき、あなたは決して一人で泣いているのではない。

第四十四の手紙

内なる王国

私のはっきりさせておきたい、やや分かりにくい点の一つがある。たとえば、それによって「神秘主義だ」と非難されるとしても、である。神秘主義という言葉、単なる曖昧さとしてしか受け取らない人々からすれば、そう言われるかもしれない。

私はこれまで、人の生は主観的な側面と客観的な側面の両方を持つが、主としては客観的である、と述べてきた。また、より微細な物質の中に住む「霊たち」の生も同様に、主観と客観の両方を持つが、主としては主観的である、と述べた。

それにもかかわらず、私は天国へ行くことを、一人で、あるいは他の者とともに行く「場所」として語っ

てきた。この点を説明したい。あなたは「天の国はあなたがたの内にある」という言葉を覚えているだろう。これはすなわち主観的なものである。また、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」という言葉もある。

さて、この微細な領域において、私がキリスト教的な天国と呼んできた場所とは、二人、三人、あるいは場合によっては数千人が、その御名のもとに集い、自分たちの内にある天の国を味わう場所なのである。

魂が集まっているということ自体は客観的な出来事である。つまり、魂は時間と空間の中に存在している。しかし、彼らが味わっている天国は主観的なものである。もっとも、彼らは同時に同じものを見ることが出来る。たとえば、自分たちが救い主として崇める存在の姿を同時に見る、といったように。

私が説明できるのは、これが限界である。

第四十五の手紙

ごっこ遊びの世界

ある日、私はダブレットとホーズ(昔の服装)を身につけた男に出会った。彼は自分がシェイクスピアだと私に告げた。今では私はこうした名乗りにも慣れていて、六か月か八か月前のように驚くことはない。(そう、私はいまでもあなた方の「月」という単位で時間を数えている。私自身のある目的のためにだ。)

私はその男に、その驚くべき主張を裏付ける証拠を示せるのかと尋ねた。すると彼は、証拠など必要ないと答えた。

「それでは私には通用しない」と私は言った。

「私は元は弁護士だからね。」

すると彼は笑って、こう尋ねた。

「なぜあなたはその遊びに乗らなかったのですか？」

私はこの少しばかり無意味にも思える話をしているが、これはこの世界での私たちの生活に関する興味深い点を示しているからである。

以前の手紙で、私はここに来たばかりの女性に会った話を書いた。

その女性は、私がローマ風のトガを着ていたため、私をカエサルかもしれないと思った。

そして私は彼女に、ここでは皆が役者なのだと伝え

た。

つまり、子どもたちのように、私たちは自分の想像を満たしたり、過去の場面をもう一度体験したりしたいときに「なりきる」のだ。

この役割遊びは、たいていは無邪気なものである。しかし、それがあまりにも簡単にできるため、ときには欺こうとする誘惑を伴うこともある。特に地上の人々との関わりにおいてはそうである。

私が言いたい点が分かるだろう。交霊会などに入りする人々がしばしば不満を言う「嘘をつく霊」というのは、こうした霊界の役者たちのことなのだ。

彼らは自分の演技の巧みさに誇りさえ持つようになることがある。

だから、あなたの亡くなった祖父だと名乗る霊が、本当にその立派な人物その人であるとは限らない。それはただ、自分やあなたを楽しませるために役を演じているだけの存在かもしれない。

では、どう見分ければいいのか、とあなたは問うだろう。常に見分けられるとは限らない。しかし、最も確かな判断基準は、その存在が本物であるという、深く静かな確信だろう。

人の心には、恐れや偏見なくそれに従えば決して誤らない直感がある。世の中の多くのことにおいて、私たちはこの内なる声に逆らって行動し、その結果、欺かれ、道を誤ってきたではないか。

もし、ある見えない存在——あるいは見える存在であっても——が、自分の名乗っている通りの存在ではないと直感的に感じるなら、そのやり取りは

やめたほうがよい。

もしそれが本物で、何か重要なことを伝えたいのであれば、その存在は何度でも戻ってくるだろう。いわゆる「死者」は、生きている人々と交流したいと強く望むことが多いのだから。

とはいえ、こちらの世界での役者ごっこの多くは、だます意図のない無邪気なものである。ほとんどの人は、ときどき自分とは違う何かになりたいと思うものだ。

一晩だけ最高の服を着て、1 週間分の給料を使って大金持ち気分を味わう貧しい人は、私の話に出てきた男が自分をシェイクスピアだと言ったのと同じ衝動に動かされている。身の丈以上の服装を常にする女性もまた、自分自身や世間に対して同じ遊びをしているのだ。

この遊びは、すべての子どもが知っている。彼らは本気の口調で、自分はナポレオン・ボナパルトだとか、ジョージ・ワシントンだと言い、あなたがそれを笑えば傷つく。

私のシェイクスピア志望の友人は、地上にいたころはアマチュアの役者だったのかもしれない。もし彼がプロの役者だったなら、おそらく自分の本名(あまり知られていない名前)を名乗り、そのあとに自分は有名な誰それだと言っただろう。

こちらの世界では、特に来たばかりの者の間では、地上での業績に対する誇りが強く見られる。しかし、それは時間とともに薄れていく。そして長くここにいと、関心はもっと広いものへと移っていく。

人は、あなた方が「見えない世界」と呼ぶ境界を越

えたからといって、人間であることをやめるわけではない。

むしろ、制約が少ない分、人間的な性質は強まることさえある。ここでは、他人になりすますことに対して社会的な罰は存在しない。それは深刻に受け取られない。なぜなら、この世界のよりはっきりした視点から見れば、その変装はあまりにも見え透いているからである。

第四十六の手紙

ヘルメスの後継者たち

アストラルの領域で生き、働いているアデプトやマスターについては、多くの的を射た話と、少なからぬ的外れな話が語られている。さて、私は現在いわゆるアストラルの領域で生活し、ときにはそこで働いている。そしてこの領域について私が語ることは、理論ではなく経験に基づくものである。

私はアデプトに会った——そう、ここにはマスターたちがいる。その中でも特に一人は、私に多くのことを教え、最初から私の歩みを導いてくれた。

マスターの存在を信じることを恐れてはならない。マスターとは、人が到達し得る最高の力にまで高められた存在である。そして彼らは肉体を持ってい

ようといまいと、この領域で働いている。マスターは意志によって自由に出入りすることができる。

いや、彼らがどのようにそれを行うのかを、私は世に明かすつもりはない。マスターでない者がその方法を試みて、戻れなくなるかもしれないからだ。知識は力である。しかし、それに見合うだけの知恵を伴わずに実行すれば危険となる力もある。

すべての人間の中には、マスターとなる可能性がある。これは、普通を超えた強い生き方を求める男女にとって励みとなるはずだ。しかし、その境地に至るには、着実に、たいていはゆっくりとした成長が必要である。

ここでの私の師は、マスターである。

ここには、マスターではない教師もいる。地上にも

教授ではない教師がいるのと同じだ。しかし、自分の知っていることを教えようとする者は、正しい道の上にいる。

私が世に対して、この死と呼ばれる変化の後の生について何かを伝えようとしていることを、私の師が認めているということは言ってもよいだろう。もし彼が反対したなら、私はそのより高い知恵に従っていただろう。

彼の名前が何であるかは重要ではない。私はただ「師」として言及し、彼が語ったこと、行ったことをいくつもあなたに伝えてきた。他にも伝えていないことは多い。

なぜなら、今では私は時々しか来ることができないからだ。やがて私は、おそらく完全に来なくなるだろう。

それはあなたへの関心を失うからではない。むしろ、地上からさらに離れ、より深い理解のために必要な学びをするための流れのように思われる。

後になって、再び戻ることがあるかもしれない——二度目として。しかし、約束はしない。来られるなら来るし、それが賢明であり、あなたが受け入れられる状態にあるなら来る。

私は他の誰かを通して現れることはないだろう——少なくとも、このような手紙を書く形では。もしそうするなら、あなたにしたのと同じ訓練をその人にも施さなければならないだろう。そして、たとえ私の友人や知人であっても、それほどまでに私を信頼する者はほとんどいない。だから、私がいなくなった後も、扉を完全に閉ざさないでほしい。もし再び来たいと思ったとき、何か非常に重要なことを伝え

たくなるかもしれないからだ。

しかしその一方で、どうか私を呼び出すことは控えてほしい。あなたが呼べば、私はどこかで行っている重要な仕事や学びから引き戻されてしまうかもしれない。必ずそうなるとは言わないが、その可能性はある。そして私は、自分の意思で地上から離れるとき、戻る準備ができるまでは引き戻されたくないのだ。

地上にいる人が、遠く離れたところにいる亡き友に対してあまりにも強く呼びかけると、その魂はその強い呼び声に応じて、まだ早すぎる時に戻ってしまうことがある。

亡き人を忘れてはならない——ただし、彼らがあなたの思いなしでも幸せでいられるほど強いのであれば別だ。しかし、彼らに頼りすぎてもいけない。

先ほど述べたマスターたちは、自分の意思で近くに留まることも、遠くにいることもできるし、呼びかけに応じることも応じないこともできる。しかし普通の魂は、地上で愛した者の呼びかけにとっても敏感である。

私は、子どもの涙ながらの祈りに応えて駆けつける母親の魂を見たことがある。しかしその母親は、自分の存在を子どもに気づかせることができなかった。ときに母親たちは、自分の存在を感じてもらえないことに深く悲しむ。

あるとき、私の師がその力によって、苦しんでいる娘に対して母親の姿を見せ、声を届けるのを助けたのを見たことがある。私の師の心は、世界の苦しみに対して非常に優しい。彼自身は自分をキリストの一人とは言わないが、その働きはしばしばキリス

トの働きに似ている。また別の時には、彼は純粹に知性そのもののようでもある。彼は「三重に偉大なる者」ヘルメス・トリスメギストスの言葉を体現している——すなわち、身体において偉大であり、知において偉大であり、心において偉大である、という言葉。

私は自分の師についてもっと多くをあなたに語りたいのだが、彼は地上であまり知られすぎることを望んでいない。彼はただ仕事そのもののために働いており、報酬や称賛のためではない。

彼は子どもがとても好きで、ある日、私が地上のある友人の家に姿を見せずに座っていたとき、その家の小さな息子が転んでけがをし、激しく泣き出したことがあった。そのとき、私がかつて文字通り「無数の天使の軍勢」に命じるのを見たことのある偉大な師が、そのときまっていた微細な姿のまま身を

かがめ、その子どもをなだめ、慰めたのである。

あとで私はそのことについて師に尋ねた。すると彼は、かつて別の土地で何度も子どもとして生きたことを覚えており、肉体の痛みの刺すような感覚や、転んだときの衝撃を、今でも記憶として感じ取ることができるのだと言った。

また彼は、子どもは大人が思っている以上に苦しんでいるのだとも言った。新しくて弱く、成長途中の身体に少しずつ慣れていく過程で感じる戸惑いが、しばしば強い苦しみの原因になるのだという。

さらに、小さな赤ん坊が絶えず泣くのは、自分の前にある巨大な仕事——自分の霊が働くための身体を形作するという仕事——に対する、半ばの落胆によるものだと言った。

そして彼は、マスターになる以前の、ある過去の人生の話をしてくれた。そのとき彼は、身体を作り上げることにどれほど苦しい努力を要したかを語った。彼はその遠い人生の細かな出来事まで覚えていた。ある日、彼の母親は、実際にはしていないことのために彼を罰した。彼がその行為を否定すると、母親は彼を嘘つきだと叱った——善良な女性ではあったが、自分が形を与えたその魂の本質的な真実を理解していなかったのである。

師は、その幼い頃の経験が、何世紀も前から続く「不正に対する本当の闘い」の始まりだったと言った。そしてそれが、人類の友であり教師となるための成長を助けたのだと。

それから彼は、私たちが過去の人生の記憶を取り戻すことの重要性について語った。それによって、自分の魂がどのような道をたどってきたのかを見る

ことができるのだと。

一般に、偉大な教師たちは自分の過去について多くを語らない。それを語るのは、自らの経験の中のある点が、ある原理を示し、それによって他の者がその原理を理解できるように助けるときに限られる。高みに到達した者が、自分と同じ試練を通過してきたのだと知ることは、手探りで進む魂にとって大きな励ましとなるのである。

第四十七の手紙

ただ一つの歌

もう一つ、あの驚くべき天使——私たちが「美しい存在」と呼んでいるあの存在の歌、あるいは詠唱、あるいはあなたの好きな呼び方で呼んでよいが——それを聞いてみたいだろうか。

なぜあなたは私に問いかけることを恐れるのか。私は偉大なる答え手である。

たとえ私の答えがしばしば象徴であっても、言葉そのものもまた象徴にすぎない。

私はしばらくの間あなたのもとを訪れていなかった。なぜなら、私がそばにいるとき、あなたは他のことを何も考えられなくなるからだ。そして、あなたが

歩んでいる道をすでに歩んだ人々について考えることも大切なのだ。

あなたは他の人の歩みを手本にすることはできるが、私の歩みをそのまま手本にすることはほとんどできない。

私は闇の中の光である——私の名を知る必要はない。

名前とは制限であり、私は制限されることを拒む。

天使たちの古い時代において、私は自分自身が創り出した形の中に入ることを拒んだ——ただ遊ぶときだけは別だったが。

これは、もし望むならあなたへのヒントである。

自分の創り出したものに縛られる者は奴隷となる。
それが私と人間との違いの一つである。

どんな地上の父が、自分の子どもから逃れることができるだろうか。どんな母がそれを望むだろうか。

しかし私は——私はバラを咲かせることができる。
そしてそれを他の者に任せて楽しませることができる。

私の喜びは創ることの中にあった。花びらが散るまでバラのそばにとどまることは、私にとっては退屈なのだ。

過去の作品を忘れることのできる芸術家こそ、より大きく、より偉大なものを創り続けることができる。

喜びは行うことの中にある。すでに成し遂げたもの

にしがみつくことの中にはない。

ああ、手放すことの魔法よ！それは神々の魔法である。

私は自らを現した人間の種族もいる。彼らは私を崇める。

しかし、あなたは私を崇める必要はない。私は崇拝を必要としない。

もし私が、自分の美しさに触れた魂から何かを必要とするなら、それは自分自身の創造物に自らを縛ることになるからだ。

ああ、手放すことの魔法よ！では、握りしめることの魔法はどうか。

そう、物事が完成し、完全になるまでそれを握り続けることにも魔法はある。

しかし、ひとたびそれが完成したなら——それが詩であれ、愛であれ、子どもであれ——それを手放しなさい。

そうすれば、あなたは再び自由になり、新たなものを始めることができる。それが永遠の若さの秘密である。

決して後悔して振り返ってはならない。振り返るなら、ただそこから学ぶためだけにしなさい。

常に前を見なさい。人が前を見なくなったとき、彼は老い始める。彼はそこで止まってしまう。

私は「今この瞬間に生きよ」と言ったが、それは別

の側面から同じことを言っているのだ。

現在と未来は遊び友だちである。過去を研究しているとき、私たちは遊んでいるのではない。

私は人間にとっての偉大なる遊び友だちである。

第四十八の手紙

クリスマスに贈られる見えない贈り物

あなたにメリークリスマスを伝えるのに、まだ遅くはない。

なぜ私に今日がクリスマスだと分かるのか？それは、かつてよく訪れていた家々をのぞいてみて、飾りや贈り物でいっぱいの木を見たからだ。

私にそれが見えることを不思議に思うだろうか。もしそうなら、私たちが自分自身の光で周囲を照らしていることを忘れている。見方を知っていれば、私たちは覆いの向こう側を見ることができるのだ。

こちら側に来て、これは私にとって初めてのクリスマスである。あなたが身につけたり部屋に飾ったり

できるような物質的な贈り物を送ることはできないが、この季節の良き願いを送ることはできる。

幼い子どもをこの世に残してきた母親たちは、クリスマスが近づくとよく分かる。彼女たちはときに見えない贈り物を持ってくる。それは、この世界の微細な物質から、自分の想像力と愛の力によって形作ったものだ。ある祖母は、昨夜——クリスマス・イブの夜ずっと——愛する者たちの周りに花をまき散らしていた。その香りは地上の空気にまで届いていたに違いない。

突然、理由も分からず甘い香りを感じたことはないだろうか。もしあるなら、それはあなたを愛していた誰かが、見えない花をまいていたのかかもしれない。愛は死よりも強い。

あなたが知っているもう一人の人も、まもなくこち

らへ来るだろう。あなたの信念によってその人を支えてあげなさい。

クリスマスを祝う習慣は良いものである。ただし、その日の本当の意味を忘れなければ、だが。ある人にとってそれは、謙虚さと愛の精神がこの世に生まれたことを意味する。しかし、愛と謙虚さはナザレのイエスが現れる以前にもこの世を訪れていたが、ユダヤの地においてほど強く現れたことは、それ以前にもそれ以後にもなかった。ベツレヘムの馬小屋が物理的な現実であったか、それとも象徴であったかは問題ではない。

私はキリストの天に行ったことがあり、その美しさを知っている。「わたしの父の家には、多くの住まいがある。」

私のような旅人が、特定の天へ行こうとするなら、

まずその天を楽しんでいる魂たちが感じているものを自分の内に感じなければならない。そうして初めて、その中に入り、彼らと交わることができる。ただの見物人として行くことは決してできない。そのため、私は通常、地獄には近づかないようにしてきたが、天にはしばしば訪れている。

そして私は、ローマ・カトリックのいう煉獄にも行ったことがある。亡くなった魂の安らぎのためにミサを捧げる人々を嘲ってはならない。

魂はそうした思いやりを感じ取ることが多い。彼らは音楽を聞き、香を感じることもある。そして何よりも、自分に向けられた思いの力を感じるのである。煉獄は実在する——それが実際の体験であるという意味において。もしそれを夢と呼びたいならそう呼んでもよい。しかし夢というものは、ときに恐ろしいほど現実的なのだ。

煉獄を信じていない者でさえ、新しい状態に慣れるまでのあいだ、しばらくは悲しみの中をさまようことがある。

もし彼らに「あなたは煉獄にいる」と言えば、それを否定するかもしれない。しかし、自分が不快な状態にあることは認めるだろう。

その苦しい移行の時期を避ける最も確かな方法は、不死を完全に信じ、魂が自らの状態を創り出す力を持っていることを完全に信じて、あの世へ入ることである。

第四十九の手紙

(題名は本文に明示されていないため、そのまま本文を訳します)

昨夜、地上のさまざまな場所を訪れたあと、私はキリスト教の最も高い天の一つへ行った。おそらく、ほかのどの時でも、これほど容易には行けなかっただろう。というのも、そのとき私の心はすべての人への愛で満たされ、私の思いはキリストの理念で満ちていたからである。

私はこれまで何度も「人々の救い主」と呼ばれる方を見てきたが、昨夜はそのすべての美しさの中にあるその方を見た。その方もまた、しばしの間、この世界へ降りてこられていた。

これをあなたに理解してもらえるだろうか。キリスト

の愛は常にこの世界に存在している。

なぜなら、その愛を灯し続ける心が常にあるからである。もし「救い主としてのキリスト」という考えがこの世界で薄れてしまうことがあれば、その方はおそらく再びここへ戻り、人の心にその炎を再び灯すだろう。

しかし、統計を書く人々が何と言おうとも、その考えは今ほど現実的であったことはない。ただ、以前のほうが多く語られていたのかもしれない。

世の中は、ある人々が思っているほど悪い状態ではない。精神的な理念が強く復興することがあっても、驚いてはならない。すべてのものにはリズムがあるのだ。

昨夜、私は大きな教会に立っていた。そこでは何百

人ものキリスト教徒がイエスを礼拝してひざまずいていた。地上にいたころ、私はクリスマス・イブの教会に立ったことがある。

しかし昨夜は、それまで一度も見たことのないものを見た。確かに、二人でも三人でも、どの預言者の名において集まるならば、その人は彼らの中にいる。必ずしも霊的な身体としてではなくても、その共感の香りとして存在しているのだ。

キリスト教の天にいる存在たちは、地上でクリスマスが祝われていることを知っている。

ナザレのイエスは実在である。ガリラヤに住んでいたイエスとしての霊的な存在として、彼は空間と時間の中に存在している。そしてキリストとして——霊的な人間の原型として——自らの内にその理念を呼び覚ましたすべての男女の心の中に存在して

いる。彼は多くの水面に映る光なのである。

私は先日、達人やマスターについて書いた。イエスは最も偉大なマスターの一つの型である。彼はすべての天において尊敬されている。

彼は法則を理解し、それを実際に生きることをあえて行い、それを体現した。そして「父と私は一つである」と言ったとき、他の人々が自分自身の中でマスターとしての境地を実現する道を示したのである。

人類は長い道のりの中で多くのマスターを生み出してきた。では、人類が自らを正当化してきたことを、誰が否定できるだろうか。人生の目的は何かと問う者がいれば、それはまさに「人間からマスターへと進化すること」であると答えなさい。

永遠は長い。十分な力を持つそれぞれの存在にとって、その目標は前方にある。そして導くことができない者も、仕えることはできる。

この考えは昨夜、私に強く迫ってきた。私は、大多数の中のすべての存在が個々にマスターへと進化するだけの力を持っているとまでは言わない。しかし、どんなに弱い存在でも、人間からマスターを生み出すという偉大な働きの中で、たとえどんなに小さくても役割を持つことはできる。仕えることは甘美であり、そこにも報いがある。

進化の問題に取り組む多くの人々が犯す大きな誤りは、「永遠は永遠であり、不死であるとは始まりも終わりもないことである」という事実を理解していないことにある。この人生でなくとも、次の周期で成長するだけの時間は十分にある。リズムは確実だからである。

もし私が見ているように、不死という考えをあなたに理解させることができたならどんなに良いだろう。私はここへ来て、自分の過去の糸を拾い集め始めるまで、それを完全には理解していなかった。

理性では自分が不死だと分かっていたが、不死が何を意味するのかは知らなかった。あなたは分かっているだろうか。

私は一人の天使を知っている。その存在は、おそらく多くの預言者以上に、この不死の考えを世界に灯し続けることに貢献してきた。その「美しい存在」と呼ぶ者に出会うまでは、私は不死の歓喜を存分に味わったことがなかった。不死を子どもがビー玉で遊ぶように扱う存在がいるのだ。

その存在が「私は在る」と言うとき、あなたもまた自

分が在ることを知る。その存在が「私は世紀を、子どもがデイジーの花びらをちぎるように摘み取り、そして種を持つ中心を投げ捨てて、さらに多くの世紀を生むデイジーを育てる」と言うとき、その終わりのなき生命への喜びがあなたに何を感じさせるかは、言葉では表せない。

そのとき、あなたはかつて自分だと思っていた肉と骨の存在を忘れる。意識ある不死のかけらが、自らの存在の中で歓喜するからである。

その存在があなたを「空のクローバーの野原」と呼ぶ場所へ連れていくとき、あなたは自分が永遠のすべての財産の共同相続人であることを確信する。

その美しい存在は、キリスト教徒のキリストをよく知っている。おそらく、その存在は、肉体を持つ者

も持たない者も含め、すべての偉大なマスターを知っているのだろう。彼らは皆、何らかの形で、少なくとも本質として、不死を教えてきた。

昨夜、その存在は私とともにキリスト教徒の最も高い天へ行った。もし私がそこで見たすべてを語れば、あなたは急いでそこへ行って自分で見ようとするかもしれない。しかし、あなたはまだ長い間、地上を離れてはならない。肉体の中にいながら不死を理解し、他の人にもそれを理解させなければならない。

私は、ただ善良な人々が行く小さな天については話したことがある。しかし、神を情熱的に愛する者たちは、言葉では表現できないほどの深い観想と恍惚の高みへ到達する。その美しい存在がそばにいて、昨夜私はその恍惚を感じた——あなたが眠りの中に閉じ込められていたその時に。

次のクリスマス・イブに、私はどこにいたろうか。
私は宇宙のどこかにいたろう。なぜなら、私たちは
どんなに試みても宇宙の外に出ることはできな
いからだ。そして宇宙もまた、私たちなしでは成り
立たない。不完全になってしまう。その考えを、新し
い年の中に携えていきなさい。

第四十九の手紙

より大いなる夢の世界

しばらくあなたのもとへ行っていなかったが、それはある実験をしていたからである。

この世界に来て以来、私はしばしば、主観的な喜びの状態——言葉を使うなら夢の状態——にある男女を見てきた。そのため、私もまた自分の内面とともに、同じような状態で数日を過ごしてみたいと、長いあいだ望んでいた。ただし、あまり長く夢に沈んでしまい、あなたや私自身の大切な時間を失ってしまうのではないかと恐れて、ためらっていたのである。

しかしある日、私が「自分の内なる脳の中にある、より大きな夢の世界を訪れたい」という願いと、「目

覚めるのが遅くなるかもしれない」という不安を先生に話すと、もし自分で目覚められなかった場合には、ちょうど地上の時間で七日後に来て起こしてくれると約束してくれた。

「というのも」と先生は言った。「人は自分の脳の中に目覚まし時計をセットすることができ、それは必ず正確に働くからだ。」

これは以前の経験から私も知っていたが、この霊的な眠りは普通の地上の眠りよりも深いのではないかと、そして目覚ましが決まった時刻に鳴らないのではないかと恐れていたのである。

霊たちが戻ってきて友人たちと交信するとき、天上の生活についてほとんど語らないということについて、あなたもそうであるように、私も多くの意見を聞いてきた。その理由はおそらく、自分たちの存在

があまりにも地上のものと異なっているため、それを説明しても理解されないと絶望してしまうからだと思う。

さて、多くの魂は、こちらに来てしばらくすると、私が長いあいだ体験したいと思っていたような、空想や夢の状態に入る。

ある魂はときどき目覚めて、地上の出来事や人々に多少の関心を示すが、もし眠りが深く、また地上のものを手放したいと望むならば、その無意識的な状態は何年も、あるいは何世紀にもわたって途切れずに続くことがある。

しかし、何世紀も眠り続けられるような魂は、おそらく人間の本来の長いリズムに従って生きている魂であろう。

だから私は、その深い眠りに入るとき、自分自身に「長くとどまりすぎないように」という一種の暗示をかけてから入ったのである。

ああ、それは実にすばらしかった——自分の内にあるその夢の国は！神智学の人々なら、私はデヴァチャンの至福の中で休息したと言うかもしれない。呼び方はどうでもよい。それは記憶に値する体験であった。

私は目を閉じ、内へ——内へ——思考よりもさらに深いところへと入っていった。そこでは、人生の絶え間ない波は静まり、魂は自分自身と向き合い、自分の過去のあらゆる驚異と対面する。そこには美しさしか存在しない。その夢を持ち帰ることができるなら——私がそうしたように——そこに滞在することは比べようもない冒険となる。

私は楽しむために入り、実際に楽しんだ。そこでは、私がこれまで愛してきたすべての人の姿が再現されていた。彼らは私に微笑み、私は彼らの神秘、そしてなぜ私たちが引き寄せられたのかを理解した。

また、かつての自分の野心の夢も再び見出し、地上でのすべての努力の成果を味わった。魂の内なる世界はバラ色の世界であり、心の願いは必ずそこに見出される。

だからこそ、地上の激しい生活がしばしば苦しみと労苦であるのも不思議ではない。その後続く夢の生活があまりにも美しいため、バランスが保たれなければならないのだ。

休息！あなたがた地上の人間は、その意味を知らない。私はわずか七日しか休まなかったが、これほ

どまでに回復したので、もし征服すべき別の世界がなかったなら、再び地上に戻る勇気さえほとんど持てたほどである。

休息をおろそかにしてはならない——今も太陽の下で労苦の生活を送っているあなたよ。真の休息を一時間でも多く取るごとに、働く力は増していく。恐れる必要はない。

横になって夢を見るとき、時間を無駄にしているのではない。前にも言ったように、永遠は長いのだ。周期の道に点在する宿には、休息のための十分な場所がある。

もし長い、デヴァチャンのような休息を取りたいと思うなら——取ればよい。必要だと思うなら、地上にいる間でさえそうしなさい。いつも何かを掘り続けるように働き続けてはいけない。文学でさえ例外

ではない。外に出てリスと遊ぶか、暖炉のそばに横になって家の猫と一緒に夢を見なさい。炉辺でうたた寝を楽しむ猫も、その気になればネズミを捕まえることを楽しむ。常に狩りをしていることはできない。それはあなたも同じである。

いつかデヴァチャンにひとたび浸ってみなさい。そこから出てきたとき、どれほどすっきりするか分かるだろう。

もっとも、「デヴァチャン」という言葉の使い方は正確でないかもしれない。というのも、私は神智学の教えについてそれほど深く学んだわけではないからである。

ニルヴァーナさえ、非常に激しい運動の状態として説明されることがある。あまりにも速く動くために、まるで静止しているように見える——独楽やハチド

りの羽のように。しかしニルヴァーナは、すべての人にとってのものではない——少なくとも今はまだ。

私はこの七日間の至福の休息の驚異についてほのめかしてきたが、それを詳しく描写することはしていない。どうしてできようか。かつてある偉大な詩人が、言葉で表現できない思いや感情は存在しないと行った。しかし、その人もこちらに来て六十年も経てば、考えを変えているかもしれない。

休みに入るとき、私は自分の魂に、すべての夢を持ち帰るよう命じた。もちろん、いくつかが逃げてしまったかどうかは分からない。

それは、あなたが目覚めたとき、夜の深い体験を忘れたかどうか分からないのと同じである。しかし、このいわゆるアストラルの世界の通常の状態に戻ったとき、私はまるで不思議な旅から帰ってきた探検

家のように感じた——語るべき驚きの話を持って。

だが私はそれを語らなかった。それらの夢や幻を、誰に語ればよいのか。たとえ「肉体を持たない」仲間に対してでも、退屈な存在にはなりたくなかった。もしリオネルがここにいたなら、私は長い時間、物語で彼を楽しませることができただろう。しかし彼は、今のところ私のもとにはいない。

ところで、彼はほとんど、あるいは全くデヴァチャン的な休息を取っていないように思える。それは、こちらに来たときあまりにも幼く、通常のリズムを使い果たしていなかったからだろうか。

おそらくそうだろう。もし彼がこちらにとどまり成長していたなら、彼もまた、より深い内面の世界を求めたかもしれない。しかし私は推測はしない。これは推測ではなく、経験の記録だからである。あなた

も、価値があると思うなら、いくらでも推測できるだろう。

私は自分自身の夢の世界の中で、ある美しい——本当に美しい顔を見つけた。いや、それについては話さない。それは私の小さな秘密である。もちろん多くの顔を見たが、その中で一つだけ、他のすべてよりも美しい顔があった。それは「美しい存在」の顔ではなかった。

「美しい存在」には、私は目覚めているときに会う。眠りの中では、その実体ではなく、その似姿だけを見たのである。より深い夢の世界では、私たちは自分の脳の中にあるものしか見ない。そこには物そのものは存在せず、あるのは物の記憶と、それを思い描く想像だけである。

想像力はこの世界でも、あなたの世界でも創造す

る。それは実際に微細な物質を形作る。しかし、このより大きな夢の世界では、私たちは物質として形作ることはしないのではないかと思う。それは光と影の映像の世界であり、あまりにも繊細で、言葉では表現できない。

この体験以前にも、私は自分の過去の記憶の中に入ったことがあった。しかしそれを存分に味わったことはなく、光と影を自在に操るほどに自分を解放したこともなかった。

だが、ああ、どう言えればいいのか。言葉では表せない。あなた自身が言ったように、バラの香りを説明できるだろうか。口づけの感触を言葉にできるだろうか。恐怖という感情を、一度もそれを経験したことのない者に説明できるだろうか。同じように、霊的な夢の過程を説明することはできないのである。

まだ肉体を持っている間に、思いのままに空想し、
記憶の中で楽しみなさい。

それでもなお、あなたが体験するのは、私があの七日間で味わったものの影のさらに影にすぎないだろう。実在の夢の反映の、そのまた反映にすぎない。「反映の反映」——私はこの言葉が気に入っている。直接ではないが、はっきりした像を思わせるからだ。

だから夢を見てみなさい、地上にいながらでも。そしてもしかすると、霊的な夢の世界の喜びの「反映の反映」を、少しは感じることもできるかもしれない。

第五十の手紙

説教と約束

ここ数か月、数日おきにあなたのもとへ来て、あなたを楽しませるためにいくつかの話をしてきたが、今度は説教をしてもよいだろうか。長くはならないと約束しよう。

あなたは、教会の尖塔が天の青空を突き刺している国に住んでいる。

それは雲の高さから見れば、侵攻する軍の掲げた槍のように見える——実際、その意図もまたそうなのだ。だから、あなたには説教を聞く習慣があるはずである。

普通の説教は、たいてい助言で成り立っているが、

私のものもその点では変わらない。私はあなたに、そしてあなたが私の助言を聞かせることができるできるだけ多くの人々に、助言したいのである。

助言を与える者として、私がそれにふさわしい特別な機会を与えられてきたことは認めてくれるだろう。

あなたが生きる助けとなるように、私は地上の人々が引き起こした原因の結果を観察してきた、真面目で思慮深い——たとえ不完全であっても——観察者の視点を示したい。

原因と結果は反対でありながら等しいと言われている。それはその通りだ。ではここ数か月の間に私の心に浮かんだ、その公理のいくつかの例にあなたの注意を向けたい。もし以前に言ったことを繰り返すことがあっても、それは大した問題ではない。

あなたがそれを忘れていたか、あるいは死の向こう側の人生への準備という観点から、その意味を見落としていたかもしれないからである。「死の淵」という表現は使い古された比喩だが、私は詩ではなく説教を書いているのだから、説教壇にはこうした言い回しが期待されるのだ。

説教者たちは、数週間ごとにあなたに「いつか必ず死ぬ」と思い出させる。あなたはそれを本当に理解しているだろうか。

明日か、五十年後か、いつでも突然、あなたが慣れ親しんできたその身体の結びつきから外に出てしまうかもしれないという事実を、あなたの意識は本当に受け入れているだろうか。

そして、あなたがそのまま、ひとりであるか、あるい

は誰かとともに、非常に軽くて繊細で、最初は扱いにくい身体を持った状態で、同じ部屋にいる友人や家族を見ながらも、確実に意思を伝える力もない状態にいることになるかもしれないのだ。

まだそれを実感していないのか。ならば、それを自分の意識の中に刻み込みなさい。脳の両半球でそれをつかみなさい。心の鉤爪でしっかりとつかみなさい。あなたはいつか必ず死ぬのである。

ああ、驚かないでほしい。私はあなた個人が明日や来年に死ぬと言っているのではない。しかし、いつか必ず死ぬのだ。そして時折それを思い出すならば、そのときが来たときの衝撃は和らぐだろう。

死について思い悩み続けてはならない。そんな病的な意味で言っているのではない。しかし備えよ。あなたは家族のために生命保険をかけるが、自分

自身の心の平安のための備えは何もしていない。

これを常に覚えておきなさい。あなたが死後のためにどれほど細かい指示を残したとしても、もしあなたが地上を振り返ることができたなら、誰かがそれをうまくやっていないことに気づくだろう。

だから最初からそれを当然のこととして受け入れ、「それがどうした」と言えるようになりなさい。

過去は過去であり、あなたにとって可能性があるのは未来だけだと感じなさい。

そして、捨て去った地上の事柄の管理は他人に任せるほうが、自分の心の平安にとって良いのだと理解しなさい。手放す準備をしなさい。これが私の第一の要点である。

新しい世界へ行くとき、片方の目だけを天の領域に向け、もう片方の目を地上の像に向けたままにしてはならない。それでは前へ進めない。手放しなさい。できるだけ早くこの世界から離れなさい。

これは冷たい助言のように聞こえるかもしれない。確かに、高い領域から見守る賢い存在は、微妙な思念の働きかけによって地上の人々に良い影響を与えることができる。

しかし、そのようなことをしたがつている存在は常に何千という。あなたの頭上の天は、地上のことに関わりたいと願う魂で満ちている。

彼らは手放すことができず、他人のことを管理する習慣にとらわれている。それはタバコやアヘンと同じくらい魅力的で中毒性がある。どうか私を冷酷だとは思わないでほしい。私は率直に話しているだ

けであり、あなた方地上の人々を愛している。もし傷つけるなら、それはあなたのためである。

さて、次に非常に重要で興味深い点である。できるなら、肉体にあったときに犯した罪のことは忘れなさい。

原因の結果から逃れることはできない。しかし罪との結びつきを強めず、自分は罪人であるという観念で自己暗示をかけたまま再び地上へ戻ることを避けることはできる。

罪について思い悩み続けてはならない。

確かに、それについて考え続け、やがて嫌悪することでその衝動を消耗させることもできる。しかしそれは遅く、不快な方法である。忘れるという近道のほうがよい。

さて、これから一つの考えを述べたい。それは非常に表現が難しい。というのも、多くの人にとってまったく新しいものだからである。その考えとはこうだ——創造的な想像力の力は、肉体を持っている人間のほうが、肉体を脱いだ人間(霊)よりも強い、ということである。

もっとも、多くの人はその力の使い方を知らない。

実際、使えていない。

私が言いたいのは、彼らにはその力を使うことができるという点である。

物質的な身体は抵抗を持つ基盤であり、強力な、てこのようなものである。

そこから意志は、想像によって呼び出されたものを外へと投射することができる。これこそが、マスターたちが肉体を保ち続ける本当の理由であると私は考える。

私たちの世界のような微細な物質に包まれた訓練された心は、粗い物質に包まれた未熟な心よりも強い。しかし、いまだ肉体をまとっているマスターたちは、無数の天使を従えることができる。

彼らは、この世界において創造的想像力によって自由に形を作り出すと言われているが、彼らが扱う物質がいかに微細で扱いやすいものであるかを忘れてはならない。

さて、これを前提として次のことを断言する。地上にいるあなたがたが、自分の来世をどのように思い描くかによって、それはそのようになる。ただし、そ

れはあなたの意志の強さと、それを支える力、そして微細な物質があなたの与えた形に従う可能性によって制限されるが、その可能性はほとんど無限である。

死後に進歩しようと意志すれば、あなたは進歩する。学ぼうと意志すれば、あなたは学ぶ。しばらくして地上に戻り、特定の仕事を成し遂げようと意志すれば、あなたは戻り、その仕事を引き受けることになる。

カルマは確かに厳格な法則である。しかし、あなた自身がそのカルマの創造者なのだ。

何よりも重要なのは、無意識や消滅を期待してはならないということである。それは要求することと同じである。あなたという力の単位を消し去ることはできないが、自己暗示によってそれを何世紀に

もわたって眠らせることはできる。

人生を終えるとき、意識を保つという決意を持っていれば、あなたはそれを保つことができる。

ある思想ではデヴァチャンと呼ばれる休息の状態に入る時が来れば、あなたはそこに入るだろう。しかし、その時は人生を終えてすぐではない。

最終的にその状態に達したとき、あなたは当然のこととして、夢の中で過去の地上の人生を再び体験し、その経験を自分の中に取り込むだろう。しかしその頃には、あなたは自分が残してきた人々の人生に、霊として関わりたいという欲望を手放しているはずである。

まだ地上にいる間に、死者の霊を呼び出してはならない。彼らは他の場所で忙しくしているかもしれ

ないし、あなたが十分に強ければ、彼らをその仕事から無理に引き離してしまうこともあり得る。

私のために書いているあなたに感謝したい。あなたは決して私を呼び出そうとしなかった。いつも私が自分の時に来るのを許し、質問や意見で私の思考を乱すことなく、私の言いたいことをそのまま語らせてくれた。

地上にいるあなたがたは、こちらに来たとき、もし彼らがすでに別の身体をまとっていなければ、亡くなった友人たちに会うことができる。その間は、彼らに今いる状態での仕事をさせておきなさい。

私のために書いているあなたは覚えているだろう。最初に私が来たとき、あなたは私がすでに地上を去っていたことすら知らなかった。私はあなたが受け身の状態にあるときに見つけ、あなたには意味

が分からなかったが、あなたが相談するであろう人々にはすぐに分かる象徴で署名してメッセージを書いた。それは非常に幸運な始まりであった。それによって、あなたは私の通信の真実性に確信を持つことができたのだから。

しかし、今夜は説教だけをすると言ったので、ここで祝福を述べて去ることにする。ただし、また戻ってくるつもりである。これがこの季節の最後の訪れではない。

追記。

去る前にもう一言。

私が休息していたあの一週間の中に、もしあなたが強く私を呼んでいたなら、あなたにはその力があ

ったかもしれない——非常に貴重で重要な体験を途中で断ち切ってしまう力が。だから、この説教の祝福のあとに残す最後の言葉はこうだ——いわゆる死者に対してであっても、自己中心的に強く求めすぎてはならない。

もしあなたの必要が真に大きければ、あなたを愛する魂たちはそれを感じ取り、自らの意志であなたのもとへ来るだろう。これは、感受性の高い人々の間では、地上の生活においてもよく見られることである。

第五十一の手紙

世界の四月

先週、あなたはいつか死ななければならない——
地上の言い方ではそうなる——と私は述べたが、
今度はあなたにこう断言したい。あなたは本当の意
味で死ぬことは決してない。あなたは天使と同じよ
うに不死であり、神そのものと同じように不死なの
である。

いや、これは矛盾ではない。

私はこれまでも不死について語ってきた。それは
私の大好きなテーマであった。しかし、「美しき存
在」との交わりを経てからは、それは単なる考えで
はなく、歓喜に満ちた確信となった。

「美しき存在」は、私たちが時間の中に生きていると
思っているのと同じように、永遠の中に生きてい
る。その天使の歌を、ここにもう一つ書き留めてく
れるだろうか。

緑の木々の中や、木の下で緑の光の中に私を見る
とき、あなたは私の近くにいると知りなさい。

静けさの中で私の声を聞くと、私はあなたのため
に語っているのだと知りなさい。

不死なるものは、死すべきものの中にある不死な
るものに語りかけることを愛する。そして、地上の
魂の心に眠っている喜びに呼びかけることには喜
びがある。

喜びが目覚めるとき、魂もまた目覚める。

あなたは神を男女の姿の中に探し、時にはそこに見出す。

しかしあなたは私を、自分自身の魂の中に探す。見つめれば見つめるほど、その姿はより美しくなる。

そう、私は自然の中にあり、またあなたの中にもある——そこに私を探すときに。

なぜなら自然は二重のものであり、その半分はあなたの内にあるからである。

すべてのものは一つであり、同時に二つでもある——私でさえもそうだ。だからこそ、あなたは私を見出すことができるのだ。

ああ、自由であることの魅力よ。地上や天上を思いのままに巡り、人々の魂の中を行き来することの喜びよ。

私はアザミの綿毛よりも軽く、それでいて星よりも長く続く存在である。

永遠に続くものは形のないものであり、形のないものだけが真に続く。

夢の城へと続く道は長くない。遠いものほど近くにある——だがそれを見つけるのは夢見る者だけである。

労働が軽やかなとき、報いは確かである。日々が重いとき、その報いは遅れてやってくる。

喜びなさい。そうすれば私はあなたに報いよう。

あなたの心の葉に私の名を書き記したい。しかしその文字を読むことができるのは天使だけである。

自分の心の花びらに私の知られざる名を宿す者は、その花そのものとして天使たちに受け入れられる。その香りは天に届く。

心の中には花粉がある、地上の子よ。それは信仰の花を実らせる。

魂の中には信がある、時間の子よ。それはあらゆるものの種を生み出す。

季節は巡り、また去っていく。しかし春は永遠である。

私はあなたの中に、かつて世界の四月に失われたものを見つけることができる。

第五十二の手紙

幸せな未亡人(※原文 “widower” だが文脈上は女性のため内容に即して訳しています)

ある夜、私は魅力的な女性に出会った。これまで出会ってきた誰ともまったく違う人であった。彼女は、重さが百三十ポンドではなく、おそらく一ミリグラムほどであったとしても、少しも女性らしさを失ってはいなかった。

私は静かな道を歩いていて、彼女が泉のそばに立っているのを見た。その泉を誰が創り出したのかは分からない。

この世界には、報酬のためではなく、ただ創ることそのものの喜びのために、あなた方の世界の彫刻家よりもはるかに美しい泉を形作る者たちがいる。

作り手が自分の仕事の中に感じる喜び——それこそが天国ではないだろうか。

私は泉のそばに立つ美しい女性を見た。そして私は、美が好きである——泉であれ女性であれ——から、その両方を眺めるために立ち止まった。

より美しいほうが顔を上げて笑った。

「誰かと話したいと思っていたのです」と彼女は言った。

「なんて素晴らしい世界でしょう！」

「そう感じておられるなら、私も嬉しい」と私は答えた。

「天国は過大評価されている、と言ったあの老婦人の意見には、私も賛成しません。」

「私のこと、覚えていないでしょう？」と彼女は言った。

「いいえ。以前お会いしたことがありましたか？」

「ありましたよ。そしてもちろん、思い出そうとすれば思い出せるはずです。」

そのとき私は彼女が誰であることを思い出した。数年前、ニューヨークへの旅の途中で出会い、人生と死の神秘、意志と運命について語り合ったことがあったのだ。

「あなたが話してくれたことの多くを、私は試してみました」と彼女は続けた。

「そして、それが真実であると分かりました。」

「例えばどんなことですか？」

「まず第一に、そして最も重要なことは、人は自分自身の環境を創り出すことができるということです。」

「ここではそれを簡単に証明できますね」と私は言った。

「ところで、この世界に来てどれくらいですか？」

「ほんの数か月です。」

「どのようにしてこちらへ来られたのですか？」

「喜びがあまりにも強すぎて、死んでしまったのです。」

「それは心地よい死であり、珍しいものですね」と私は微笑んで言った。「どのようにしてそうなったのですか？」

「医者は心臓発作だと言いました。長い間、あることを望んでいたのですが、それが突然手に入ったとき、その実感があまりにも強すぎたのです。」

「それで？」

「突然、自分がその達成を楽しむための身体を手放してしまったのだと気づきました。」

「それで？」

「私は、自分は身体ではなく意識であることを思い出しました。そしてその意識が保たれている限り、

自分もまた存在しているのだと分かったのです。だからそのまま、その達成を楽しみ続けました。」

「後悔はまったくなかったのですか？」

「ええ。」

「あなたはまさに哲学者ですね」と私は言った。

「無理に話していただくつもりはありませんが、ぜひそのお話を詳しく聞きたいものです。」

「ある人たちにはばかげて聞こえるでしょうし、私自身にも時々不思議に思えるのですが」と彼女は答えた。「私はずっとお金を——それも大金を——望んでいました。ある日、ある人が亡くなり、私に財産を残してくれたのです。その喜びがあまりにも強すぎたのです。」

「では、こちらではその財産をどのように楽しんでいるのですか？」

「いくつかの方法で楽しんでいます。夫と私は、美しい家を建てる計画を立てていました——もしお金があれば、という条件付きで。旅行をして、世界の興味深い場所を見て回る計画もありました。それに、美を創り出すことを愛していながら、資金不足で思うように活動できない友人も二、三人いました。今では、私の夫が唯一の相続人として財産を受け取っています。ですから私は、まるで肉体を持っているかのように、彼と共に、そして彼を通して、すべてを楽しんでいるのです。」

「では、彼はあなたがそばにいることを知っているのですか？」

「ええ。私たちは、生きている間も死後も互いを見捨てないと約束していました。私はその約束を守りましたし、彼も私が守っていることを知っています。」

「では、彼はいまどこにいるのですか？」

「旅をしています。」

「ひとりで？」

「私を除けば、です。」

「どこにいるのですか？」

「今はエジプトにいます。」

私は彼女に近づいた。

「彼を見せてくれますか？」と私は尋ねた。

「ええ、できると思います。さあ、来てください。」

言うまでもなく、私は二度も誘われる必要はなかった。

私たちはその男を見つけた——三十歳くらいの、なかなか魅力的な青年で、カイロの豪華な寝室にひとりで座っていた。どうやら私は、カイロで奇妙な体験をする運命にあるらしい！

私たちが部屋に入ったとき、その青年は本を読んでいたが、すぐに顔を上げた。彼女がそこにいるのを感じたのだ。私のことは見えていなかったと思う。

「愛しい人よ」と彼は声に出して言った。

「ピラミッドを見てきたよ！」

彼女は彼の額に手を置いた。すると彼は目を閉じ、彼女をよりはっきりと見るために集中した。

やがて彼の手がテーブルへと伸び、再び目を開けて紙と鉛筆を取った。私は、彼女が彼の手を導くのを見た。その手はこう書いた。

「友だちを連れてきたの。あなたに見える？」

「いや。」

男は声に出して話し、彼女は彼の手の鉛筆と、彼の内面的な感覚を通して応じていた。

「では気にしないで」と彼女は書いた。「この人は自己中心的な人ではないの。ただあなたを見せたかっただけ。私がどれほど幸せか話してあげたの——そして今、彼もその理由が分かったわ。」

「この旅は、まったく申し分のない喜びだよ」と男は言った。

「それは私があなたと一緒にいるからよ」と彼女は答えた。

「今日ピラミッドにいたときも、君は一緒だったのかい？」

「ええ。でも太陽の光の中ではあまりよく見えないの。けれど行ったことはあるし、月明かりの下で見たこともあるわ。それより、これからどこへ行くの？」

「君はどこへ行きたい？」

「ナイル川をさかのぼって、アスワンへ。」

「行こう。いつ出発しよう？」

「明後日よ。それでは、またね、愛しい人。あとでまた来るわ。」

そのすぐ後、私たちは外に出ていた——彼女と私は——エジプトの夜の柔らかな星明かりの中に。

「どう？ 私の言ったことは本当だったでしょう？」と彼女は、少し誇らしげに笑いながら言った。

「しかし、あなたは霊的な世界のほうへ進んでいきたいとは思わないのですか？」と私は尋ねた。

「愛以上に霊的なものがあるかしら？」と彼女は逆に問い返した。

「愛こそが法の成就ではないの？」

「しかし」と私は言った。

「私は最近、地上の人々に向けて手紙を書き、こちらに来た者はできるだけ早く地上から離れるように勧めました。」

「私のような恋する者は、あなたの助言には従わないでしょうね」と彼女は微笑んだ。

「それより教えて。ヘンリーが長い夜に私と共に過ごせること、彼が幸せでいられること——それは、私を失って悲しみに沈むよりも良いことではない

の？」

「最初の頃は？ あなたが去ったとき、彼は慰めようもないほど悲しんだのではありませんか？」

「ええ。でも私が彼のもとへ行くまでのことです。ある晩、彼は深い落胆の中に座っていました。私は彼の手を取り、その手でこう書いたのです。『私はここにいるわ。話しかけて。』すると彼は顔を輝かせて叫びました。『愛しい人！ 本当にそこにいるのかい？』私は鉛筆を通して答えました。『ええ、ここにいるわ。そしてあなたがこちらに来るまで、毎日会いに来るわ。』

彼は、自分がいわゆる“書くミディアム”であることをそれまで知らなかったのです。私が、彼とは異なる性質の物質の形でそばに来なければ、決してそうなることはなかったでしょう。

さあ、友よ」と彼女は続けた。

「本当に私に、もうハリーに会いに行くなと言うつもり？」

「どんな規則にも例外があるとされています」と私は答えた。

「今のあなたは、その例外のひとつのように思えます。」

「では、あなたがこの前書いた手紙に追伸を書いてくれる？」

「できるなら」と私は言った。

「あなたの話を書きましょう。読者は自分で判断す

るでしょう。」

「ありがとう」と彼女は答えた。

「しかし」と私は付け加えた。

「ヘンリーがこちらに来たときには、あなたたちは二人で地上から離れるべきです。」

「あなたは地上から離れたことがあるの？」

「ある程度は。私は今は、ある仕事が終わるまでここに留まっているだけです。」

「それから、あなたはどこへ行くのですか？」

「他の惑星を訪ねるつもりです。」

「ヘンリーと私も、彼がこちらに来たらそうするわ。」

さて、友よ。この話は、それなりの価値があるものとしてあなたに伝える。彼女のように、地上との結びつきが何よりも強く働く場合もある。しかし大多数の人々については、私は最初に述べた主張と助言をそのまま守るものである。

第五十三の手紙

魂の記録

これらの手紙を書き終えたら、他の惑星を訪ねるつもりだと私は述べたが、ここで言い添えておかねばならないのは、そのように宇宙を行き来する旅よりも、自分自身の内奥へと向かう旅のほうが、はるかに霊的な価値が高いと私は考えているということである。

実際の空間と時間の中を旅することは、人が他の土地や人々を知り、それらと自分との違いを見、その原因を学ぶうえで重要である。

しかし、静かな瞑想はそれ以上に成長にとって大きな要素である。もし霊的な感覚が開かれている人が、この二つのうちどちらか一つしかできないとし

たら、世界の果てまで旅をするよりも、森の奥の小
屋に座って、自分の魂の中に秘められている秘密
を探るほうがよいだろう。

自分の魂と親しくなりなさい。なぜ自分がこれをす
るのか、なぜあれを感じるのかを知りなさい。何か
について迷ったときは静かに座り、真理が自分の
内なる深みから浮かび上がってくるのを待ちなさい。

常に自分の動機を吟味しなさい。

「私はこういう理由でこの行為をすべきだ、だから
その理由で行うのだ」と言ってはならない。

そのような論理は自己欺瞞である。もし親切な行
いをしたなら、その理由を自分に問いなさい。その
中にさえ、利己的な隠れた動機を見出すかもしれ

ない。

もしそのような動機を見つけたなら、自分に対してそれを否定してはならない。住まいの壁にそれを貼り出す必要はないが、自分にはそれを認めなさい。そのような内的理解は、他人の動機を判断する際に、より深い共感と理解をもたらすだろう。

常に理想を目指しなさい。しかし、すべての感情を理想的な感情だとラベル付けしてはならない。本当にそうでないならば、そうではないのだ。自分自身に対して真実を語りなさい。それができるようになるまでは、自分の魂を探求する道においてほとんど進歩はないだろう。

地上の生の合間の期間は瞑想に適しているが、肉体にあるうちから瞑想の習慣を身につけるべきである。肉体にある間に身につけた習慣は、肉体を離

れた後も続く傾向がある。だからこそ、できるだけ身体的な習慣に縛られないようにするべきなのである。

毎晩夫のもとへ行き、彼の手を通して愛の言葉を書かせているあの魅力的な女性が、もし自分の時間の大部分をこの新しい世界についての知識を得ることに費やし、それによって彼を啓発することができるなら、彼らの交わりは純粹に善いものとなるだろう。

しかし残念ながら、そうではないように思われる。だから私は再び彼女を探し出し、父親のような助言を与えるつもりである。彼女は理解が早く、受け入れる心を持っているので、きっと私の話に耳を傾けるだろう。

彼もまた、彼女の体験に興味を持つに違いない――

—たとえばそれが彼女の体験であるという理由だけであった。そうだ、私は彼女をもう一度見つけなければならない。

私は自分自身の魂の記録の中で、驚くべき発見をしてきた。そこには、はるかに想像もつかないほど遠い過去にさかのぼる、私のすべての記憶が見つかった。一つの生で生み出された原因が、別の生でどのような結果を生んだのかを見て、私はこれから行方惑星巡りの旅よりも多くのことを学んだ。

すべては魂の中に存在している。あらゆる知識はそこにある。この考えをつかみなさい、できるならば。私たちの中で誤りのない部分は、隠された部分であり、それを明るみに出すのは私たち自身の務めである。

なぜ私が、肉体を離れた者たちに対して、地上の生

活の雑多な気晴らしやまばゆい幻影から離れるよう勧めるのか、これで分かるだろうか。

切り離された静けさの中でこそ、魂はその秘密を明かすのである。私は地上の愛に無関心なのではない。むしろ、地上で愛したすべての人々を、以前よりも深く愛している。

しかし、それを無分別にではなく、賢く愛することができれば、そのほうが彼らにとっても私にとっても良いのだと理解している。

それでもなお、時に地上からの呼び声は強く、私の心はこのヴェールのこちら側からそれに応えてしまうのである。

第五十四の手紙

達人への道の公式

友よ、私はしばらくの間あなたのもとを離れるつもりだ——おそらく長い間。

どうやら、地上に対する私の当面の仕事は終わったように思われる。私はさらに荷を軽くし、エーテルの波の上へと遠く——はるか遠くへ——飛び出し、探求の高揚の中で、いつの日か再びあの狭い誕生の門を通して苦しく地上へ戻らなければならないことを忘れていたのだ。

私は「美しき存在」とともに発見の旅へ出る。この伴侶はすでにその旅を経験しており、多くの驚くべきものへの道を私に示してくれるだろう。

あなたに別れを告げるのは寂しいことだ。私が以前の肉体で最後にあなたに会ったときのことを覚えているかね？

あの午後、私たちは次に再会するのが異国の地であり、しかもあまりにも不思議な状況であるため、世の半分の人々は私たちが再び会ったことを疑い、もう半分は本当に再会したのかと不思議に思うことになるなどとは、思いもしなかった。

教えてくれ。私は今夜の私よりも、かつてあなたにとって現実的であったことがあっただろうか。

昔、私と座っていたとき、今よりも次に私が何を言うか分からなかったことがあっただろうか。どれほど頭をひねっても、私がこれから何を話すかは分からないだろう。それが、少なくとも私が今も変わらず現実の存在である証拠になるはずだ。

いくつか伝言を残しておきたい。——に伝えてくれ、そして——に伝えてくれ、そしていつか私の息子に、勇敢で清らかな人生を生きるよう伝えてほしい。彼は見守られている。もし時折、内なる導きを感じるがあったなら、それを恐れず信頼するようにと伝えてほしい。光を自分の内に求めるようにと。

当分の間、世間一般に向けて語ることはもう多くはない。しかし、これらの手紙を出版してほしい。ただし、ごく個人的な段落だけは除いて。

ああ、しばらくはあなたに会えないかもしれない。悲しむ必要はない。私が去ったあと、また別の者が来るかもしれない。

扉を固く閉ざしすぎてはならない。しかししっかりと

守り、合図と合言葉を持たぬ者を入れてはならない。あなたはだまされないだろう。そのために私はあなたを訓練してきたのだから。

今夜はあまり長く書けない。地上を離れることにはやはり寂しさがある。しかし私は——あるいはこれから——この旅の興奮に全身を震わせることになるだろう。考えてみてほしい！ 遠い惑星を見、そこに住む存在たちと出会うのだ。「四角い顔の人々」に出会うだろうか？ おそらくそうだろう。

木星には、見るに驚くべき存在の種族がいると言われている。私は彼らに会おうだろう。彼らは、あの「美しき存在」よりも美しいだろうか？ 小さな地球を愛し、ここには多くの闘いがあるゆえに、たいていはこの近くにとどまっているあの存在よりも。

闘いの喜び！ それこそが不死の基調であり、力の

基調である。これを、私から世界への最後のメッセージとしよう。人々に、自分の闘いを楽しむように、無限の組み合わせと創造の可能性に胸を躍らせるように、遠い未来に備えながら今この瞬間を生きるように、そして一時的な失敗や失望の重要性を過大評価しないように伝えてほしい。

こちらに来て、自分の人生を全体の中で見渡すようになれば、自分たちを悩ませていた多くの原因が取るに足らないものであったこと、そして光も影もすべてが一つの絵を成すために必要であったことが分かるだろう。

私にも光と影があった。しかし私は何も後悔していない。達人は、水の抵抗を楽しむ泳ぎ手のように困難を楽しむのだ。

もしあなたに、闘いに立ち向かうことで得られる力

を実感させることができたなら——ただ勇敢に向き合うだけでなく、楽しみながら向き合うことの力を。健康な少年なら誰でも、戦いを楽しむものだ。血は速く流れ、神経は高鳴る。しかし冷静さを保つ者が最後には勝つ。

人生は闘いである。あなたはそれを征服するために物質の中にいるのだ——でなければ、物質に征服されてしまう。

この宇宙において、人間の意志ほど強いものはない——それが強力な力の単位によって導かれているときには。自分の力がどれほどであれ、それを人生の闘いにおいて最大限に生かしなさい。

忘れてはならないのは、あなたの敵は他人ではなく、状況であるということだ。人と戦えば、相手もあなたと戦う。しかし状況と戦うなら、それは知性を

持たないがゆえに、あなたに適度な抵抗を与えつつ最終的には屈するだろう——ちょうど筋肉を鍛えるのにちょうどよい抵抗のように。

そして、リズムの法則を忘れてはならない——すべての背後にあるものだ。リズムを信頼しなさい。それはこれまで一度も裏切ったことがなく、これからも決して裏切らない。

自分の満ち潮を見極め、それに乗りなさい。避けられない引き潮が来たときには、休むか、瞑想しなさい。リズムから逃れることはできない。それと共に働くことで、それを超えるのだ。

あなたは若返ることさえできる。時間にもまた潮があるからだ。人生という長い大波の中には、多くの小さな波がある。

まだ語り残したことが多いように感じる。しかし、いつの日かまたあなたに会おうだろう。

(終わり)